

鞠智城

東京シンポジウム 成果報告書 2016

KIKUCHIJO TOKYO SYMPOSIUM

鞠智城の終焉と平安社会
(古代山城の退場)

熊本県教育委員会

鞠智城 東京シンポジウム 二〇一六

熊本県教育委員会

鞠智城東京シンポジウム 二〇一六

鞠智城の終焉と平安社会

(古代山城の退場)

シンポジウム概要

鞠智城東京シンポジウム

鞠智城の終焉と平安社会

（古代山城の退場）

一、開催日時等

日時　平成二九年一月二八日（土）一三時〇〇分～一七時三〇分

場所　明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール

主催　熊本県・熊本県教育委員会・明治大学日本古代学研究所

後援　明治大学博物館・明治大学社会連携機構・熊本県文化財保護協会

二、講演等プログラム

・報告 「平安時代の鞠智城跡」

西住 欣一郎（歴史公園鞠智城・温故創生館長）

・講演① 「古代山城の真実—鞠智城はなんのためにつくられたのか—」

井上 和人（明治大学大学院文学研究科特任教授）

・講演② 「東アジア世界の変貌と鞠智城—国際環境から見た九世紀以降の鞠智城—」

榎本 淳一（大正大学文学部歴史学科教授）

・講演③ 「平安時代の大宰府と古代山城」

松川 博一（九州歴史資料館学芸研究班長・学芸員）

・パネルディスカッション

コーディネーター 佐藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

パネラー 井上 和人

榎本 淳一

松川 博一

西住 欣一郎

目次

シンポジウム概要	
主催者あいさつ	1
来賓あいさつ	7
報告 「平安時代の鞠智城跡」	
一、鞠智城跡の位置と環境	
二、発掘調査の成果	14
（一）鞠智城跡の時期区分	
（二）建物跡の変化	
衆議院議員	
熊本県教育長	宮尾千加子
明治大学名誉教授	吉村 武彦
木原 稔	4
西住 欣一郎	2
	8

(三) 貯水池跡の変化

(四) 出土土器量の変化

講演①

井上和人

29

二、はじめに 31

二、古代山城の分布状況と類型 32

(一) 古代山城の三つの類型

(二) 古代山城の分布

三、古代山城の築造年代 38

(一) 齊明朝築造説の非

(二) 天武朝以降までの築造継続説

(三) 大宰府防衛説の非

四、古代山城を正しく理解する 45

(一) 古代山城防衛網の構築

(二) 唐の軍事的侵略という危機

(三) 高安城の軍略

(四) 筑紫野谷の軍略

五、山城群の軍略	51
六、防人の真実	52
七、古代山城無益論	54
八、古代山城の否定と超克・日本列島古代中央集権国家の構築	55

榎本 淳一

四 九世紀以降に鞠智城が存続した理由について 77

(一) 鞠智城の機能・特殊性

(二) 菊池郡との関わり

講演③「平安時代の大宰府と古代山城」

はじめに・存続する古代山城 83

一、大宰府の軍制 84

二、大宰府と大野城

三、大宰府と鞠智城

四、古代山城と寺院

おわりに・大宰府の危機管理と古代山城 99

松川博一

81

パネルディスカッション

101

付録 参考資料 41

講演③ 資料（松川 博二）
講演② 資料（榎本 淳二）
講演① 資料（井上 和人）
報告 資料（西住 児一郎）
シンポジウム次第

1 11 23 31

【資料編】

※今回の成果報告書を刊行するにあたって、当日使用した資料を「資料編」として巻末に
まとめました。

主催者あいさつ

主催者あいさつ①

熊本県教育長 宮尾千加子

皆さん、こんにちは。熊本県の教育長をしております宮尾と申します。本日はお忙しい中、こんなにたくさんの方にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。心からお礼を申し上げます。そして、本日はお忙しい中、熊本県選出で衆議院議員の財務副大臣、木原稔先生をはじめ、たくさんの来賓の方々にもお越しいただいております。ありがとうございます。

また、昨年四月に発生いたしました熊本地震に際しましては、全国の皆さまからたくさんのご支援や、励ましの言葉をいただきました。本当にありがとうございます。この場をお借りしまして、改めて感謝を申し上げたいと思います。地震からの復旧・復興は本格的にはこれからでございますが、皆さまのおかげで一步、また一步と前に進みつつあります。ありがとうございます。

本年度は、先の熊本地震により、このシンポジウムも実は開催が危ぶまれていました。しかし、明治大学日本古代学研究所をはじめ、関係者の皆さまのご支援ご尽力のおかげで、本会場にて開催することができました。重ねてお礼を申し上げたいと思います。

さて、鞠智城は、皆さまもご存じのとおり、今から約一三五〇年前、七世紀



後半の激動する東アジア情勢の中で大和朝廷によって築かれた古代山城で、全国有数の重要遺跡として高く評価されております。熊本県では、昭和四二年の発掘調査を手始めに調査研究を継続し、今年で五〇年という節目の年を迎えました。

これまでに八角形建物跡や貯水池跡などをはじめ、数多くの重要な遺構や遺物が発見されました。なかでも、平成二〇年一〇月に出土いたしました百濟系銅造菩薩立像は、百濟の高級官僚が日本の古代山城の築城に関与したとする『日本書紀』の記述を裏付ける重要な資料として、国内外において大きな注目を集めたところでございます。一方で、これまでの調査成果を報告書にまとめ、講座やシンポジウムなど、さまざまなお会話を通じて鞠智城の歴史的価値を明らかにしつつ、認知度や知名度の向上を図つてまいりました。

本日のシンポジウムにおいては、「鞠智城の終焉と平安社会－古代山城の退場－」をテーマに、約三〇〇年間、五期にわたって存続した鞠智城の、IV期からV期に相当する平安時代の様相について、活発な議論がなされるものと期待しております。今回のシンポジウムを通して鞠智城に関する理解と研究が進み、さらに歴史的・学術的価値が高まり、多くの皆さまに広く認知していくことを強く願うとともに、震災により多くの熊本の宝が被害を受けた中において、創造的復興への一助となることを祈念しております。

結びに、本日ご参加の皆さまのご健勝、ご活躍を心からお祈り申し上げまして、あいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

主催者あいさつ②

明治大学名誉教授 吉村武彦

皆さま、ようこそ明治大学にいらっしゃいました。心から歓迎いたします。ただ今ご紹介いただきました明治大学名誉教授の吉村です。明治大学では、本日、明治大学の付属高校からの推薦入試が行なわれておりまして、本来あいさつすべき石川日出志文学部長兼日本古代学研究所長が参加できなくなりました。そのため、かつて日本古代学研究所所長をしていました私が、明治大学を代表してあいさつを申し上げます。

実は、二〇一四年から鞠智城・東京シンポジウムは、明治大学のこのアカデミーホールで開催されてきました。私も講演をさせていただきましたけれども、引き続き今年度も明治大学で開催されますのは、明治大学の社会連携、地域連携の発展にとつて荣誉だと考えています。

明治大学の創立は、一八八一（明治一四）年で、今年で一三六年が経ちました。今までに三木武夫、村山富市の二人の総理大臣が出ています。また、この数年間受験生が十万人を超えています。最近ではマグロ養殖で知られる近畿大学に一位を譲っておりますが、関東では今年も人気を保っています。昔では考えられない「おしゃれな大学」というのが明治大学の一つの美辞麗句になつていまして、この十年間の明治大学の変化に驚いている一人であります。



実は、明治大学の最も多い蔵書は漫画であります。今のところ展示はごく一部しかしていませんが、それで、世界漫画図書館みたいなものを造るとか、造らないとかという、そういう話も出ているわけであります。こうした受験生が増えるというのは、単に教育への熱意だけではなく、かつては「就職の明治」といわれていたのですが、研究に対する積極的なチャレンジがあることは間違いないと思っています。

明治大学の日本古代学研究所ではさまざまな研究活動を行なっていますが、二〇一四年度からは三度目になる文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の資金援助を受けています。現在は、日本古代学研究の世界的拠点形成に採択されまして、古代学研究の世界的拠点を目指して研究中であります。文部科学省の支援は五年間で総額一億一、三三七万円ということですので、人文分野ではかなりの大型研究になるかと思います。

そうした地域研究の一環で、熊本県との連携事業を行なっているわけでありますが、昨年の一月三日には熊本で「火の国・熊本の古代を語る」という熊本講演会を、熊本県のご協力のもとで実施いたしました。その際、熊本城と阿蘇神社一本目も一階で写真展をやっておりー見学いたしましたが、私もありの悲惨さに驚きました。地震からの復興も先ほど教育長が言わされましたように、これから課題になるかと思います。ぜひ元気に復興していただきたいし、われわれも何らかの支援を続けていきたいと思っています。私は古代学の世界的発信を目指していますので、このシンポジウムも東京だけではなく、できましたら世界

に発信できるようにパワーアップしていただきたいと、このように願っています。

鞠智城の関係でいいますと、福岡県筑紫野市の前畠遺跡で、大宰府の外郭線と関係するのではないかといわれています土壘が、五〇〇メートルの規模で見つかりました。私も先日見学してきましたが、想像以上の規模かと思います。現在、その保存を巡って、どうしたらいいかという諸活動が行なわれ始めています。

このように、大宰府の全貌も必ずしも明らかになつてゐるわけではありません。鞠智城の研究もまだまだ強化する必要がありますし、鞠智城は百濟系の移住民によって建設されたわけですので、今後はぜひ東京だけではなく、国際化していくいただきたいと思っています。明治大学と熊本県の連携が強化されることを祈念して、あいさつに代えさせていただきます。本日はよろしくお願ひいたします。

来賓あいさつ

来賓あいさつ

衆議院議員 木原 稔

ただ今ご紹介をいただきました衆議院議員の木原稔と申します。鞠智城に非常に関心を注いでいる者の人であります。

本日、このシンポジウム、これまで数回開催をされておりますけれども、大体週末が多いもので、週末は国会議員は地元に帰るものですから、お邪魔することがなかなか叶わなかつたのですが、今回は何とかお邪魔をしたいということで、駆けつけてまいりました。

会場に来て驚きました。先ほど吉村名誉教授が言われましたけれども、明治大学は随分変わりました。私もO.B.ではないのですが、三〇年ぐらい前でしょか。受験をした記憶がありまして、あのときは随分古い建物だと思っていましたが、こういう本当に立派な建物になりまして、しかも、本日、吉村名誉教授はじめ、明治大学のお取り計らいで、このような素晴らしい会場を提供していただいたことに、心から感謝を申し上げます。

また、こういうお休みの日にも関わらず、この会場にたくさんの方々がおいででございます。熊本県関係者の方々だけではなくて、本当に歴史に興味のある皆さま方、また、研究者の方々をはじめ、これほど多くの方々が関心を



寄せていただいておられるということに、非常に私も勇気づけられますし、本当にありがたいなというふうにあらためて思いました。

本日のテーマは、鞠智城の終焉ということであります、確かにそこは非常に気になるところであります。

今、京都は『日本書紀』一、三〇〇年ということで、大変盛り上がっているということであります、鞠智城が歴史の舞台に登場したのは、おそらく『続日本紀』だったのではないかと思います。そこで表舞台に出てきたわけですが、普通に生活をして、普通に勉強していると、菊池辺りの情勢というのはなかなか分からぬ中で、この鞠智城が約三〇〇年間どういう経緯をたどり、そして、どういうふうに歴史と共に歩んできたのか。また、終焉を迎えたのかということは、これはやはりそれぞれの専門の研究者の皆さま方に、教えていただかなくてはいけないことだらうと思います。そういうことで、本日もたくさんの方がご関心を寄せていただいているものというふうに思つております。

それから、話は飛びますけれども、宮尾教育長が先ほど挨拶をされました、一つ補足をさせていただくと、菊池川流域は今年、日本遺産に申請をいたします。申請なので認められるかどうか分からぬのですが、しっかりと私も後押しをさせていただきたいと思います。非常に土地が肥えていて穀倉地帯ということで、米作りの歴史というものを正面に掲げて、本日いらっしゃっている菊池市と山鹿市、それから玉名市と和水町の四市町で、現在、準備を進めているところですが、この鞠智城も米倉という役割、兵站という役割もあつたということは、もうそこはとても肥沃な大地で、米作りが二、〇〇〇年に及ぶとても盛んなところだつ

たということが、証明されているわけですから、そういう観点から日本遺産に何とか認められることで、また、全国的な注目を集めたい。それがまた、熊本地震からの復旧につながっていくのではないかなど、そういうふうに思つております。

現在、財務副大臣として、昨日、衆議院の第三次補正予算が通過をしましたが、また、しっかりと熊本の復興のために頑張っていきたいと思っております。本日いらっしゃっている皆さま方、最後まで充実したシンポジウムになりますことを心から祈念いたしまして、私からのあいさつとさせていただきます。おめでとうございます。

報告 平安時代の鞠智城跡

報告者紹介

西住 欣一郎（にしづみ きんいちろう）

熊本大学大学院文学研究科修士課程修了。熊本県文化課で埋蔵文化財担当、鞠智城跡調査主査、課長補佐を経て、現在、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」館長。専門は考古学。

報告 「平安時代の鞠智城跡」

歴史公園鞠智城・温故創生館長 西住欣一郎

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました西住でございます。私のほうからは、「平安時代の鞠智城跡」とということで、ご報告をさせていただきたいと思います。本日は、パワー・ポイントを使いながら、ご説明をさせていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

一、鞠智城跡の位置と環境

皆さんもよくご存じだと思いますけれども、ここが鞠智城ですが、九州には大宰府があるて、大野城、そして基肄城があります（図1）。それから、対馬に金田城があるわけですが、実は何でこういうふうに九州を、大宰府を守り、瀬戸内海沿岸にこういうふうにお城がたくさんできたかということをお話しします。

六六三年の白村江の戦いですが、朝鮮半島は高句麗・百濟・新羅という三つの国に分かれていたのですが、実は新羅が中国の唐と連合をして、百濟を滅ぼ





図1 古代山城の分布

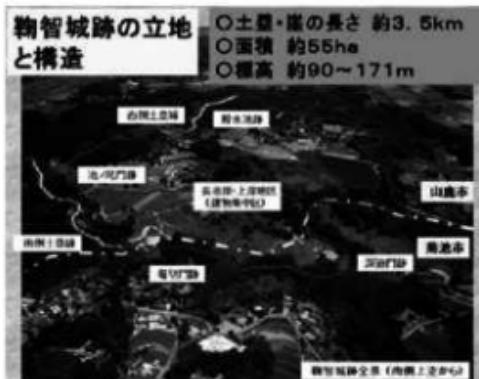


図2 鞠智城跡の立地と構造

山城というのですが、それらを唐と新羅の連合軍が入つてきそなルート上にお城を築いて、防衛体制を整えていつたと、そのような流れになります。

これは南のほうからみた鞠智城の航空写真（図2）です。が、非常に平ら、山城というわりには平らな場所が非常に

してしまいます。百濟が、日本に応援を求めてきたので、日本から応援をするために、唐と新羅の連合軍と、この白村江で戦いを行うわけです。実はこれで負けてしまうわけです。この戦いがどれだけ大変だったかといふのを物語るものに、この朝倉宮というのがあるのですが、ここに当時の齊明天皇が天皇自ら最前線基地に来られたわけです。天皇自ら最前線基地に出てきた戦いは、この白村江の戦いが最初であつて最後じやないかなと。それだけ重要な戦いであつたということが分かると思うのですが、これで敗れてしまつて、次は唐と新羅が攻めて來るのではないかということで、朝鮮式山城とか、神龍石系山城、これらをまとめて古代

多いというの、一つの特徴になります。この実線で囲った範囲がお城の範囲になります。非常に大きな城ですから、現在では山鹿市と菊池市、二つの行政区にまたがる、それぐらい大きなお城になります。

現在、分かっているところで、南側に深迫、堀切、池ノ尾というふうに三箇所の門があつて、自然の地形を利用しながら、崖で囲まれています。そこに部分的に土でできた壁をさらに造ります。それを土塁といふのですが、南側のところにこういう土塁線を築き、北側、西側のほうにも土塁を造っていくという、そういう補強をして防衛に当たっているというふうになります。

それから、本日、話をする上で大事になつてきますのが、この建物が集中するところです。ここに建物が非常に集中をしています。こここの話と、それから、こここの貯水池の話をしていくので、こういう場所にあるということを、頭の隅に置いていただければというふうに思います。

今、お話ししました土塁の長さが約三・五キロ、非常に大きいです。それから、面積が五五ヘクタールの広さがあります。それから、古代山城というわりには標高が約九〇～一七〇m、一番高い所で一七一mです。そんな急峻な山ではなく、台地にちょっと毛が生えているような感じと、そういう地形の中に鞠智城があるというふうに、まずご理解いただければというふうに思います。

二、発掘調査の成果

ここから二番目の項目に入つていきますが、これが鞠智城での発掘調査の成果、建物とか、どういう所で

生活の痕跡が地面に残っているものですから、それを見つけて調べていくと中身が分かるという、そういうものを遺構といいますが、番号を付けているのが建物跡です。それから、貯水池跡。ここに非常に大きな、なんと五三〇〇平方メートル。非常に大きな池の跡を見つけております。それから、本日お話をする中でもう



図3 発掘調査の成果

出ているかという観面を示しているところです（図3）。実は先ほどからお話しがありますように、一九六七（昭和四二）年から二〇一〇（平成二二）年まで約三二回の発掘調査を行っております。私も若いときに、現場に立たせていただいて、発掘調査の仕事をさせていただきました。それに基づいて、本日ここでお話をしているという、そういうような感じなのですが、自分で発掘したところをこうやって皆さんの前でお話ができるというのはとてもうれしく、やりがいを持つて今からやらないといけないなど、気持ちを新たにしているところです。

実は、本日の話のなかで一番大事なところは、「主な検出遺構」としましたけれども、地面に刻まれている昔の生活の跡のことを、考古学用語で「遺構」といいます。その

出ているかという観面を示しているところです（図3）。

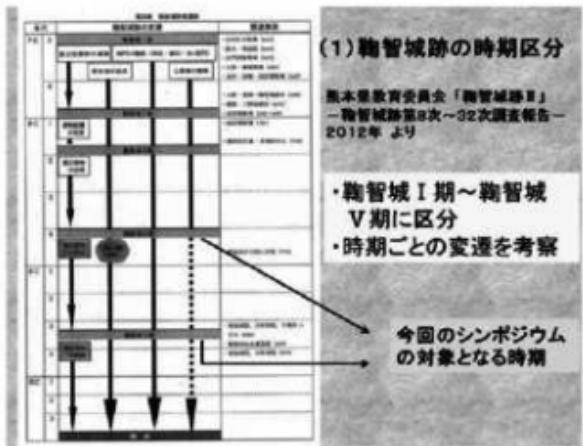


図4 鞠智城の時期区分

一つポイントになるのが、出てきている品物、「遺物」といいます。特に、皆さんのがよく日常生活で使われる食器類がたくさん出てくるのですが、須恵器とか、土師器とかありますけれども、そういう物も出ていますし、木簡とか百済系の銅造菩薩立像という、そういう品物が出ています。

そういう成果が認められまして、二〇〇四（平成十六）年に国の史跡として指定をされています。五五ヘクタールと言いましたけれども、それを含む範囲の六四・八ヘクタールが国の史跡になっております。そういう非常に大事な、後世に伝えていかなければならない重要な遺跡であります。

（一）鞠智城跡の時期区分

本日お話する中身は、二〇一二（平成二十四）年に発行しました『鞠智城跡Ⅱ』という発掘調査の総合報告書があるので、それにまとめた成果を基に、皆さんにお話をしているところです。

その中にⅠ期からⅤ期の時代区分をやっております（図4）。

それはここに示しているように、七世紀の第3四半期、一世紀を二五年ずつ区切って四つに分けるのですが、その三番目

のころ、七世紀の第3四半期ごろに鞠智城が造られて、実は一〇世紀の第3四半期、約三〇〇年間、鞠智城が存続しているということが、出土している遺物から言えます。先ほどの食器とか、そういう物です。その変化を並べていくと三〇〇年間使われているということが分かるわけです。それを使いながら本日お話を進めますけれども、私に与えられている題は平安時代になりますので、このIV期とこのV期、後ろから二つの時期がこの平安時代の鞠智城になります。ここに焦点を当

てて、本日はお話を進めたいと思います。

先程の図を、少し拡大をしているところ（図5）なのです
が、先ほども言いましたように、平らなところに建物がたくさん建つており、それから、貯水池。実はこのIV期になります
して、それまでは建物といふのは地面に直接穴を掘つて、そ
の穴に柱を建てる掘立柱といふ建物が主だったのですが、こ
のIV期になるとそうではなくて、基礎となる柱を建てる石の
建物ができる、それも基礎が非常に大きくなるという特徴
があります。それから、その基礎建物が実は一度、後で詳し
く話しますが、この基礎建物が一度壊れたのをもう一度立て

IV期・V期の様子

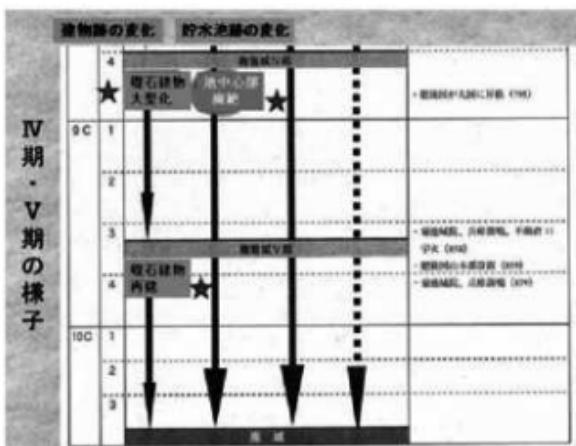


図5 鞠智城IV期V期の様子

直していると、そいつた現象がV期になつて見られているということです。それから、池について見ますと、後でまた別の図面を出すのですが、このIV期になつて池の中心部が廃絶といいますか、使われなくなるという、そういう事実が分かりました。何でそうなつたのか分からぬのですが、想像たくましく考えてみようと思います。



図6 鞠智城IV期の建物跡

(二) 建物跡の変化

これがその建物跡を具体的に見たところです(図6)。これは平安時代の最初のほうに当たりますIV期、八世紀の第4四半期から九世紀の第3四半期に当たる部分、ちょっと難しい言い方をしていますけれども、八世紀の終わりから九世紀の終わりというふうに簡単にいふことができます。その黒く塗つて表示しているところが建物で、構造が不明な一棟を含め一六棟の建物がもう見つかっていますが、種類ごとに分かれます。先ほど言いましたように、この地面にそのまま柱を建てる、これを掘立柱というふうにいふのですが、掘立柱の建物も側柱と総柱に分かれます。側柱というのは建物の周囲だけに柱を立てて、総柱というのは、中のほうの床を支え



60号建物跡(発掘調査時): 跡立柱建物(北から)

図7 60号建物跡

るための柱もあるという建物になります。それから、礎石の建物が九棟、礎石の建物か分からないのが一棟あります。それから、礎石建物と掘立柱を同じ建物に併用している建物、そういう珍しい建物があります。こういう種類の建物があるのですが、その中から代表的な建物を今から見ていきたいと思います。

これが六〇号建物といって、掘立柱建物です(図7)。人が建っているところに柱が建つということで写真を撮っていますが、柱を据えるために穴を四角に掘っていくのですけれども、その跡がこの四角になつているところです。柱の中間に丸く書いていますけれども、これがその柱を建てた跡で土の質が違つたり、色が違つたりするものですから、ここに木の柱が建っていたのだな

というものが発掘調査で分かるわけです。

写真を見ていて、皆さん、少し普通の発掘調査とは違うな、どうして全部掘らないんだというふうに思われていると思うのですが。実は、発掘調査をするというのは非常に格好はいいのですけれども、発掘調査をすることでその遺跡が壊れてしまうのですから、必要最小限度の事実をつかんだら、もうそこで発掘をやめて、これを埋め戻して後世に残していくこうということもとても大事になります。

皆さん、発掘現場に行かれたりとかすると、普通だったらこれ

は全部掘つてしましますよね、柱の建つてているところを。それをせずに、こういうふうに残してあります。学問がどんどん進んでいきますので、将来また考古学の学問が進んだときに、再調査ができるような状況にして今保存をしていると、そういう状況になります。これからお見せする写真は、そういう写真が多いもので、なんか中途半端な発掘だなど感じられるかと思い、それはそうではございませんので説明をさせていた

だきました。それだけ貴重な物だから、最小限度の発掘で成果を上げて、あとは後世に残していくこうと、そういう気持ちで調査をやっているというふうにご理解いただきたいと思います。



59号建物跡(発掘調査時):礎石建物、周囲に築る溝、入口(立根部)(南東から)

図8 59号建物跡

それから、これが先ほど言いました礎石建物で、五九号建物跡です(図8)。五九号というふうに、見つかった物に見つかった順番に番号を付けていくわけです。実はこの建物を見ていただくと、周りに溝が巡ることが特徴です。これは湿気対策といいますか、侵入といいますか、そういうしたものから守るために特別に区画を設けた建物になります。

柱が建つていた場所に人が立っているのが五九号建物の礎石ですが、実は皆さん、他にも石がありますよね。これは何

だろうというふうに思われていると思いますけれども、実はこの建物が建つ以前の建物の一部が、古い建物がここに一部見えているわけです。ですから、この五九号建物を掘つてしまわないと、下の建物が分かれません。ですが、これ以上掘つていなくて、これで調査が終わっているわけです。建物があるというのだけ確認してやめています。

それから、溝の部分です。溝の部分が一箇所だけ、溝を掘つていません。これは、わざと溝を掘り残して、通路として使つていているのではないかというふうに考えているのですが、立橋部といいます。ですから、この建物はこちらのほうから入つていくということだと思います。この部分におそらく入り口の扉があるので、ここを通路として残しているのではないかなと思います。

皆さん、もうお気づきでしょうか、手前の、小さな石は何だと思われますか。建物とは関係ないところに小さな石がありますよね。これは現場でいろいろと考えたのですが、ここに入り口があるのであれば、これは高床式の建物になりますので、扉は高い場所にあるわけです。ですから、ここにハシゴをかけて登つたのではないかと、そういうことを想像しています。発掘調査でハシゴは出てきませんでしたが、それを支える多分何らかの石だろうということで、そういうことを発掘現場で考えました。これは、ちょっと当たつているかどうかは分かりませんが、非常にその可能性は高いのではないかというふうに思います。

これが先ほど言いました非常に珍しい建物で、掘立柱と礎石が同じ建物に使われている掘立柱・礎石建物併用の建物になります（図9）。非常に構造が分かりにくいので、これを思い切つてこういうものではない



11号建物跡(挖掘調査時)：獨立柱・礎石使用(北東から)

図9 11号建物跡



12号建物跡(復元平面明示)：獨立柱・礎石使用(南から)

図10 12号建物跡 (復元平面明示)

かなというふうに遺構を表示したのがこれになります(図10)。周りに掘立柱が巡って、真ん中に礎石の建物があるという、非常に珍しい建物です。こだけではなくて、本日後ほどお話をあるかと思うのですが、大野城の中にそういう珍しい建物を類例として挙げることができます。

次に、IV期の後、V期です。V期は

九世紀の第4四半期から一〇世紀の第3四半期までですが、ここで黒く塗っているのが建物です(図11)。ここに四棟、ここに一棟あります。これらはすべて礎石の建物、総柱の建物で、五棟見つかっています。先ほど、IV期では建物の礎石が大きくなり、V期で立て直しがありますというこのことをお話ししたかと思います。

その証拠を今からご報告をしたいと思います。

これは五六号建物(図12)ですが、火災後に建て替えをやっています。何で火災かということが分かるかということを後で説明します。建物の柱が建っているところに人が立っていますが、人が立っていない少し違う石があるかと思いますけれども、これはこの建物よりも一段階古い時代の建物の礎石が、表面に見えて

いるというふうにご理解いただきたいと思います。それが何で分かつたかといいますと、土層の堆積を見るために少し部分的に、人工的に深掘りをして土層を見ておきます。それを今から説明します。

これが、建物のあるところに、下図の C → D のところを深掘りして、土層の状況を見たところで、それを断面図で示しているのが上のほうになります（図13）。整地1層としている部分が、五六号建物の基礎を据えるために整地をした跡になります。基礎の建物を建てるときに、きちんと一度平らにして土を固めた上に礎石を乗せるのですから、その痕跡が整地1層になります。これをさらに先ほど言いました小さな石が



図11 駒智城V期の建物跡



図12 56号建物跡



図13 56号建物跡堀断面

ありますよと、この五六号の下層建物というふうに名前を付けていますけれども、それがその下の、この黒く見えている部分に部分的ですけれども、こういうふうにあるわけです。

それに伴う形で、ここで a 層・b 層としています、ここに焼けた土が確認されました。焼けた土といふのは真っ赤になるので分かります、それから、炭化したお米。炭になつたため、腐らずに残るわけです。ですから、この建物はお米を貯えていた倉だということがこれで分かるわけです。焼けた土と炭になつたお米ということは、この建物が火災に遭っているということが理解できるわけです。この建物、IV期の建物ですよね。先ほど言いました五六号、この下層建物が火災で焼失したものですから、V期になって建て替えをしたということになります。

何でこういうふうに建て替えをしたかというのは、鞠智城のお城の性格にもよるのですが、火災に遭つたところにまた大きな倉を立てる必要があつたわけです。それは一つ、鞠智城の性格といいますか、機能を表しているのではないかなどというふうに思います。

(三) 貯水池跡の変化

次に、貯水池のお話をします。これは貯水池のイメージ図(図14左)ですが、ここが水をくむ場所。ここが非常に珍しいんですけども、建築をする材料を貯えている場所。池頭と池尻部の差が約八メートルぐらいいあるものですから、水を貯えるのには、一度に貯えることはできませんので、この絵では三箇所で仕切っていますけれども、何箇所かに仕切つて水を貯めていた場所があります。飲み水をくむ場所、それから、次

機的なことですぐにでも造らなくてはいけない、すぐにでも修理ができるような状況をつくっているのです。わざわざそこから木を集めても間に合いませんので、いざというときに修理ができるよう建築材を貯えている、そういうのが見つかっています。古代山城の中では、今のところ鞠智城だけにしか見つかっていないという、そういうとても貴重な跡になります。

この表ですが、池の中心部と池尻部では少し終わり方が違うものですから、それを示しております(図15)。

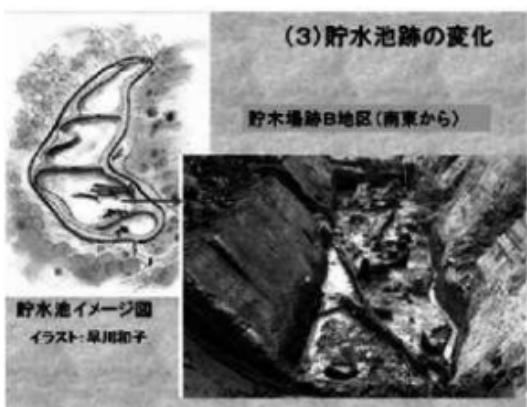


図14 貯水池跡

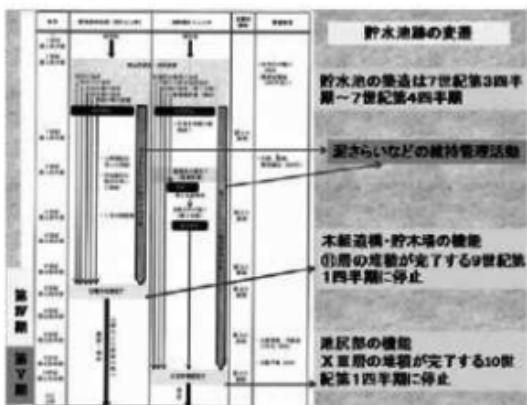


図15 貯水池跡の変遷

の区画が建築材を保管する場所といったふうに。

これがその建築材を保管する場所の写真(図14右)ですが、実はお城で使う建築材を水に漬けてわざわざ保管をしているものが見つかっているわけです。だから、非常に危

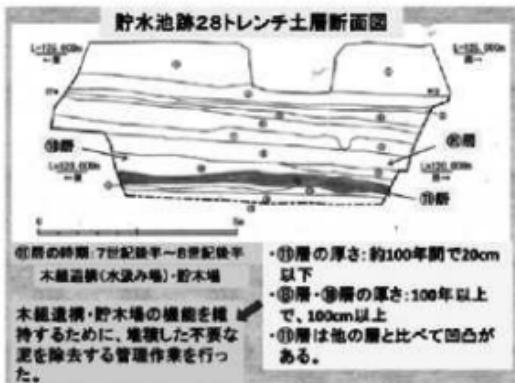


図16 貯水池跡28トレンチ土層断面図

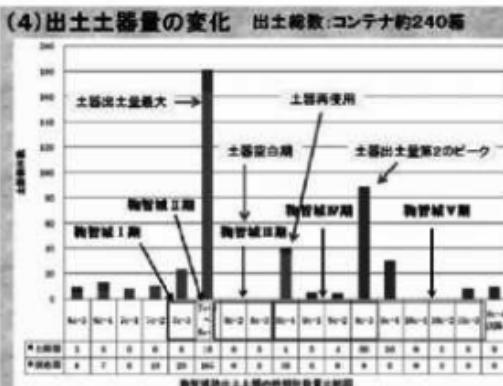


図17 出土土器量の変化

池はだいたい七世紀の後半に造られているわけなのです。ですが、実は池というのは皆さんよく分かっていますけれども、堆積物を除去しないと、どんどん土がたまつていって維持ができなくなります。それでいろいろな維持管理をするためには、泥さらなどの活動をしてい

くわけです。それをやめたというのがこの堆積で分かるわけです（図16）。この木組造構とか、そういうものもう機能しなくなつたので、維持管理をしなくなり、その上に上が重なつていきます。それで一〇世紀には終わつてしまふわけです。

この図をみてみると、実は⑪層がでこぼこしていまして、これは泥さらいをした跡なのですが、その上の層、⑩層が堆積するということで、廃絶される。もう維持管理はしなくなつたということが証明できるわ

けです。それがⅣ期になるわけです。ですから、お城の性格でもう建築はいらなくなつたので、池のことを管理しなくなつたとということがいえるかと思います。

(四) 出土土器量の変化

これが最後になります。実は出土遺物が変化をしていきます(図17)。これを見ると、Ⅱ期が一番最大になります。それから、土器が全然出なかつた時代がⅢ期。それから、Ⅳ期になつてまた土器を使い始めます。それから、このⅣ期の最後になつて第二のピークが来るという。この土器の遺物の出土量を見ると、ここでもお城の機能を考えていく上の、一つのヒントが隠されているようになるかと思います。

どうもありがとうございました。

講演①

古代山城の真実

鞠智城はなんのために

つくられたのか

講演者紹介

井上和人（いのうえ かずと）

東京外国语大学卒業。東京大学文学部考古学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、奈良文化財研究所副所長を経て、現在、明治大学大学院文学研究科特任教授。東洋文庫客員研究員。奈良文化財研究所名誉研究員。文學博士。専門は古代考古学。

講演① 「古代山城の真実 - 鞠智城はなんのためにつくられたのか -」

明治大学大学院文学研究科特任教授 井上和人

井上和人と申します。私は今紹介にありましたように、明治大学で教員を務めております。また、同じく主催者であります明治大学日本古代学研究所のメンバーでもございます。今日は大勢の方に来ていただい
て、本当にありがとうございます。同時にこのような機会を与えていただいたことに対し、深く心から感
謝したいと思います。また、こんなに大勢の方々の前で話すのは非常に光榮な
のですが、かなり緊張しております。

本日のテーマは「鞠智城の終焉」ですが、私は、あえてもう一度問い合わせ直して
みたいと思うのです。なぜ鞠智城は造られたのか。何のために、何を目的とし
て造られたのか。もちろん、今まで鞠智城に限らず、古代山城についての研究
には膨大な蓄積があります。鞠智城の性格・役割についても、いろいろな議論
が積み重ねられていることは言うまでもありません。けれども、私、実は今までとは違う理解に到達してしまったのです。これは困ったなと思うのですが、
皆さんにうまくお伝えできれば幸いです。



一・はじめに

年表、歴史（資料編18頁）については、先ほど、西住さんの話にもありましたので詳しく述べません。

ただ、一つ重要なことは、六六〇年に唐と新羅の連合軍によつて百済が滅ぼされます。日本は、それ以前から数百年の間、長く百済と同盟関係を結んでいました。これは高句麗や新羅による脅威に対する軍事同盟ですが、百済をもう一度復興させなければ、日本列島が危ないということで、援軍を派遣することになります。時の天皇、齊明女帝自ら大軍を率いて九州の朝倉宮に行きます。

ところが、ここで齊明女帝が崩御するのです。百済支援はいつたん、頓挫します。後を継ぐのが、その長男であつた中大兄皇子です。彼は六六一年、齊明女帝が亡くなつてから七年の間、本来天皇に即位すべきなのを、天皇にならずに日本の最高指揮を執ります。七年間の天皇不在という、異常事態が続いた時代でもあつたのです。

山城についていえば、「日本書紀」に最初に出てくるのが六六五年のことです。筑紫国に大野と基肄の二つの城を造る。長門に築城ともありますが、この場所は分かつていません。六六七年には大和国に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城を築くとあります。その次は六七〇年のこと、先ほど出てきた高安城を修理する。また、長門と筑紫にお城を造るとあります。これについても、どこなのか特定されていません。山城の築造記事はこれがすべてです。六六五年の大野城から、この六七〇年の長門と筑紫までのわずか六年間に限られます。これは非常に重要なことだと思います。

その後、六九八年に鞠智城が登場してきます。藤原京の時代です。平城京に都が移るまだ一〇年ほど前ですが、この年に鞠智城を修理したとあります。ですから、鞠智城は既にこのとき存在していた。発掘調査の成果なども踏まえますと、鞠智城も先ほどの六六五年から六七〇年の五年の間に造られたことはまず間違いないと判断すべきだと私は考えています。

二、古代山城の分布状況と類型

さて、古代山城といわれる遺跡は、西日本各地に現在二二箇所確認されています。今後若干増えるかもしれません。山の中にはありますので、なかなか見つかりにくいこともあります。それから、戦国時代のお城などと重なっている場合があるので、古代の城というふうに理解されないケースもあるのですが、少なくとも二二の山城があります。

(一) 古代山城の三つの類型

このうちの一箇所を除く二二箇所は、明確に二つの類型に分けることができます。その特別な一箇所が鞠智城なのです。

二つの類型のうちの一つは、「山岳型山城」と私は呼ぼうと思います。高い山の山頂付近に城壁が巡ります。城壁の実態は土塁であり、あるいは石を積み上げた石塁ですが、ここでは城壁という言葉で統一します。もう一方の類型は「丘陵型山城」です。低い丘陵の上に、やはり城壁が巡るのですが、その城壁の一部が周辺の平

1. 古代山城 2つの類型

(1) 山岳型山城



(2) 丘陵型山城



図18 古代の山城における2つの類型

1) 山岳型山城

香川県丸亀市・坂出市 調岐城山(さやま)城



図19 調岐城山城

調岐城山(さやま)城



図20 調岐城山城山頂付近

坦地とほとんど同じレベルまで下がるという特徴があります。ですから、仮に敵が攻めて来た場合、防衛の機能という点では脆弱なのです。二箇所の山城は、この山岳型と丘陵型の二つに明確に分かれます（図18）。これは山岳型山城の一つで、香川県の丸亀市と坂出市の市境にある調岐城山城です。五〇〇メートル近い山の山頂付近に累々と城壁が巡っています（図19）。山頂に近い尾根あり谷ありの複雑な地形に城壁が巡っているのです（図20）。こういう高い山の上にあるのが山岳型の山城。一方これは、標高七〇メートルほど低い丘陵の周りに城壁が巡っている丘陵型山城の一例です（図21）。豊前平野の唐原城という山城ですが、

このように明瞭に異なつてゐる二つの類型に分かれる。当然のことながら、その機能、役割が全く違うということを示すと理解しなければならないでしよう。

この図は二二箇所の山城を真上から見たところと、横から見たところです。大小さまざまあることがわかります（図22）。この中で、点線で囲んだものが丘陵型山城です。総じて小規模なものが多い。この城壁の周縁の長さが一番短い山城は唐原城で、一・六キロメートルほどです。それに対して山岳型山城には大



図21 唐原城

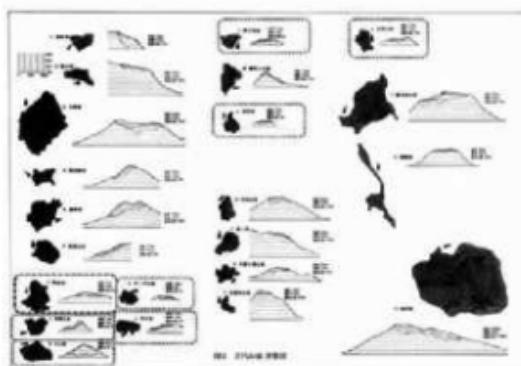


図22 古代山城形態図

規模なものが多く、最大の山城は高安城で、八キロメートルほどと推定されています。鞠智城はこれで、鞠智城の周囲は三・五キロメートルあり、比較的大型の部類になります。

もう少し事例を紹介しましよう。これは香川県高松市の屋嶋城です（図

山岳型山城
香川県 屋嶋(やしま)城



標高 252m
最高比高 200m



図23 屋嶋城

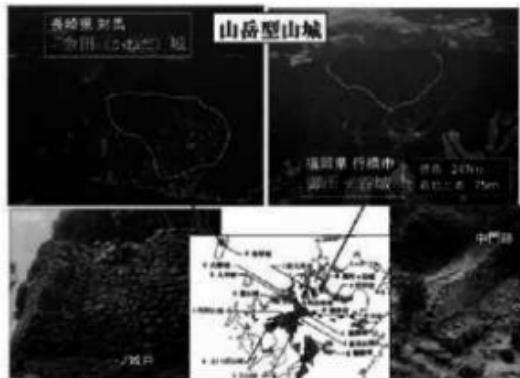


図24 金田城・御所ヶ谷城

23)。屋嶋といいますと、源平の合戦でも知られています。現在は半島ですが、かつては文字通り島でした。この屋嶋の山頂を巡って、延々と石壁が巡らされています(図23右上)。発掘調査が進められています。これは門の跡です(図23右下)。今日かなり整備されてもっと見やすくなっていますが、島の周囲は絶壁に近い。その島の山頂に山城が営まれていたのです。瀬戸内海に突出するような立地条件です。

注目すべきことに、金田ヶ谷城(図24右)です。城、御所ヶ谷城いずれも

城壁の状況が酷似しています。従って、これは同じ技術の系統の下に造られたもので、しかも、時期的にも非常に近接していると判断することができると思います。

一方、丘陵型山城の事

例ですが、これは福岡県のみやま市の女山（図25左上）です。「おんなやま」と書いて「そやま」と読みます。かつてはこの女山、卑弥呼女王にかかる砦の跡ではないかとする説もありました。

城壁の一部が周辺の平地近くまで降りて来る、おつぼ山（図25右上）、帶隈山（おぶくまやま）（図25下）です。この丘陵型山城は、特に筑後平野の周縁部におつぼ山、帶隈山、女山、把木城と、集中しています。

山岳型山城と丘陵型山城には共通した地形的特徴があります。たとえば唐原城ですが、地形図で見て分か



図25 女山城・おつぼ山城・帶隈山城

丘陵型山城

福岡県上毛町 唐原（とうばる）城



図26 唐原城

りますように、内部に平坦地がないのです（図26）。尾根があり、谷があり、ただそれだけなのです。山岳型山城もそうです。険しい斜面、谷が入り組んでいます。対して、平坦地がない。それだけは、内部に広い平坦地があります（図27）。西住さんに事前にお聞きしまし



第3の類型 鞠智城

城郭内に広大な平坦地がある。

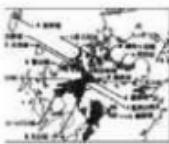


図27 鞠智城

たら、これはもととの地形ほとんどそのままなんだそうです。それを利用して、つまり平坦地があるような場所を選んで鞠智城が造られている。ここだけなのです。他の二二箇所の、丘陵型にしろ、山岳型にしろ、そこ、鞠智城の非常に重要な意味があると思います。

(二) 古代山城の分布

鞠智城を入れて二二箇所の山城のうち、一四箇所は山岳型、それから、七箇所が丘陵型です。分布状況を見ますと、北部九州に集中しています（資料編20頁）。それから瀬戸内海の南北沿岸、一番東にあるのが高安城です。北部九州をもう少し細かく見ますと、福岡平野の近くと大宰府の周辺、筑後平野の周辺、それに福岡県の東北域に集中分布域があるという特徴があります。山陰にも、四国の南部にも、南九州にも、近畿地方以東にも全くありません。この西日本の限られた所にあるということも、際立った特徴ということができるでしょう。

三、古代山城の築造年代

六六三年の白村江の敗戦の直後、六六四年に水城が造られます。それから、防人の制度が作られます。そして、六五年に大野城、基肄城が造られます。その時期の日本の政治の中心、大和政権の中心地は飛鳥です。これも非常に重要な視点です。

山城が造られはじめて二年後に、都は飛鳥から近江の大津、琵琶湖の西岸に遷されます。翌六六八年の正月に、大津宮で中大兄皇子はようやく晴れて天皇に即位します。後に天智と呼ばれる天皇です。その後の歴史を見ますと、それから三年後、六七一年に天智天皇は大津宮で崩御します。その翌年に壬申の乱が起きて、大海人皇子方が勝ち、都を再び飛鳥に戻し、天武政権を樹立するという歴史が続きます。これも、これからお話しに重要な意味を持つてきます。

(一) 齊明朝築造説の非

初めに、私は新たな理解に到達したと言いました。なぜかというと、従来の固定観念、あるいは誤った常識というのが確実にあると思うのです。私はそれに気が付いてしまったのです。まず、第一の誤解として、山城の築造が白村江の戦いの後ではなく、前だという説が根強く主張されています。

齊明女帝が百濟救援のために軍隊を率いて九州にやつて来ます。彼女が大本營としたのが朝倉宮です（図28）、筑後平野の東北縁の朝倉宮に、齊明女帝は六六一年の五月九日に入ります。それから二ヶ月後に彼女はここで崩御するのです。唐突の死です。「日本書紀」には詳しい理由が書かれておりません。あまりこの

ことについて深入りするつもりはないのですが、私は、齊明女帝は暗殺された可能性が強いと思います。この説は従来からあります、私もそれに賛同します。

研究者の中には、この朝倉宮を巡るよう、丘陵型山城や山岳型山城が、あたかも朝倉宮を守るようにして造られているので、この一帯の古代山城は、齊明女帝のときに造られたのだというふうに主張されています。しかし、わずか二ヶ月で、ここで亡くなってしまうのです。それ以後、朝倉宮が歴史の舞台に登場することはありません。ですから、朝倉宮防衛のための山城築造説は現実性に乏しいと思います。これは朝倉宮の推定地の一つです（図29）。筑後川が近くを流れています。筑後平野の東北辺に当たります。地形的に見ますと、周りを丘陵で囲まれており、前面を川で閉ざされている。これは地形的に王宮を守るのに適した場所と言えます。

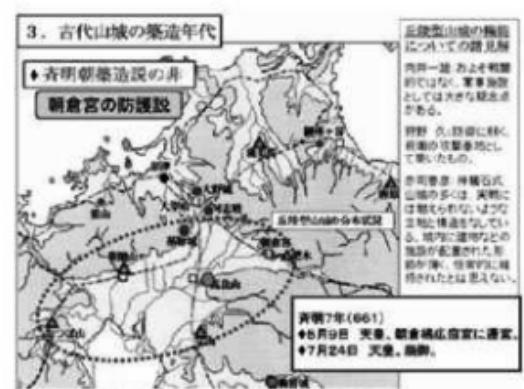


図28 齊明朝築造説

私は数年前に初めてこの朝倉市の志波地区に行きました、これは大和の飛鳥だと思いました。奈良の飛鳥も狭隘な場所にあるのです。飛鳥の王宮、飛鳥の都は、唐の軍事的な脅威に備えて、盆地の奥に避難させたというのが、飛鳥の真実だと私は判断しています。

齊明朝築造説をめぐる議論がもう一つあります。「日本書紀」に六五八年の条に出てくる記事についてですが、六五八年といいますと、まだ白村江の戦いの前です。

一九八八年に福岡の渡辺正氣先生が、「日本書紀」のこの記事の中に、朝鮮半島でのことと從来理解されていたある文言について、実はそうではなくて、日本列島のことであると反論なさいました。それに対して山口大学の八木充先生がそうではなくて、古代山城はやはり白村江の敗戦後の築城であると論証されました。

ところが昨年、長崎の堀江潔さんが、渡辺説を再評価する説を発表されました。史料をめぐつて齊明朝山城造営説が二転三転しているわけです。私は八木先生の説が正しいと思います。時間がありませんのでお話しできませんが、「日本書紀」のその記事は、決して齊明朝に古代山城が造られたということを物語るものではないと、私は理解しています。

(二) 天武朝以降までの築造継続説

もう一つ、大きな見解の違いがあります。先ほど天智天皇が六六八年に即位したと言いました。六七一年、



図29 朝倉宮推定地

山岳盆地城
岡山県 錦町市
鬼ノ城 きのじょう



図30 鬼ノ城

天智天皇は、大津宮で突然の病のために崩御します。翌六七二年に壬申の乱が起きます。壬申の乱に勝利を得た大海人皇子の勢力が飛鳥に戻って天武政権の時代になります。この天武朝以後にも古代山城の築造行為は続々と主張する多くの研究者がいます。天武朝、持統朝、文武朝、先ほど鞠智城が最初に『続日本紀』に出てきます六九八年の前後、文武天皇の時代なのですが、そのころまで古代山城の築造が続いているという、

そういう有力な説があるのです。

天武朝といいますと、唐の軍事的な脅威が日本列島にかなり弱くなった時期になります。唐の脅威がないのに、なぜ山城を造るのかということですが、その研究者の方々は、これまでの中大兄皇子政権、天智朝のときの山城は、国家防衛、軍事的な防衛のために造ったのだとして、いっぽう天武朝以降の時代のものはそうではなく、日本列島の地域支配のための拠点なのであり、山城築造の意義が全く変わるのだと主張するのです。私は、そうした理解は正しくないと考えます。

これは岡山県の錦町市の鬼ノ城という山城です（図30）。この鬼ノ城の内部での発掘調査で、文武朝前後の、つまり六〇〇年代の終わりごろの土器のかけらがかなり多く出てい

る。だから、この鬼ノ城の造営がそのころに行われたのだという、そういう説です。

もう一つはこの門に関する説です。この写真は復元された西門（図30左上）ですが、発掘調査で四つの門が確認されています。この門の構造を考古学的に分析しますと、かなり長期間にわたる造営時期を考えられ、従つて天武朝からずっと造営は続くのだというようなことが主張されています。これは岡山大学名誉教授の稲田孝司さんの説です。有力な説として受け止められているようなのですが、私は土器の話にしろ、門の話にしろ、全く間違っていると思います。考古学的に成り立ちはしない議論です。このことも本当は時間をかけて説明しなければなりませんが、時間がありませんので割愛します。

従つて、天智朝ではなく、天武朝あるいはそれ以後まで古代山城の築城が続くという考え方には排除しなければならないと思います。要するに、古代山城は、最初に言いました六六五年から六七〇年、あと六七一年ぐらいまで続いたかもしれません、わずか五、六年の間に集中して造営されるというふうに理解しなければならないと思うのです。

（三）大宰府防衛説の非

古代山城の機能について、明治大学の五十嵐基善さんの論文に的確に要約されていますので、紹介します。一つには、これは五十嵐さんが全面的に是認する見解ではないのですが、逃げ込み用のお城であるとする説があります。それから、水城と共に大野城、基肄城については大宰府の防衛が役割であったとされます。大野城は大宰府のすぐそばにあります、水城もすぐ近くにある。従つてこれらの軍事施設が大宰府を守るために

のものであることが当然なこととして理解されています。私は、全くこれは信用ならない説だと思っているのです。

五十嵐さんの説明では、鞠智城の機能については有明海の防衛、大宰府の支援、隼人支配の拠点などが挙げられていますが、これも本来の鞠智城が造られた目的では全くないというふうに私は考えています。

また、古代山城には軍事的な実用性ではなく、交通の拠点に設置されたランドマーク的な施設であつた、あるいは少し目立つ政治的な記念物として造られたものであるというふうな理解も、ごくごく最近まで多くの研究者が主張しているところなのです。つまり、古代山城は本来軍事的な、防衛的な施設であると考えられていたのですが、いや、そうではないんだというのが最近の風潮なのです。風潮というと失礼かもしれないが、大きな流れなのです。私は、いずれも疑わしいと考えています。

まず、大野城です。北方には玄界灘が広がっています。大宰府都城域については、いろいろな議論がありますが、まずはこの辺りだということです（図31）。大野城がすぐそばに

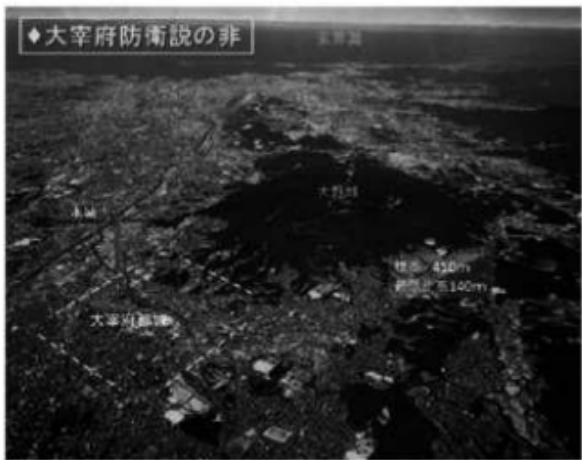


図31 大宰府都城

ある。それから、壮大な防壁である水城がある。これがあたかも大宰府を守るように造られている。従つて、古代山城は、まず大野城、基肄城と、もう一つ、阿志岐城がこのすぐ南にあるのですが、これらが大宰府を巡つて守るように造られているという、そういう理解になるわけです。

六六三年に白村江の戦いに負けます。『日本書紀』によりますと、翌六六四年、水城を造るとあります。同時に防人の制度と烽火（のろし）の制度を作る。六六五年に大野城、基肄城を造る。従つて、大野城、基肄城は大宰府を守るために造られたというふうに考えられているのですが、大宰府が造られたとは全く記載されていないのです。

大宰府に関してはこの半世紀の間、精力的に発掘調査が続けられています。その成果として、最初の大宰府政庁I-1期、これが七世紀の後半であるということころまでは突き止められているのですけれども、果たして六六五年の大野城が造られた段階で大宰府があつたかどうか、全く確証がないのです。にも関わらず大宰府があつたといわれている。杉原敏之さんという九州歴史資料館の明治大学出身の若き研究者ですが、彼の論文によりますと、時間的位置づけは確定されなかつたとされています。

大野城、水城があるから大宰府も同じ時期に造られたんだろうと論証の順番が逆転しているのです。私は大宰府の本格的な造営は、もう少し時代が下ると考えています。つまり、水城、大野城が造られた時期には大宰府は存在していないのです。大宰府がないのに、なぜ大野城が造られるのか、水城が造られるのかという話になるわけです。（図32）

四・古代山城を正しく理解する

わが国は六六三年の白村江の戦いに負けます。この白村江の敗戦というのは非常に大きいのです。なぜかといいますと、それまで隋や唐は、朝鮮半島、とくに高句麗をくり返し侵略してきましたが、ほとんどの場合、陸路で侵攻していたのです。

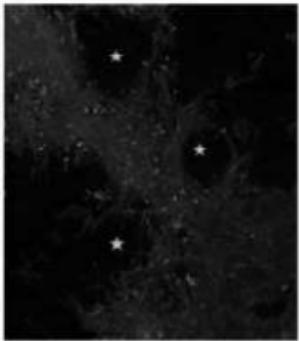


図32 大宰府周辺の古代山城

ところが、六六〇年に百済を侵略したときには、山東半島から大艦隊を編成して海路で百済に侵攻してきました。初めてのことです。唐一三万の軍隊が船で黄海を渡るのです。その勢いをもつてすれば、対馬海峡を唐の大軍が渡海するなどは容易なことでしょう。先ほど、こうう君のお話の中に、唐と新羅の連合軍が日本列島を攻めるかも知れないとあります。ですが、新羅が日本列島を攻撃するいわれは、実はありません。来るとすれば、唐です。唐が日本列島を侵略するのです。それに備えるさまざまな施策を日本列島側としては講じざるを得ない、そういう時期だったのです。

(一) 古代山城防衛網の構築

唐が攻めてくるとすると、どうやって攻めてくるかというと、対馬海峡を渡って、そのあといったん九州北部辺りに上陸するかしないか、それは唐側の判断によります。さらに瀬戸内海を東に進んで、唐の侵略軍の目的は大和、飛鳥なのです。唐の侵略軍の目標は天皇です。飛鳥にいる天皇を拉致するか、殺害するか。

それによって日本列島を唐に服属させる、それが目的なのです。ですから、九州に上陸して九州を占領することは、唐の目的ではありません。

山城群の軍略

- 唐の軍事侵略という危機 663年～676年(678年)
- 唐侵略の最終目的地は王都飛鳥にあり



5. 唐はなぜ征服戦争を続けたのか？

- 中華思想という特定民族至上思想に基づいた華夷秩序を構築するための、諸國服属化を目的とした征服戦争の進行。
- 国内統治権構築・維持・拡大のために不可欠とされた。
- 周辺諸国は蛮国であり、文明化させるのが中華皇帝の責務。
- 現実には武力で恫喝し、從わない場合は討伐。

図33 山城群の軍略

従つて、唐の大軍は、唐の本来の侵入路はこの図のようなルートなのです（この図では、侵入ルートとして、対馬の中央を横断するよう）に表現していますが、現在南北に分離している対馬本島は、古代にあっては一つであったことを踏まえる必要があります。この点については、講演会当日に参加者のお一人から御教示いただきました。ありがとうございました。

た。図33）。これを仮に百濟を攻めたのと同じ三三万の軍隊で攻め込むとします。日本側が手をこまねいて見過ごしてい

ますと、唐の大軍は瀬戸内海をすみやかに東行し、大阪湾に

上陸して、一気に大和を攻めるわけです。これは日本側としては最悪の状況です。それを何とか食い止めなければいけない。当然、当時の人们はいろいろな軍略を講じようとしていたでしょう。「孫子の兵法」、「六韜（りくとう）」などの軍事書がありますが、当時の政治家・軍人にとっては常識以前の素養だったでしょう。日本列島の防衛の要は、天皇の命を守ることでした。天皇を失えば、日本そのものが滅亡する。服属つまり他国に隸属することになるのです。人間としての尊厳を奪われ、半永久的に奴隸としての運命を余儀なくされるという、そういう切実な危機感があつたと思うのです。

そうした事態に陥らないためには、容易に瀬戸内海に侵入させてはならないのです。そのためにはどうするかというと、まず九州で唐の軍隊をとどめ置いて、ここで壊滅する、少なくとも唐の軍隊の勢力をかなり削ぐという軍略を講じるわけです。そのために二三の山城を効率的に配置して、それぞれの役割を持たせて対応しようとしたのだと思います。

（二）唐の軍事的侵略という危機

その前に問わなければならないことは、唐はなぜ日本列島を侵略しようとしたのかということです。日本側には、唐に征服されなければならないような落ち度はありません。百濟がなぜ唐によって攻め滅ぼされなければならなかつたのか。百濟もまた別に唐に対して特段の反逆をしたわけではないにもかかわらず、一方的に唐は大軍を派遣して百濟を攻めて、国王以下一万二、〇〇〇人を、唐の都、洛陽に強制連行しました。国王は、翌年、洛陽で死去します。唐は、いつたい何のために朝鮮半島、あるいは日本を軍事侵略しよう

したのか。東アジアだけではありません。ベトナムも、チベットも、西域や北方の国々をも、唐は服従させようと、軍事的に侵略するのです。隋も同じです。

これは何ゆえかといいますと、「華夷秩序」が根本にあります。華夷秩序というのは、中華思想に基づく国際秩序のことです。中華皇帝の義務といふのは何かといいますと、周辺の野蛮な国々に文明の恩恵を与える。文明の恩恵を受けた野蛮な国々は、感謝の気持を表すために、貢ぎ物を中国の皇帝に差し出す。この相互関係の中で中華皇帝は、対外的ではなくて国内の、中国大陆内の統治の権威を確立し、維持し、拡大するのです。逆にその周辺の国々が少しでも背くと、中国の皇帝の権威が揺らぐわけです。中華皇帝の権威が揺らぎますと国内が不安定になつて、また、分裂抗争の時代になる。

中国大陆では、二二〇年に後漢が滅びて以来、三国時代、五胡十六国時代、魏晋南北朝時代と、内乱の時代が四〇〇年近く続きました。とても悲惨な時代が続いたのです。これを何とか統一して平和な安定した国にしなければいけないというのが、五八九年に南北朝を統一した隋の意図であり、その後を襲つた唐の皇帝、唐の朝廷の本当の目的だったと私は思うのです。ちょうど織田信長が天下布武を掲げて、乱れた戦国時代を終わらせて、全国を統一しようとしたのと同じ発想だったと思うのです。当時、この華夷秩序といふのは東アジア世界といいますか、アジア世界唯一の国際政治秩序だったのです。いずれにしろ中華思想といふのは特定民族優先思想で、周辺の国々を蛮国であると一方的に位置づける。その国々にとつては全く身勝手で厄介なものだったのですが、それが当時の歴史の真実なのです。

(三) 高安城の軍略

山城の機能を考える上で、まず高安城を取り上げます。高安城は大阪府と奈良県境の生駒山中にあります（図34）。大阪湾に唐の軍隊が上陸して飛鳥を攻めるには、大和川の峡谷を通るしかありません。この峡谷を通る唐の軍隊を攻撃し、壊滅するための軍事基地なのです。高安城は数ある山城の中で、とりわけ大きく造られています。この大和川峡谷を通過されると、唐の大軍はあつという間に飛鳥にたどり着いてしまう。ですから、最大規模の山城をここに設定したと考えていいでしょう。

(四) 筑紫野谷の軍略

それと同じ役割を担つたのが、大宰府を守るために山城とされてきた大野城、阿志岐城、基肄城だと思うのです。

大宰府がないと考えればどうなるかといいますと、大野城市から筑紫野市にかけての一帯は、幅の狭い谷地形になっています。（図35）。これを仮に筑紫野谷と呼びましょう。この谷に唐の大軍をおびき寄せるのです。おびき寄せて、大野城、阿志岐城、基肄城からの軍隊が唐の軍隊を攻めるという軍略です。その前面に水城を造ることで、筑紫野谷に大軍がいることを、唐の軍隊に知らしめるわけです、唐は九州の軍隊を無視して、瀬戸内海に行くこともできます。

- ◆ 古代山城防衛網の構築
築造時期は併行／機能は三分化

- ◆ 高安城の軍略

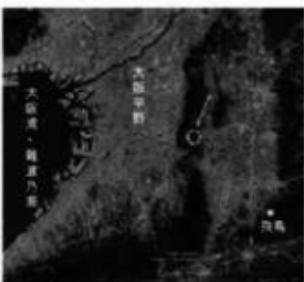


図34 高安城の位置

置し、それらの連携・連動によって唐の侵略を何とか防衛しようとする、そういう軍略であつたと思います。『日本書紀』にはほとんど書かれておりませんが、当然のことながらそういう軍略を考えなければならなかつただろうと思うのです。



● 筑紫野地峡の軍略

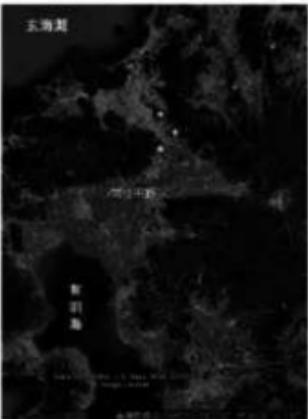


図35 筑紫野地峡

たた、その場合、瀬戸内海に行つた唐の大軍をこの九州に駐屯している軍隊、私は、実態は防人だと思っていますが、背後から唐の軍隊を追撃することになる。唐としては、それは軍事的にまずいことになります。ですから、唐軍としては、まず九州にいる日本の軍隊を抑えておかなければ、後々の飛鳥進軍がスムーズにいかないということになるのだろうと思うのです。

これを私は筑紫野谷の軍略と呼びます。しかし、それでも唐軍を殲滅することは無理かもしれない。その時のために、筑後平野に防衛軍を配置するのです。当時の防衛軍略は山城だけでは済むものではなかつたとみる必要があります。平野部にも多くの軍隊を配置し、あるいは瀬戸内海には水軍を配

五、山城群の軍略



図36 北部九州の軍略

その筑後平野に唐の大軍をおびき寄せるわけです。筑紫野谷を出た正面には高良山城という山城があります。高良山からは筑後平野のほぼ全域をみわたすことができます。そこで重要になってくるのは丘陵型の山城(h・i・j・k)です(図36)。私は、丘陵型山城は兵站基地であつたと理解すべきだと思います。攻撃のためにはおよそ不適切な構造ですが、海を渡つて侵略してきた軍隊の一番の弱点は何かというと、兵站なのです。食糧・武器を調達できない。唐が朝鮮半島の百濟を攻めたときには新羅という同盟軍がいましたので、兵站の補給が十分に可能だつたのですが、日本列島に上陸した時、唐にとつて周りは全部敵なのです。日本側としては、そこが目の付けどころなのです。決定的に有利なのは兵站なのです。

それを備える場所としてこの丘陵型の山城が造られたと思います。いずれも目立たない隠れたような場所に立地しています。日本側の軍隊が戦闘を続け、食糧あるいは武器が乏しくなったときに兵站基地である丘

陵型の山城に行つて、そこで補給するという、そういう役割であったと思います。筑後平野での決戦で、な
おさらに日本側が負けたとします。その敗残兵たちはどうするか。そこで鞠智城がクローズアップされると
思うのです。内部に他の山城にはない広い平坦地がある。ここにいつたん落ちのびてくるわけです。ここで
退却してきた兵士たちを再編成して、もう一度唐の軍隊を追撃する、そういう体制を整える場所としてこそ、
鞠智城の意味があるに違いないと私は思います。

仮に鞠智城が唐の攻撃によつて陥落するとしますと、南九州、中九州の広大な山野がこの兵士たちを守つ
てくれるでしょう。そのための基地として、鞠智城が造られたのだと私は思うのです。

六、防人の眞実

白村江の戦いの翌年の六六四年に、防人の制が始まられたと『日本書紀』に書かれています。防人は東国
の青年たちを徴兵して、九州で国の守りにつかせたということになっています。東国からだけではなかつた
ようですが、東国を中心とした地域であったということは間違いないでしょう。なぜ東国なのか。私は大分
県の玖珠という盆地で生まれ育ちました。熊本県境に近く、從つて鞠智城にも近いところが私の故郷です。
高校生のころでしたか、防人の話をある社会科の教師から聞かされました。九州の男性はひ弱だからなのだ
と。それに引きかえ、東国の中たちはたいへん雄々しい。だから、わざわざ東国から兵士を募つたのだ、
などという話を聞いたことがあります。しかし、実はそうではない

のです。

六六〇年あるいは六六三年の朝鮮半島での戦争で、主力となつた兵士達、白村江の戦いには二万七千人の兵士が海を渡つて行つたのです。その主力はどういう人たちだつたかというと、西日本の青年たちなのです。他の地域からも援軍として派遣されていますけれども、主力は西日本の青年たちだつたのです。その多くが戦死し、あるいは傷つき、あるいは捕虜になつて、壊滅状態になつてました。その後に北部九州の守りを固めようとしても、西日本には兵役適齢期の青年たちがいなかつたのです。だから東国からわざわざ兵士を、青年たちを派遣させたのだと、かねてから一部の研究者により説かれています。

では、なぜ中央、近畿地方やその周辺地域からはなかつたのでしょうか。中央地域は、先ほど言いましたように、最大規模の高安城を造つて、そこにも多くの兵士を駐屯させる必要があつたでしょう。あるいは、その山城だけではなくて、大和の盆地の各所に軍隊の駐屯地を造つて、王宮を守るために備えをしていました。そうすると、いきおい西国には東国から派遣せざるを得なくなります。これが防人の真実であつただらうと思います。その防人の若者兵士たちは何をしたかというと、対馬や壱岐などの島々や九州北岸の沿岸地域を守つただけではなく、北部九州に展開する、あるいは瀬戸内海地域に造られる山城の築造作業にも主力として従事したと考へるべきだと思います。これも防人の真実だと思います。

七、古代山城無益論



図37 百済の滅亡

それから、もう一点、これまで見過ごされていました重要なことがあります。古代山城は日本列島で二三箇所確認されています。私は山城築城という国防策は天智政権の全く見当違いの施策であったと思うのです。中大兄皇子政権、天智政権は日本列島をもるために、百済の亡命軍人たちの知恵を借りながら、全力を傾注して、列島こそって危機意識を共有して、山城を築造し、防衛制度を整えることにまい進したのだろうと思います。しかし、本当にこれは有効であつたのかどうかということを考えなければいけません。

日本の古代山城は、百済の亡命軍人、亡命政治家の知恵や知識を借りて造られたものです。では、その本家本元の百済ではどうであつたかといいますと、韓国忠清南道での調査の事例ですが、兵庫県と同じくらいの広さの中に山城が二三〇箇所ある。忠清南道だけで、日本全体の一〇倍以上の山城がありました。ですから、百済全体では一、〇〇〇箇所を超えるかもしれない。それぐらい多くの山城があつたのです（図37）。

六六〇年、新羅の要請を受けた唐の軍隊が百濟に攻め込みます。百濟西岸の島に上陸して、それからわずか二〇日経つか、経たないかのうちに、百濟の首都、扶余（泗沘城）は陥落します。

唐はこの島に上陸して、一〇日間は体制を整えるために休養をとつたとされていますので、侵入開始後、実質一〇日前後で扶余は陥落するのです。一二三〇あるいは数百もある山城の役割は何かというと、この都を守るためにものであったはずなのです。しかし、わずか一〇日ももたなかつた。要するに山城が一〇〇あるうが、一〇〇〇あろうが、唐の大軍の前には全く意味をなさなかつた、役に立たなかつたということになります。そのことはすでに知られていたはずですが、にもかかわらず、なぜ中大兄皇子政権は日本列島で一生懸命山城を造ろうとしたのかということが問われるべきでしょう。

八、古代山城の否定と超克－日本列島古代中央集権国家の構築－

このままではいくら山城を造つても、唐の大軍に攻撃されれば、あつという間に陥落してしまう。天皇のいる都まで到達されてしまい、国が亡ぼされてしまうという、非常に危険な状態だつたのです。幸いにもこれに危機意識を抱いた人々がいたというのが、私の考えです。誰かといいます大海人皇子とその勢力です。天智天皇の弟とされている人ですが、これには異説があります。本当に兄弟だったのか疑問があるとする説も根強く主張されています。天智天皇は六七一年に大津宮で崩御します。天智天皇こそ、山城築造政策を指導した人物ですが、六七一年、急な病で死ぬのです。この天智天皇の死についても、かねてより暗殺説があ

るところです。私もその可能性は強いと思います。

つまり、大海人皇子、後の天武天皇の勢力が、この天智天皇の国防のやり方では日本列島は危ないと、そういう強烈な危機意識を抱いたのではなかつたかと思うのです。そのために、その山城築造推進派の頭目である天智天皇をまず排除しなければいけない。排除した後にも天智政権の勢力は残ります。これを完全にとり除くために起こしたのが、壬申の乱であつたと考へています。壬申の乱というのは、天智天皇の息子の大友皇子と弟の大海人皇子が皇位をめぐつて争つたものという通説的な理解は不当であり、日本の国防路線をめぐる、必死の路線闘争であつたとみるべきだと思います。

壬申の乱の結果、大海人皇子勢力が勝利を得ます。それほど危機意識が、日本列島内で広く共有されていました。飛鳥に戻った天武政権は、これまでの山城築造推進政策を中止します。その代わりに何をしたかというと、山城だとか、水城だとか、そういう防衛施設を造るのではなくて、日本列島をシステムの上で、制度の上で非常に強固な中央集権国家として作り上げようとしたしました。海外勢力の侵入する隙を作らないという、日本列島中央集権国家構築政策に路線転換するのです。

二三箇所の山城のうち、少なくとも一〇箇所の山城は、築造の途中で放棄されています。その放棄の理由が何かという、これもいろいろな議論のあるところですけれども、私は天武政権が政権を握ったときに、これまで一生懸命造っていたのですが、もう無意味、無益だからやめようということで築造行為を中断した、その表れであると理解すべきだと考へています。そういった中で、鞠智城がその後も使われ続ける、あるいは

は大野城も、あるいは基肄城も使われ続ける。これは例外的な状況です。

最後になりますが、古代山城についての従来の理解には、誤解があまりにも多すぎる。本当の姿というの
が、まだ説明されていなかつたのではないかと思います。いろいろと反論、異論もおありかと思いますが、
こういう見方もあるということをぜひとも知っていただければ、これ以上に幸いなことはございません。御
静聴、大変ありがとうございました。

講演②

東アジア世界の変貌と鞠智城

国際環境から見た九世紀以降の鞠智城

講演者紹介

榎本淳一（えのもと じゅんいち）

東京大学文学部国史学専修課程卒業。東京大学大学院人文科学研究中心博士課程単位取得退学。日本学术振興会特別研究员、工学院大学一般教育部教授などを経て、現在、大正大学文学部教授。博士（文学）。専門は日本古代史。

講演② 「東アジア世界の変貌と鞠智城」

「国際環境から見た九世紀以降の鞠智城」

大正大学文学部歴史学科教授 横本淳一

ただ今ご紹介にあずかりました大正大学の横本です。本日、私は、「東アジア世界の変貌と鞠智城」という題で、主に九世紀以降の鞠智城について、国際環境のほうから少し考えてみたいと思っています。



簡単に本日の話の内容をかいつまんでお話いたしますと、鞠智城というのが他の山城と違つて大変長い期間存続したということ、これは最初の西住さんのお話の中にもありましたけれども、なぜ鞠智城が一〇世紀後半まで存続したのかということについて、考えてみたいことがあります。その場合、これまでこのシンポジウムでは文献の先生方からは、九世紀の対外的な危機と関係するのではないかということが、主にお話されていたわけですけれども、その説の是非についてちょっとと考え直してみたいことがあります。また、本日、先にお話しいただいたお二人の先生は、考古学のほうからお話をいただいたわけですが、私はあくまでも文献史学の立場から、特にその国際環境という視

一、東アジア世界の変貌

表題に「東アジア世界の変貌」というふうに書かせていただいているわけですが、「東アジア世界」とは何か、その辺を少し簡単にお話しておきたいと思います。



図38 出土地器からみた古代山城の時期

こちらの表は、赤司先生が作られた表に少し改変を加えた「出土土器からみた古代山城の時期消長表」というものです(図38)。鞠智城が丸で囲んでありますけれども、鞠智城が一〇世紀後半まで存続しているというのは、他の山城にない特殊な状況であったことが、この表からもよくお分かりいただけるかと思います。

点から考えてみたいことがあります。また、最後に少しだけ、鞠智城の特殊性とか、歴史的な意義についても触れることができればというふうに考えています。

(一) 「東アジア世界」とは

「東アジア世界」というこの言葉は、学術用語で東洋史の西嶋定生先生が唱えられた説ということになりますが、その特徴としてはまず中国文化、その代表的なものとして、漢字、儒教、それから、律令制、仏教、これらを共有する文化圏というふうな形で、その性格が押さえられています。それから、もう一つの特徴としては、中国を中心とする国際秩序で結ばれた政治圏であるという、そういう定義をされています。西嶋先生は冊封体制という政治秩序、国際秩序を中心に説明されていますが、私は朝貢体制という政治秩序のほうが重要ではないかと考えています。いずれにしろ、そういう政治的なつながり、そういう秩序で結ばれた世界であるという、もう一つの性格を持つているということがいえます。現在の国の地域でいいますと、大体中国、朝鮮半島、それから、ロシアの沿海州、日本、ベトナムなどに相当する地域が、「東アジア世界」に相当する地域と考えてよいのではないかと思っています。

(二) 九世紀（八世紀末以降）の「東アジア世界」の変貌

この「東アジア世界」ですが、文化的にも政治的にも緊密なつながりを持つていて地域なわけですが、この地域が八世紀と九世紀では大きく変化します。正確にいいますと、八世紀の末くらいから変化したといったほうがいいかもしれません、分かりやすく八世紀と九世紀という、そういう区切りで比較したいと思います（資料編24頁上表）。

八世紀までは、これは律令制という法律制度で国家の制度が規定される。そういう状況が、東アジアの国々

で共通していたことがあります。また、その律令制というものが、もともと中央集権的な国家体制を規定したものであり、それはまた一面では、徴兵制に基づいた軍国体制ともいべき性格を持つ国家体制だつたことがあります。また、その律令制の下では中国の伝統的な儒家思想に基づいて、重農主義的な、言葉を変えれば抑商主義的な価値観、体制が作られていたということがあります。士農工商という言葉を皆さんご存じだと思いますけれども、士、その次に農が位置づけられて、商が一番下に位置づけられる。それが儒教の基本的な考え方なわけですが、律令制の機能した八世紀まではそういった価値観があつて、商業とか貿易、そういうものが比較的抑えられるような仕組みになつていたということがあります。

また、先ほど文化圏として「東アジア世界」が存在するということをいつたわけですが、その文化の共有というのは、あくまでも唐文化の共有という形で、この地域の国々が等しく唐の文化を模倣し、取り入れるという、そういう状況が存在したということがあります。

こういった体制が九世紀になると大きく変わりまして、律令制が放棄されたり、もしくは大幅な改変を迫られるような状況が生まれ、そこでは従来の中央集権的な体制から地方分権化、権力の分散化というものが、国によって、地域によって多少違いはありますけれども、一般的にそのような変化が生じていったということがあります。例えば中国ではいわゆる「藩鎮」と呼ばれる節度使などの勢力が、地方分権的な勢力として横行するような状況であつたわけですけれども、日本でも、例えば荘園が広がつていったりとか、国司が受領として地方支配を請負うような体制が次第に出てきたりして、地方分権的な体制が生まれていくというこ

とが考えられています。

また、この九世紀においては、商業・貿易が積極的に進められ、発展していって、「東アジア交易圏」ともいわれるような貿易が活発に行われる状況が作られていったことがあります。

また、文化的な面で取り上げますと、それまで中国の文化を共有していたわけですが、次第に中国の文化、それを否定するわけではありませんけれども、独自に自分たちの国の文化というものを主張するような状況が生まれていきました。よくいわれるのは、日本では国風文化が生まれたということがいわれるわけですが、従来は一〇世紀以降に国風文化が発展したといわれていましたが、最近の研究では九世紀の半ばころから、国風文化が大々的に展開していったということが指摘されているわけです。そういう意味で八世紀と九世紀というのは、東アジアの国々の在り方が大きく変わつていつたという状況があります。

これを国際関係上の変化として捉え直してみると、まず一つには国際秩序が弱体化、消失するということが挙げられます。先ほど冊封体制とか、朝貢体制という形で、唐を中心として周辺諸国が政治的なつながりを持つ、そういう秩序が存在したということを簡単に触れたわけですが、そうした秩序のあり方が唐の国家体制の変化に伴つて変わつていつたことがあります。そのために、国家間の通行が九世紀以降だんだんと減つていくことがあります。

日本に即していうならば、遣唐使の派遣間隔がだんだん聞いていって、最後には遣唐使が派遣されなくなってしまうという変化が、九世紀以降進行していったことがあります。そして、ついには途絶えてし

まいます。これは日本と唐だけの関係ではなく、例えば日本の場合、新羅との関係もだんだんと派遣がなくなります。そのような形で、全体的に国家間同士の付き合いが減っていくという変化が起こっています。

付き合いがなくなってしまうということは、お互いのことが分からなくなってしまうわけです。隣の人は何をしているのだろうと、ちょっとしたことで疑心暗鬼を生んで、相手の行動について不安を抱いたりするような状態が、出来上がつていったということが考えられるわけです。これは、九世紀以降の対外危機とか、脅威を考える場合、一つ押さええておかなければいけないところではないかと考えています。

それから、もう一つ重要な問題として、対外管理の緩和・弛緩ということが起つてきます。実をいいますと、八世紀の律令制が機能している段階までは、国家間の通行が盛んに行われていたわけですが、逆にいうと国家間の通行しかなかつたわけです。というのは、律令という法律の中で私的な外交は認めないと、それが、法文として規定されていたからです。だから、民間人が勝手に國を出て貿易したりとか、勝手に遊びに行つたりするということは、法律で厳禁されていたわけです。國家使節しか外国に行けない状態というのが、八世紀までの状態だったのです。

ところが、先ほど言ったように貿易が活発化したり、商業が活発化する中で、民間貿易を認めるという形で、私的に民間人が外国へ行くことを許可する、認めるという状況が、だんだんと広がつていったということがあります。民間貿易が展開して、「東アジア交易圈」というものが九世紀に出来上がつたということを

お話をしたわけですが、こういう貿易の展開というのは、反面では海賊などの不法行為も生み出す温床になつてゐたことがあります。後ほど話をします九世紀の新羅海賊の横行も、こういった「東アジア世界」の変貌に関わつて現れた現象であるということがあります。

それから、先ほど律令制というのが、徴兵制に基づいた軍国体制だということをお話したわけですが、律令制が放棄される中で徴兵制自体が廃止されていきます。地方分権化していつて、地方の権力が強まつていくことがあるわけですが、このことは中央集権的な、大規模な常備軍が消失してしまうという問題と結びついていきます。つまり、外国に攻めていくという外征軍を派遣するのが困難な状況も生まれていったということがいえるかと思います。戦争のしにくい状況が生まれることによつて、国際的な緊張緩和が八世紀の末から九世紀にかけて生じていったというのが、当時の大きな変化として指摘しておきたいということがあります。

そのような国際的な緊張緩和に呼応する形で、実は八世紀末以降、日本では大幅な軍縮、これが実施されていきます。こちらのほうに主なものだけ年表的に列挙してあります。まず最初に、七九二年に諸国の軍團が廃止されます。大宰府とか、邊要は例外として除かれて存続しますけれども、その代わりに「健兒（こんでい）」という、少數の警備的な兵力だけ置く体制に変わっていきます（資料編24頁下表）。

七九五年には壱岐・対馬以外の防人が停止され、代わりに兵士が守りに當てられることがあります。七九七年には大宰府の「弩帥」という武器を教授する役職が廃止されたりとか、七九九年には烽火とい

う、敵が攻めてきたときに知らせる「燧候」が大宰府管内を除いて廃止されたりとか。それから、八〇九年には壱岐の防人が停止され、防人は対馬にだけ残存させるとか。八一三年には大宰府管内七国の兵士がほぼ半数に定員が削減され、八二六年にはついに大宰府管内の兵士が全て廃止されて、「選士・衛卒」に切り換えられていったという、このような軍縮が行なわれていつたということがあります。

これを定員規模で確認しますと、東国から派遣された防人、これは先ほど井上さんのお話にもありましたけれども、もともと西国のほうの人員不足を補うために派遣されたというお話をしました。その東国の防人も当初は三、〇〇〇人規模で存在していたと考えられるわけですが、最終的には対馬にしか残らないわけでした、対馬の防人は九世紀の後半の史料によれば一〇二人存在したということが知られておりますので、三、〇〇〇人から一〇二人に防人は減らされたということになります（資料編25頁上表）。

また、九州管内の兵士、軍團兵士というものは、当初は一八団、一万七、一〇〇人ほど定員としてあつたと考えられているわけですが、先ほど言ったように、八一三年にほぼ半減されて九、〇〇〇人に減らされた後、八二六年に全廃されて、代わりに「選士・衛卒」というものが置かれることになるのですが、選士は一、七二〇人、衛卒は二〇〇人であり、そういうふうにかなり定員の少ない兵員に切り換えられているということがあります。

したがつて、定員規模、これは定員がそのまま全て警備に常に当たっているわけではないわけですけれども、定員規模でいつた場合には、従来は約二万人ほど九州の警備に兵員が当てられていたわけですが、

それが九世紀になると、約二〇〇〇人にその防備する兵員が縮小されたということになります。つまり、一〇分の一の規模に兵員が少なくなった。それは外敵の侵入が考えられなくなつた、対外的な緊張が緩和したことによって、初めてこのような大規模な軍縮が可能になつたということが考えられるかと思います。

ここで、国際的な緊張の緩和と山城との関係をちょっと簡単に押さえておきたいと思いますが、八世紀の初め、第一次の緊張緩和として、唐との戦争の危険性がなくなつたことによって、山城のほとんどがその機能を失つたということが考えられるかと思います。これは要するに、七〇二年に遣唐使が派遣されて唐との国交が再開されたということで、そこで戦後の平和交渉が行われて、唐との関係の正常化が図られることによつて、こういった緊張が緩和していったということが考えられると思います。そのため大多数の山城が、この時期に停廃したと考えていいと思います。

先ほどお話しした八世紀末の緊張緩和というのは、したがつて第二次の緊張緩和ということになるかと思います。「東アジア世界」の変貌に伴つて、再び国際的な緊張緩和が生じた。それによつて大規模な軍備縮小が実施され、残つていた幾つかの山城もそのために停廃するとか、機能が変化するというような影響を及ぼしたのではないかと考えています。最初にお話いただいた西住さんのはうでも鞠智城のIV期というのが、大きくその性格が変わつたというお話をあつたわけですけれども、そうした変化の背景に、このような国際的な環境の変化というものが、存在したのではないかということを考えています。

二、九世紀以降の鞠智城史料の再検討

それでは、九世紀以降の鞠智城がどうであつたかということを、次に考えて行きたいと思います。

(一) 四つの史料の確認

ご存じだと思いますが、鞠智城の九世紀以降の史料というのは、四つしかないわけです(資料編25頁下表)。その四つも極めて簡略なものでありますて、一つ目が①の八五八(天安二)年のものですが、「肥後国言すらく、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」と。」という記事です。二つ目が②の同じ八五八(天安二年)ですが、「又鳴る」としか書いていないわけですが、これは①の資料と続いているわけとして、要するに菊池城院の兵庫の鼓が又鳴るという意味合いで書かれている、そういう記事です。

それから、三つ目の記事が③の八五八(天安二)年六月己酉条ですが、「又肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る。同城の不動倉十一宇に火あり」ということで、また兵庫の鼓が鳴つたことと、不動倉が火事にあつたということが書かれています。この火事については、やはり西住さんが火事の跡があつた遺構の説明をされていましたけれども、それと関連する可能性があるのかなというふうに考えてています。それから、四つ目が④の八七九(元慶三)年の記事ですが、「又肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」というふうな記事があります。

以上、四つの記事ですが、全て兵庫の怪、主に鼓の自鳴に関するものがほとんどであつて、③の場合は火

災記事も含んでいるわけですが、こういう兵庫の怪異記事というのが、九世紀の鞠智城の関連史料のすべてであるということになります。

(二) 兵庫の怪異記事の検討

この四つの記事の意味をどう考えるかということになりますが、実をいいますと九世紀には、全国的に兵庫の怪異というのが頻発していたということがあります。

これまで、兵庫ということで、軍事的な関係で捉えられることが多かつたわけですけれども、なぜ九世紀だけこのような怪異、兵庫の怪異が多いかということを考える場合、確かに軍事的な脅威と結びつけて考えることも大事なのですが、この九世紀というのはいわゆる大地激動の時代といわれるよう、火山の活動が活発化し、地震が頻発した時代であったことがあります。二〇一一年の東日本大震災とほぼ同じ規模の地震、津波が、この九世紀に発生したということをお聞きになつた方も多いかと思います。そのほか、有史以来最大の富士山の大規模な噴火があつたとか、阿蘇山とか開聞岳とか、いろいろな火山が噴火したり、地震が各地で起つたりするという、そういう時代だったわけです。

先ほど言つたように鼓が何もしないのに突然鳴つたとかというのは、地震の振動で揺れて動いて鳴つたということも、十分に考え得るわけです。そのような時代的な背景というものを割り引いて考える必要があるだろうと思います。また、そういうものが起つたことについて、何だ、単なる地震だろうというふうに済まさない、何かの予兆ではないかと考えるというのは、この九世紀にはいわゆる纏緯思想という中国的な思

想が普及していったということも、併せて考える必要があるだろうと思います。つまり、讃緯思想というのは何か起こると、不思議な現象が起こると何かの前兆ではないかという形で考えるもので、そういう考え方が広まつていった時代なわけです。そういう時代的な問題を踏まえて、兵庫の怪異記事というものを再検討する必要があるのでないかと考えています。

それから、九世紀の兵庫の怪異記事をすべて取り上げて見てみると、大体日本海沿岸の怪異については、隣国新羅の兵寇と結び付けられる傾向があるわけですが、日本海沿岸でないところでは、必ずしもそれが新羅が攻めて来る予兆と捉えられているわけではないということがあります（資料編26・27頁表）。そういうわけで、兵庫の怪異すべてが、すぐ対外的脅威を意味しているのだというふうに、当時の人々が認識したかどうかは疑問であると考えています。

鞠智城の立地というのは、本日の井上さんの地図などでもよくご理解できたかと思いますけれども、かなり内陸部に位置しておりまして、日本海沿岸ではなくて、離れているわけとして、そのような所での怪異現象が、全て対外的な脅威と結び付けられて認識されたかということについては、これは慎重に判断する必要があるのでないかと思っています。また、対外的脅威を示す予兆ならば、鞠智城よりもっと最前线にある大野城とか、基肄城のほうでなぜ怪異が起らなのかということが、当然疑問になるわけです。最も最前线になるはずの、もっとそういう鞠智城よりも新羅の侵寇の前面に立つような山城で、こういう怪異が起きないのはなぜなのかということに対して、十分説明が付かないだろうということがあります。

むしろ、こういった鞠智城の怪異記事というものについては、怪異が四回、これが記録されているわけですけれども、その怪異を頻繁に察知できるほど、鞠智城には恒常に人間が配置されていたということを読み取るべきではないかというふうに考えてています。つまり、施設は残っていても使われないで、意味のないような形で残っている所だったならば、何が起こつても誰も気づかない可能性があるわけですが。何かが起るたびに、兵庫のほうで自然に鼓が鳴っている、何だろうというふうに異変を知ることができるというのは、そこに人がいるから知ることができるわけとして、恒常に鞠智城に人員がこの当時配置されていたということを示すものとして、重視するべきではないかというふうに考えてています。こういった兵庫の怪異を対外的な危機に結びつけて、そのために鞠智城が存続したんだというふうな理解については、私は慎重に考えるべきではないかと思っています。

三、九世紀の対外危機について

（一）新羅兵寇の危機について

実際、九世紀のその対外的な危機とはどういうものかということを、ここで簡単に見ていきたいと思います。

隣国新羅の兵寇の危機ということで日本海沿岸では緊張が存在したということは、これは事実です。この当時の対外的危機の実態として、重要なものを年表（資料編28頁上表）のほうに挙げておりますが、例えば

八六六年には肥前国の基肄郡の人が、新羅の人と対馬を奪取しようという、そういう計画を持つていて、それが密告されたという事件が起こっています。

また、同じ年には隱岐国の人と謀して謀反を企んでいるという、そういう密告があつたり、また、八六九年には新羅の海賊が博多湾停泊中の豊前国の年貢船を襲撃して、略奪するという事件が起つたり、八七〇年には新羅に捕捉された対馬島民が帰国して、新羅の対馬奪取のうわさ、これを伝えるというようなことがあつたり、八七〇年には大宰小沢藤原元利萬倍という人物が新羅王と通謀して謀反を企んでいたという密告が行なわれたり、八九三年には新羅海賊が肥前国松浦郡・飽田郡を襲う、八九四年には新羅海賊が辺島や対馬に入寇する、八九五年には新羅海賊が壱岐島を襲うというようなことが、主な事件としてあります。対馬を奪い取ろうとか、謀反を企んでいるとかという、そういう事件もありましたが、そのほとんどが誣（ふ）告というもので実は実体のないうその、でっち上げの密告であつたということがあります。そういうことで、実際に被害として生じた事件としては、これは主に新羅海賊が、日本の島々や大宰府の前の博多湾を襲撃したりするという海賊の乱暴横行が、具体的なものとして認識されていたのではないかと考えられます。

したがつて、この当時の対外的危機というのは、国家間の全面戦争とか、侵略戦争というものを意味するようなものではなかつたということを、十分認識する必要があるかと思います。つまり、七世紀後半のようないいこと、山城を必要とするような危機ではなかつたということです。このことはこれからお話を防備体制から

見ても、そのように考えていいのではないかと思っています。

(二) 危機への対処について

この対外的な危機への対処ということで、具体的に当時の政府は何を行ったかということですが、まず行わされたのは防備兵員の増強です。

まず統領・選士の配備体制を変えるということで、八六九年には大宰府配備の統領、選士四〇人を鴻臚館に移し置くというような形で、また、選士一〇〇人を増員して鴻臚館に配備するとかというような形で、鴻臚館の警備を強化するということが行なわれていることが分かります（資料編28頁下表）。また、「夷俘」という、東北地方で大和政権というか、律令国家に下つた蝦夷などの人々を九州のほうに連れて来て、兵員として利用するということが行なわれていたわけですが、八六九年には二〇〇人の夷俘が配備されたり、八九五年には五〇人が特に博多の警固所に加え置かれたりという形で、やはりこれも博多湾とか、鴻臚館の警備を中心に配備されていることが分かります。

要するに、博多湾、鴻臚館というのは直接海賊の襲撃の対象になり得る場所であるから、そこの兵備だけを増強するということであつて、海賊対策に取られたものであつたことがあります。これは戦争を意識したものだったのであれば、このような小規模な増員では全く意味を持たないわけですから、この程度の増員というのは、海賊対策を念頭に置いた兵員増強というふうに考えざるを得ないことがあります。つまり、八世紀末までの大規模な軍備を復活させるものではない、そのような大規模な軍備が必要とされな

いような危機として認識されていたということを注意しておきたいことがあります。

もう一つ注目される対策としては、この時期以降、西日本諸国に弩師というものが配置されていったといことが知られています。八一四年に大宰府に弩師が設置されて以降、八九九年に肥後国に設置されるまで、弩師が次々と日本海沿岸を中心として設置されていったことが知られます（資料編29頁表）。肥後に配置されていますが、肥後が実は最も弩師の配置が遅く、日本海沿岸部に比べて、対外的脅威が低かったということが、こういった配置の順番からも伺うことができるかと思います。

ちなみに「弩」とは何かということなのですが、弩というのは秦の始皇帝墓の兵馬俑とかをご存心があるて、ご覧になつた方も多いと思いませんけれども、その中にも弩を構えた兵馬俑などが存在しております。そのくらいずっと古い時代から中国で発達した射撃用の武器として、弓矢よりも大変飛距離、貫通力に優れたという強力な武器なわけですが、簡単な人間一人が手で持つ携帯用の弩もありますが、大型なものになると、設置型の大きな弩というのも存在するわけです。

日本では九世紀前半に島史真という人物が回転式の新型弩、これを発明したということが当時の歴史書に記されています。これだと固定式ですから回転式じゃないわけですが、これがどういうふうに回転するのか具体的には分かりませんが、簡単にぐるぐると三六〇度回転して、どの方角に対しても打てる、そういうふうな新式の弩を開発したということが知られています。これは大変強力な武器であると当時考えられていましたことが知られています。この弩というものを作つたり、またはその操作を教える、そのような存在

が弩師なわけとして、先ほどの弩師の配置というのは、そういった弩という新式の強力な武器を配置して、沿岸防備を強化するという目的であつたということが考えられています。しかし、その弩、弩師の配置が肥後国が一番遅れていたわけです。

したがつて、九世紀の対外危機と鞠智城との関連を考えた場合、先ほど申し上げましたように山城を必要とするような七世紀後半に起こり得ると考えられたような、全面戦争とか、侵略戦争というのはこの九世紀の段階では、まったく想定されていないということです。実際に、山城が設置された七世紀後半のような国防体制が取られていません。七世紀後半の実際の人員配置がどうであつたかは分かりませんけれども、危機が一段落ついた八世紀においても、二万人の防備体制が続いていたわけですが、そういった二万人の防備体制に復活するかというと、そういうことはされていないわけです。また、弩の配置から見ても鞠智城の所在する肥後国というのは、対外危機の防備上、実は重要性はそれほど高くない。最後に配置されているということがあります。

従来、文献の先生方は鞠智城が九世紀以降長く存続した理由を、対外危機と結びつけて理解される方が多かつたわけですけれども、鞠智城の存続の理由は対外危機に求めることは、これはできないのではないかというものが、私の結論ということになります。

四・九世紀以降に鞠智城が存続した理由について

それならば、なぜ九世紀以降も鞠智城が存続したのかということを別に考える必要があるわけですが、要するに、鞠智城が他の山城と違っているから存続し得たと考えざるを得ないことがあります。つまり、鞠智城の機能とか、特殊性というものを十分検討する必要があるのでないかということです。

(一) 鞠智城の機能・特殊性

まず一つ、他の山城と違うこととしては、先ほども少し触れたように、鞠智城というのは他の山城に比べて内陸部に位置すること。鞠智城だけではないわけですが、直接の防備体制に結びつくような場所ではなく、かなり奥まつた内陸部、菊池川の中流域に存在しているということがあります。また、標高・比高差が低めである。これも先ほど井上さんの図解でもつと詳しく説明されていましたけれども、あまりそれほど比高差が高くないことがあります。また、最も大きな特徴としては、これも井上さんの写真などで詳しく説明されていましたけれども、他の山城には平坦な場所がほとんどないけれども、鞠智城は台地状の丘陵に造られていて、かなり広い平坦部を持つていることがあります。

また、鞠智城は交通の要所に立地していること。鞠智城の南の端の辺りに車路という、これは官道を意味するものだということが明らかにされていますけれども、鞠智城の南のほうを車路という、重要な官道、国道みたいなものが走っていて、九州の東西南北につながるような交通上重要な立地を占めていたということが指摘されています。また、西住さんのお話にもあったように、鞠智城には他の山城にないような特殊な構

造物が存在しています。八角形の建物が一番象徴的かもしれません、本日詳しくお話をあつた貯水池など、その他にもいろいろと、他の山城にないような特殊な構造物が存在していることがあります。

(二) 菊池郡との関わり

そういうものを踏まえて、鞠智城の存続の意味を考えていく必要があるのでないかということがありま
すが、ここでもう一度文献のほうに戻って考えますと、九世紀の鞠智城に関しては、菊池郡との関わりが濃
厚ではないかということが考えられます。この点については、ちょっと他の先生方には異論もあるかもしれません
が、例えば遺構上の変化として本日お話をあつたように、Ⅲ期という土器が全く出ない空白期・衰退
期を経て、Ⅳ期に变革期という形で、鞠智城の性格が大きく変わったと考えられているわけです。それまで
の管理棟的な建物がなくなつて、貯水池の機能が低下して、ついには使われなくなつっていく。その代わり
に礎石建ちの建物が造られて、食糧などの備蓄機能が強化されているという、そのようなことが西住さんの
報告で説明されていましたかと思いますが。ちょうどこういった遺構上の変化が、本日お話をしました八世紀末
から始まつた「東アジア世界」の変貌に対応しているのではないかと私は考えています。また、この時期に
大宰府の直轄から肥後国菊池郡の管轄に変化したのではないかとも考えています。つまり、菊池郡の城院と
いうような形で史料に出てくるわけとして、菊池郡というものが頭に冠する、そのような性格に変わったの
ではないかと思っています。

この菊池郡の城院とか、菊池城院という、「院」という言葉が付いているわけですが、この「院」と付く

名称には、「太政官院」とか、「正倉院」とか、「穀倉院」とかがあり、この「院」というのは官衙の一施設、一区画の名称として、よく使われることがあります。そういう意味では、官衙的な性格が名称からも伺われるのではないかということがあります。

それから、先ほど申しました九世紀の兵庫の怪異の発生というのが、主に地方官衙で発生しており、そのことの共通性というものも、当然考える必要があるのではないかと思います。また、鞠智城の遺構の消滅は一〇世紀後半ということなのですが、実をいうと全国的に見て地方官衙の消滅の時期がその一〇世紀後半ということで、官衙の消滅の時期にも合致していると考えます。

以上のことから、鞠智城が存続した理由は、他の山城にない機能・特殊性を持つていたことにあり、その鞠智城の特性を活かした形で郡の一施設として、九世紀以降活用されていき、防備機能の高い、交通至便な貯蔵基地として生まれ変わったのではないかと考えています。

鞠智城というのは大変面白いお城で、このお城の意義を解き明かすことが、九州の古代史のみならず、日本の古代史全体の謎を解く一つの鍵になるのではないかと考えています。ご清聴、どうもありがとうございました。

講演③

平安時代の大宰府と古代山城

講演者紹介

松川博一（まつかわ ひろかず）

山口大学大学院人文科学研究科修士課程修了。太宰府市文化ふれあい館学芸主任、九州国立博物館研究員、福岡県教育厅総務部文化財保護課技術主査を経て、現在、九州歴史資料館学芸研究班長・学芸員。専門は日本古代史（大宰府の軍制・出土文字資料など）

講演③ 「平安時代の大宰府と古代山城」

九州歴史資料館学芸員 松川博一

ただ今ご紹介にあずかりました九州歴史資料館の松川と申します。九州歴史資料館は、以前、大宰府にありました。現在は、大宰府から少し南に下った小郡市に移転をしています。九州歴史資料館は来年で大宰府跡発掘五〇周年を迎えます。これまでに大宰府政庁跡、それから大野城、水城、そういう遺跡の発掘調査をしている施設です。

本日は「平安時代の大宰府と古代山城」ということでお話をさせていただきます。本日は、四つほどテーマを設けさせていただいております。まず、大宰府の当時の軍制がどういったものであったのか。そして、二番目に大宰府と大野城。大野城は、先ほどから何回も話題に上がっています大宰府政庁の後ろにあります朝鮮式山城。それから、三番目に大宰府と鞠智城ということで、本日のお話の本題になるかと思います。最後に、これは少し異色でありますが、古代山城と寺院ということでお話をさせていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひします。



はじめに - 存続する古代山城 -

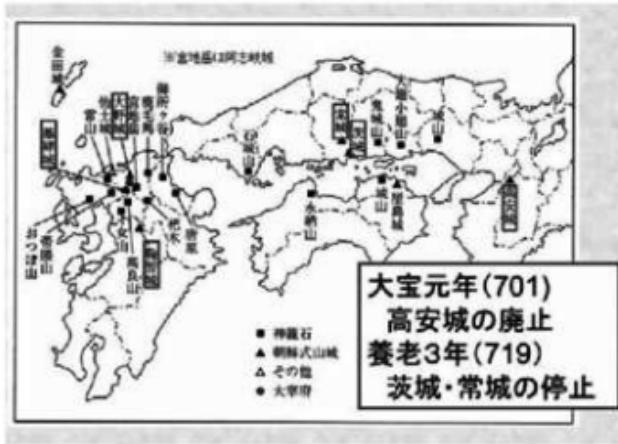


図39 古代山城の分布

に、一つは七〇一（大宝元）年に高安城、それから、七一九（養老三）年には茨城（いばらのき）、あるいは常城（つねのき）。史料の中で停廢の記事があります。そういうふた停廢の記事がある中で、奈良時代以降も確實に史料上で存在していたこと、あるいは、機能していたことが考古学の成果も含めて確認できるのが、大野城、基肄城、そして、鞠智城ということになります。

その鞠智城が最初に出てきますのが大野城、基肄城とともに、鞠智城が六九八年という年に修築をされたという記事（史料一）（以下、資料編参照）として、これが鞠智城の初見記事ということになります。では、最後の記事はどうありますと、正史上で確認できる最後の記事が「日本三代実録」にあります菊池郡の城院の兵庫という記事でございまして、

少なくとも史料上では、九世紀末まで山城が存続していたことが確認できます。これが鞠智城の最後の記事でありますし、また、古代山城としても最後の記事ということになります。

一、大宰府の軍制

最初に、大宰府の軍制ということでお話をさせていただきますが、これはもう既に前の先生たちのほうでほぼお話がされています。特色として私は四点整理をさせていただきますと、一つ目は先ほどからも話が出ています防人が九州沿岸部に置かれる。それから、二つ目に、軍団兵士が他の地域については健兒制に移行するのですが、大宰府管内、それから、東北地域につきましては、軍団兵士が存続をしていきます。それから、三番目です。大宰府常備軍ということですけれども、このお話は今までありませんでしたが、大宰府という役所、また、その周辺の施設を守るために兵員が必要になつてきます。その兵員の確保のため、西海道の諸国（諸侯）の兵士たちを集めて、いわば「遠の朝廷」の衛士（近衛兵）というような形で、常備軍が置かれていたと考えられています。四番目ですけれども、軍団兵士制が廃止された後、それに代わるものとして九州だけですが、統領選士衛卒制（近衛兵）というものが生まれてきます。これらは、大宰府、あるいは、西海道が持つ対外的、地理的な環境、あるいは、西辺の防備という、そういった意味合いでこういった軍制の特色が挙げられるかと思います。具体的には、対外防衛あるいは対隼人政策、そういった邊境防備を担うべき地方軍制として成立をして、独自の過程をたどったと考えられます。それを図のほうに整理をさせていただきました（図40）。

領が八人、選士が四〇〇人という形で、これは大宰府のそれまでの常備軍を統領選士制の中に取り入れた

は軍團制でいいますと軍毅に当たるもの、そして、選士というものが軍團兵士制のなかに置かれますけれども、それに当たるものを大宰府では選士といふうに呼んでいます。大宰府には統

健児が置かれますけれども、それに当たるものを大宰府では選士といふうに呼んでいます。大宰府には統

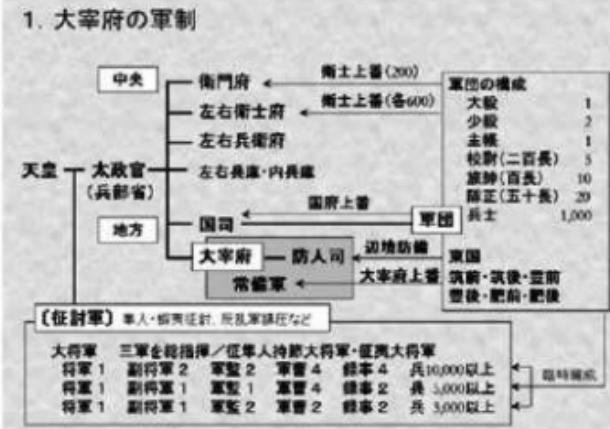


図40 大宰府の軍制

東国のはうから防人が辺境防備のために大宰府に来まして、そして、大宰府にはその防人を所管するための防人司が置かれておりました。それと、筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後の六国から兵士たちが大宰府に上番をして、常備軍として大宰府の守衛に当たっていました。いわば中央でいいますと諸国から衛士が上番をして、宮都を守つていたように、「遠の朝廷」である大宰府を守衛する常備軍が当時はいたと考えています。特に九州ですと、隼人、あるいは、藤原広嗣の乱といった反乱が起きたときにはそういった軍團兵士たちが征討軍として組織されて、その対応に当たるという、そういう形の軍制が当時は敷かれております。

その軍團兵士制が、八二六年という年に廃止をされます。

それに代わりまして、大宰府と管内の九国二島に統領、これ

という形になります。九国二島にも軍團に代わるような形で、統領・選士がそれぞれ配備をされます。この他に大宰府には、衛卒が二〇〇人配置をされています。これは軍團兵士が雜役、兵役以外のさまざまな労役に従事をさせるということが当時問題になつていて、その雜役に従事させる兵員として、衛卒が二〇〇人配置されています。

その中で衛卒の職掌として挙げられているものが、大野城の修理です。四〇名がその大野城に配置されていました。仕事としては兵馬の飼育、それから貢上染物所・作紙所といった大宰府にある工房の雜役に当たつていたということが、史料で確認することができます。これが大宰府の軍制です。四つの特徴のお話をしました。それを前提にした上で、これからそれぞれ大宰府と大野城の関係、また、大宰府と鞠智城の関係について、それぞれ見ていきたいと思います。

二、大宰府と大野城

これまでの写真の中でも紹介されております大宰府政厅跡（図41）は、現在、都府樓跡という名前で親しまれています。その後背に四王寺山という山がありまして、後ほどまた四王寺山の名前の由来になりました四天王寺のお話は差し上げますが、大野城跡があります。そして、博多湾からの侵攻に備えて水城が存在するということになります。

では、当時山城を所管していたのは誰かというお話ですが、律令の中の職員令の中に国司の職掌として「城



図41 大野城跡

牧」という規定があります。当時の国司が担うべき責務として城の管理と、牧、つまり軍馬の飼育です。そういうしたことが職掌の中に挙げられていて、律令の規定に従えば基本的に所在国、その山城が所在した国司がそれを所管したというふうに考えられます。この国司の指揮の下で、軍団兵士がその城の守衛、あるいは維持管理に当たったと考えられ、大野城であれば筑前国司、基肄城であれば肥前国司、鞠智城であれば肥後国司が、その城の所管をしていたと考えられます。

具体的に大宰府と大野城の関係を見ていくと、大宰府は筑前国にあるのですが、この二つの関係というのは複雑でして、あるときは大宰府が筑前国の国政も見る。また、あるときは大宰府と筑前国と、別々に存在します。それを踏まえて、「國別るるの時、國司、城を掌る」という記事が、八二二（弘仁一二）年の、四天王寺の所管を巡つて出された官符の中にはあります。つまり大宰府から筑前国が別置されているときには、国司が城を掌るということが明確に書かれています。これは裏を返しますと、大宰府が兼帶をしているとき、つまり筑前国の国政を見ているときには、大宰府が大野城を直接管轄していたという言い方ができるかもしれません。ここにあ

りますように、大野城は筑前国司が所管をしていたことが、これからも分かります。

また、それを少し補強する記述が、九〇五（延喜五）年の『觀世音寺資財帳』にあります。觀世音寺といふのは大宰府の「府の大寺」といわれています。大宰府に付属する寺院です。資財帳とは、その寺院のい

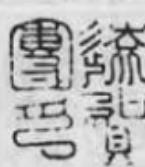
わば財産目録です。その中に寺領の範囲を示す記述がありまして、そこに大野城山の中に、遠賀門というものがあつたと書かれています。現在はこちらを「おんが」と読んでいますが、当時は「おか」というふうに、この字で読んでいました。

当時、筑前国には四つの軍團があつたことは分かつているのですが、具体的な名前は分かつておりませんでした。こちらに、印鑑（図42）がございますが、これは遠賀軍團が使つていた印鑑で、「遠賀團印」と刻まれています。これにより筑前国に遠賀團という軍團があつたということが分かっています。おそらくは「遠賀門」というのは、筑前国の中の遠賀軍團が守衛していたことに由来する門号と考えることができます。

また、大宰府が筑前国を兼帶していたときには、大宰府は直接大野城を所管します。その際には大野城の守衛というのは、府下六国から大宰府へ上番していた軍團兵士が担つていた。いわば大宰府の常備軍が、そ

重要文化財 銅印「遠賀團印」 東京国立博物館所蔵

図42 遠賀團印



れを担当していたのではないかと私は考えています。兵士の役割としては、城門、あるいは、城内にある倉庫の守衛だけではなくて、「城障」の修繕もありました。「城」とは山城の修繕、「障」というのは、これは堀という意味があり、大宰府でそういった大きな堀がある施設ということであれば、水城に当たるのかもしれません。大宰府の中には「大工」という官人がおりまして、その職掌の中にも「城障」という形で城の修理が職掌として挙げられています。

大宰府と筑前国は先ほど申し上げたように、兼帶するときと別置をすることが繰り返されるのですが、次第に、筑前国が別に置かれたとしても、大宰府が大野城を直接所管するようになつていきます。その所掌を担うべき役人として「主城」、それから、その役所として「城司」が置かれたという記事が、史料上確認することができます。

そういうふた軍團兵士制が機能していたのですが、それが統領選士衛卒制へ移行していくと、その担い手というのは軍團兵士から選士に変わっていきます。ですから、大野城の守衛というのは、選士が当たることになります。実際その大宰府の選士四〇〇人のうち、何名が大野城に配備されたかということは、残念ながら記録はありませんが、当時の大宰府の守衛対象として大野城というのは、後ほどまたその具体的な史料はお見せしますけれども、優先順位は高かつたということが分かっています。

統領と選士の他に、大宰府には衛卒が置かれたと先程お話ししました。その二〇〇人のうちの五分の一に当たる四〇名、これが大野城の修理をはじめとした日常的な維持管理をするために常駐をしていました。当時

の太政官符を見ていくと、大野城の周辺の農民の中には衛卒たちがもらう糧米を納める城庫の周りに住まいを構えて、そして、彼らを相手にどうも商売をするような人々も現れたということが、史料で確認することができます。実際、これまでもお話をありましたように朝鮮式山城の中には多くの倉庫群、大野城の場合でも七〇棟以上の倉庫があつたということが分かっています。

では、当時「クラ」というものが、どういうものであつたかというお話を少し差し上げたいと思います。大宰府には、記録を見ていくと、大きく分けると二つの「クラ」があつたということが確認をされます。一つは「税倉」。大宰府の税司が所管をしていまして、大宰府管下の六国から貢納された稻穀を納めた倉、これを税倉といっています。それから、もう一つ、「府庫」という、これは恐らく大宰府政府の近くに置かれた倉庫だと思われますが、大宰府の藏司が所管しました。大宰府政府の向かって左手、方角でいいますと西の丘陵に藏司という地名が残つていて、そこが比定地になつています。現在発掘調査を行つているところです。

ここには西海道諸国から貢納された布、あるいは真綿といった調庸物が収納されていました。他の地域ですと、調庸物というのは都に直接運ばれるわけですが、大宰府の場合は、西海道管内（九州）の調庸物といふのは大宰府に納められて、そのほとんどは大宰府の経費、財源として使われます。そういったこともありまして、この府庫のことを「筑紫大蔵」といいました。「大蔵」というのは都に置かれた調庸物を納めた倉のことと、それにならつて「筑紫大蔵」という言い方をしました。他に武器、あるいは文書、書籍なども納

めた倉のことを府庫と呼んだのではないかということで整理がされています。ただ、武器庫だけは特に兵庫（ひょうご）という形で、特別視されています。

当時の大野城内にあった倉庫、その収納物を知ることができる史料というのは、意外と少なくていざれも平安時代の史料しかありません。大野城内の倉は大宰府政府の周辺にあった「府庫」、それから「税倉」に対して、「城庫」と呼ばれていたことが、史料で確認することができます。

その城庫に納められていた物で、具体的に知ることができるのが二例です。まず一つは「大野城器仗」です。「器仗」といいますのは、実戦で使う武器・武具。また、仗というのは「儀仗」つまり儀式等で使う武器・武具ですけれども、そういうものを大野城の兵庫に納めていたということが、記録で確認することができます。ですから、兵庫というのは政府の近くにある府庫と大宰府城内の城庫があり、二箇所に分散して置かれていたということが確認できます。七九九（延暦一八）年以降は基本的に不動とされ、つまり、余程のことがない限り動かさない。非常時であつたり、あるいは、修理以外には開封することが許されないというような形で保たれていたようです。

もう一つ、大野城の倉に納められていた物で分かるのは、先ほどもお話ししました大野城の衛卒の糧米です。大野城に配備された城の修理とか、あるいは日常の管理を行っていた衛卒四〇人分の糧米が、毎月二四斛支給され、これらが城庫に納められていたということが、記録で確認することができます。

大野城、実際に山城の中の倉庫にどういう物が納められていたのかということを知るのは、この二つの例

でしか知ることができません。

八七〇（貞觀一二）年、どうもこのときに庸米とか、雑米とか、そういった物というのは、府庫にすべて納めるようになっていることが言われています。確証はありませんが、もしかするとその前までは、その一部が城庫に収納されていた可能性も考えることができます。ただ、庸米にしろ、雑米にしろ、こちらは日常的に使う物でありますので、本来、府庫に納めるべきだとは思うのですが、一部城庫に収納されていた可能性も考えられます。

三、大宰府と鞠智城

続いて、大宰府と鞠智城ということでお話をしたいと思うのですが、残念ながら奈良時代の鞠智城のことを知ることができる史料というのはほほないということで、先ほどからもお話がありましたように、文武年間に記録が最初に現れて、後はもう九世紀の後半でないと、鞠智城の史料は確認ができないのです。ただ、これも鞠智城のことも含むのではないかと思われるものが、実は「養老衛禁律」という、現在でいうと刑法に当たるものですが、その中に「筑紫城」へ不法侵入したとき、あるいは、「筑紫城」の鑰を盗んだ際の罰則の規定（史料2）があります。この筑紫城については、筑前国にある城ということで、大宰府の背後にある大野城だけという理解をする方もおられるのですが、あえて筑紫城という表現を取っていることを考えますと、筑紫地域、いわゆる大宰府管内と考えると肥前の基肄城、それから、肥後の鞠智城の三城もこの筑

紫城に当てはめていいのではないか。つまり、冒頭の山城築治記事に表れている三城、これを筑紫城と考えていいのではないかと思っています。

その実際の箇条を見ますと、「兵庫の垣」、これは武器庫です。中央の武器庫も含めてだと思いますが、とにかくそういういた兵庫を取り囲む垣を越えた場合、それと同じく筑紫城を越えた場合、これは「徒一年」と書いています。これは懲役刑一年ということです。その下に「曹司」というのがあります。これは中央の役所の垣を越えた場合、それと大宰府の垣もそれに倣うと書いてあります。筑紫城、つまり九州の山城を越えた場合、それと併せて東北の城柵を越えた場合には、兵庫を越えたのと同じ重い罪に問われているということで、當時筑紫城というのは、守衛すべき重要な場所であったということが分かります。

その筑紫城について、今度は鑑の話になります。【史料3】ということで挙げていますが、その中に宮殿門、それから、庫藏および倉庫、各種宮城の鑑を盗んだ場合、あるいは各種倉庫の鑑を盗んだ場合と同様に、筑紫城などの鑑を盗んだ場合には、同じく懲役一年という重い罰則が設けられていることが確認できます。このように大宰府管内の山城そのものが、兵士たちが警衛すべき区域として東北の城柵や倉庫、とりわけ兵庫と同等との認識があったということが分かります。この筑紫城に鞠智城も含まれると考えていいのではないかと思います。

その鞠智城内にあった兵庫の記事ですが、平安時代には鞠智城内の兵庫の異変であったり、あるいは不動倉の火災を伝える記事が見えます。これが九世紀の後半代です。これは先ほど榎本さんのほうからもお話を

あつたところですが、これによつて少なくとも鞠智城内に大野城と同様に、そいつた武器を納めた兵庫があつたということがはつきりと分かります。

【史料4】 ですけれども、こちらは大宰府が中央に対し言つてることとして、「肥後国菊池城院の兵庫の鼓、自ら鳴る」と。「同城の不動倉十一宇、火く」という記事があります。このように兵庫内の器仗が自鳴したり、あるいは、そいつた兵庫の上に大きな鳥が群れたりという兵革、あるいは凶事の予兆記事【史料5】 というのが、特にこれは榎本さんのほうで整理をされていらっしゃいましたけれども、九世紀後半に多く見られる傾向があります。

それで、そいつた記事で大宰府でも同様にそいつた記事が見られまして、【史料6】 は八六九（貞觀一二）年、新羅の海賊が豊前國の綿を略奪するという事件が起きていまして、それを受け大鳥が「大宰府の序事」、恐らくは大宰府政庁の正殿をいうのではないかと思ひますけれども、その「序事」ならびに「門樓」。大宰府政庁には南門があり、これが楼閣の門といわれています。また、朱雀門の礎石ではないかといわれている門礎も確認されています。そつした南面する重閣の門、大宰府を象徴する、そいつた建物に大鳥が集う。それと同列に、兵庫の上にもそいつた大鳥が集つてゐるという記事がこちらで見ることができます。それを受け、これは隣境の兵寇、恐らく新羅海賊が八六九（貞觀一二）年に訪れたということを受けて、そいつた大宰府の兵庫などにも怪異記事が同様に見られるということになります。これに対しまして、現実的な対応として、諸国の俘囚を大宰府に配備をする。あるいは、大宰府や鴻臚館に常駐をする統領・選士

の増員を図る。また、府庫、それから、大野城の城庫に納められている武器・武具が実際に実戦のときに使えるかどうかということを検定するといったことが行なわれています。

続いて、もう一つ鞠智城の中にあったものとして、不動倉があります。鞠智城内に不動倉が一棟以上存在したということは、城の中の「不動倉十一宇を火く」という記事で知ることができます。この不動倉といふものはどういうものかといいますと、正倉のうち稲穀でいっぱいになりますと、それを封印して非常の備蓄用として、その倉をいわば認定をするわけです。これは、基本的にそれぞれ郡ごとに設置されていたといふことが分かつています。

この稲穀は、基本的には備蓄されているものですので、通常消費されることがないのですが、「賑給」といって、後ほどまた詳しく見ていきますけれども、飢餓（ききん）であつたり、あるいは疫病、そういった際に民にお米を与える、あるいは薬を与える、それを賑給といいまして、そういう特別なとき以外には基本的には消費されないものです。ただ、その鞠智城の不動倉が実際どういう形で使われていたのか、あるいは、どういったことに備えたのかということは、このただ一一宇の不動倉が焼かれたという記事だけではわかりません。その不動倉の役割を知る上で、実は重要な史料が大宰府から出ています。

これがその木簡です（史料7）。大宰府政庁の前面、不丁地区というのですが、そこに官衙域が存在しています。今でいう官庁街が存在しておりまして、そこから出た木簡の中に、筑前・筑後・肥等の国にお米を班給するため、基肄城の稲穀を使いなさいという命令を受けて、大宰府の大監、大宰府の第三等官である

「大監」の田中朝臣という人物が来たという記述があります。こちらにあるように賑給というのは、疫病・災害・飢饉などに、とくに穀穀を、病人・高齢者・それから貧窮者に支給することをいいます。

この田中朝臣がそれではどういう人物かということなのですが、「播磨国郡稲帳」の中に、七三三（天平四）年という年に大宰少監という人物として、田中朝臣三上という人物がいるのです。この人物は木簡では正六位上なのですが、七三六（天平八）年に外從五位下になつていまして、もしこの三上がこの木簡の田中朝臣とすれば、七三三（天平四）年から七三五（天平七）年の間にこの木簡の年代は比定されるのです。この木簡が出た大溝からは、七三四（天平六）年の木簡が出土していまして、その間に賑給を必要とした事例としては、七三五（天平七）年、大宰府管内において疫病が流行していまして、おそらくこの鞠智城の倉庫に納められた穀穀というのは、そういった疫病に使われたのではないかと考えることができます。この木簡自体、基肄城にも同様に不動倉があつた可能性を示します。また、鞠智城の不動倉がどのように使われていたということを窺い知ることができる史料としても、貴重ではないかと思います。

続きまして、もう一つ、兵庫の記事（史料8）があります。これは八七九（元慶三）年という年に「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸、自ら鳴る」という記事です。これが鞠智城の最後の記事になるのですが、実はこの記事の前、こちらのほうが重要でして、これは豊前国八幡大菩薩宮というのは、現在の宇佐八幡宮に当たっており、宇佐八幡宮自体が外征とか、國家鎮護の神として、当時崇められていましたので、この記事と肥後国菊池郡城院の兵庫の異変記事というのは、恐らく無関係ではないだろうと考えられます。兵庫の異

変というのも、新羅来寇、新羅の海賊が来るということの予兆記事として、捉えるべきではないだろうかと考えています。

このように見ていくと、その前年には隣敵である新羅がわが国に隙を狙っているということで、香椎宮の託宣があつたり、それを受けて三月に宇佐八幡宮と鞠智城の兵庫の異変の記事があらわれます。このように鞠智城の異変というのが、新羅の海賊との関係で捉えられる点もあるのではないかだろうか。あるいは、その予兆記事として結びつけて考えられるのではないかと思います。

四、古代山城と寺院

最後に、古代山城と寺院ということでお話をしたいと思います。**【史料9】**は七四四(宝龟五)年という年に、大野城内に四天王寺というお寺が建てられて、四天王像が納められ、そして、金光明最勝王經がそこで毎日のように読誦されます。これは何に備えたかといいますと、ここにありますように新羅の呪詛に対し、新羅に対峙する高くて清淨な場所に四天王を納めるようという命令が下されます。その場所というのが、実は後に史料で出てきますが、「鼓峯」という場所にそれが建てられているのです。先ほど予兆記事の中にも鼓というのが出てきましたが、何かそういう山城あるいは兵庫、そういったものを象徴するもののかかもしれません。

あるいは、正税から賄われていた。まさに大宰府直属の官寺であつたということが分かります。この四天王寺なのですが、いつたん国内が安定したということで中止といいますか、四天王寺自体が一度廃される、停止されるのです。そして、筑前国の金光明寺、つまり筑前国分寺に四天王像は移されるのです。ところが、それを移した途端に疫病がはやつたということで、再びこれは戻すというような記事（【史料10】）になつてます。ですから、八〇七（大同二）年という年に四天王像を国分寺に移したのですが、疫病がはやるということで、四天王寺に再び置かれるということになります。

その前年には、大宰府管内では日照りであつたり、あるいは、疫病などがはやつていて、それで大変であるという記事を見る事ができます。そもそも四天王寺自体が新羅の呪詛に対抗するという観念的な國土守護のために置かれました。その四天王寺が再び置かれた原因が疫病というのも、疫病というのが新羅からもたらされるもの、あるいは、新羅の呪詛によるものというような、そういう認識に基づくものではないかと考えられます。

それを考えますと、【史料11】に、肥後国の阿蘇大神が怒氣を懷んでいて、そして、疫癆が発り、これは疫病あるいは、隣境の兵というのは、これは新羅のことを指していると思います。それに備えて肥後の国司が奉幣をする。併せてこちら大宰府においては、これは「城山」と書いてありますが、これは大野城の四天王寺において、また、同じように転説がされている。肥後国だけではなく、大宰府でも兵疫を調伏するための大野城内の四天王寺において、同じ經典の転説が行なわれているということが分かります。さらにこれは広

がりを見せまして、新羅調伏のために山陰道の伯耆をはじめとした国々にも四天王寺が建立され、そのモデルとなつたのが、大野城内の四天王寺ということになります。新羅海賊への脅威を契機として、辺境地域においてそついた四天王寺や、四天王法が広がつていつたということを確認できるわけです。

ですから、鞠智城の怪異記事というのは、全国的に新羅、あるいは、疫病への脅威が高まつた時期にちょうど当たつていて、先ほどの兵疫という言葉に象徴される、新羅の海賊の来寇とか、あるいは、疫病の流行といったものが、当時の人々にとつては対外的な脅威として、一体的なものとして捉えられていた。それに対して、現実的なところでは兵庫に納められた武器・武具、それから、不動倉に集積された稻穀、そういった物が現実的な備えとして城の中に設けられ、そして、神仏の祈りです。四天王寺であつたり、あるいは、その阿蘇大神であつたり、そついた神への祈りが、その脅威への觀念的な対応だったのではないかと考えているところです。

おわりに　－大宰府の危機管理と古代山城－

最後、まとめですけれども、大宰府というのは西海道支配のほかに对外防衛の拠点、あるいは外交の窓口という役割を担つていて、疫病対策や飢饉対策以外に对外的な危機、国内的な危機あるいは、外国の使節の応接といった優先すべき臨時的な支出が発生する可能性が、他の地域と比べて高いということです。万が一の備え、蓄えとして大野城、基肄城、鞠智城などに大宰府管内の古代山城、有事の際に必要な武器・武

具を納める兵庫、あるいは、兵糧や非常時の公糧、さらには財源を蓄える不動倉を設けて、大宰府が厳しく管轄したのではないかと考えています。

以上で私のお話は終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッショ^ン

コーディネーター紹介

佐藤信（さとう まこと）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究员、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。文学博士。専門は日本古代史。

パネラー

井上 和人（明治大学大学院文学研究科特任教授）

榎本 淳一（大正大学文学部歴史学科教授）

松川 博一（九州歴史資料館学芸研究班長・学芸員）

西住 欣一郎（歴史公園鞠智城・温故創生館長）





佐藤…

今日はたいへん充実した講演・報告を聞かせていただきまして、ありがとうございました。これら約六〇分程度ですが、ディスカッションをしたいと思っています。

最初に大きな章立てを考えますと、一つは、最初の井上さんのご講演が多岐にわたるもので、最後に時間が少々足りなかつたこともありますので、少し補つていただきまして、それに関連して、他のパネリストの方々のご意見を少しお伺いします。その後、本日の本題は「鞠智城の終焉と平安社会」ということですので、平安時代における鞠智城の存在意義あるいは機能について、議論を深めるというのが一番目の章になります。第三には、これから鞠智城の調査研究について、どのような課題が、本日のシンポジウムを踏まえてあり得るだろうかということを議論したいと思います。

まずははじめに、井上さんのご講演は随分多岐にわたるもので、古代山城論の全体に関わる内容にわたつたわけですが、最後に充分な時間が取れなかつたということもありますので、それをまず簡潔に補つていただいて、その後、それに関連したディスカッションをしたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。

井上… どうもありがとうございます。五分ほど時間をいただきましたので、

その時間を利用して少し伝え足りなかつたことを時間の限りお話させていただければと思います。

古代山城の歴史も、当然のことながら、大きな世界の歴史の中で捉えていかなければいけません。これは榎本さんも盛んに強調されていましたけれども、当時の国際関係の中でこそ、日本の歴史というものを見据えていかなければいけないと思います。私の話の最後のところで、日本列島中央集権国家と申しました。この日本列島中央集権国家は日本国です。この国家体制は実は今日の、もっと端的にいえば明治維新の国家体制とほとんどイコールなのです。日本列島に汎列島的な統一国家が生まれた。これは日本の歴史、七世紀以前にはなかつたことなのです。

そのきっかけは何かというと、中国大陸で、四〇〇年間分裂抗争の時代に終止符を打つたのが隋帝国です。六八九年に南北朝を統一して、隋帝国を樹立しました。隋帝国は国内を統一するやいなや周辺の諸国に対して、征服戦争を始めるのです。これは先ほどいました、華夷秩序の構築を目指したものであつたのです。隋は少しそれが度を過ぎまして、わずか二八年で滅びます。

六一八年以後を繼いだのが唐帝国。唐も一〇年間は国内の騒乱を抑えなければいけなかつた。その天下平定が達成されたのが、六二八年のことです。日本列島はそれに対してもどう行動したかというと、六三〇年、それまで広やかな大和盆地にあつた都を、飛鳥の谷の一番奥まつた所に避難させたのです。そのことに象徴されるように日本の國家、統一国家というのがなぜ生まれたのかというと、その理由はひとえに、中国大陆での統一国家の樹立と非常に密接な関わりがあるということを知らなければな

らないでしょ。

唐は百濟を攻める前にも、西域にあつた諸国を次から次に征服戦争を通じて滅ぼし服属させるのです。そういう歴史があつた上で、唐は新羅の要請に応えて百濟を侵略します。百濟を攻めた時点での唐の軍隊というのは、西域での戦いに手練れた兵士たちであり、それが朝鮮半島になだれ込んできたという、そういう状況を踏まえなければ、当時の日本列島の人々の危機感が、はつきりつかめないのかかもしれません。

そういうわけで日本列島中央集権国家の構築が天武朝期に進むと私は考えています。その一応の完成は七〇一年の大宝律令に示されますが、この中央集権国家はひとえに国防国家だったのです。外国の侵略から日本を守るために国家、統一国家を作る、これがすべてであつたと思うのです。まさに明治政府が歐米列強から、この日本列島を守るために構築されたのとほとんど同じ動因であつたということを知らなければならぬと思うのです。

その唐、日本を侵略しようとした唐は、奈良時代の中頃、もうすでに国家の土台が揺らぎはじめます。ですから、日本も統一国家を作つてがつちり固まつていなくても良いような、そういう国際環境になる。それが、榎本さんのおっしゃられた奈良時代後半から平安時代にかけてのさまざまな状況なのです。九世紀になりますと、日本では国家レベルの軍隊がなくなります。一〇世紀に至ると、鞠智城がなくなるわけですが、一〇世紀がどういう時期かといいますと、一〇世紀の初頭に唐帝国が滅び

るのです。そうしますと、日本ももう国一つにまとまって、海外からの脅威に対応する必要がなくなるという国際情勢になる。こうした東アジア、さらには世界全体の歴史の中で日本の歴史を見ていく。そうすることによって、より古代山城の意味も鮮明になってくると思うのです。

鞠智城については、また少し意見を述べたいと思います。

佐藤… それでは、最初に井上さんのご講演に関連して、他のパネラーの方たちに何か質問とか、こういう考え方もあるのではないかというようなことがあれば、一言ずついただきたいと思うのですが。榎本さん、いかがでしようか。

榎本… 井上さんのお話は大変刺激的なお話で、大変勉強になりました。私も最後のほうで鞠智城の特殊性というものをもとに存続の理由を考えたのですが、井上さんは鞠智城の特性を築城の時期の問題として捉えていたということで、大変啓発されました。鞠智城が他の山城と違った多くの特徴を持っている、機能を持つているということは、やはりそれはその築城したときの目的に大変密接につながっているものだというふうに、私も理解します。なぜあんなにいろいろ他の山城と違った機能や、特殊性を持つて鞠智城が造られたのか。そのあたり、井上さんのお話をもとに、今後はいろいろ検討していくかなければならないなど痛感した次第です。

井上..

先ほどの続きです。まさに鞠智城は内部に広い平坦地が設定されている。ですから鞠智城は使い勝手がいいのです。五十嵐基善さんが鞠智城の研究のご論文の中で「そこについたから鞠智城を使ったのだ」と述べていますが、まさにそうだと思います。それほどの平坦地を備えた山城は他にはありません。

もう少し詳細に見ますと、あと二つ、一番高いところに平坦地がある山岳型山城があります。一つは福岡県糸島市の雷山城。これは玄界灘を見下ろす標高五〇〇メートルほどの高みにある山城ですが、山頂部に若干の平坦地がある。鞠智城ほどの広さはありませんが、兵士が常駐するためのものとみられます。玄界灘を渡海してくる敵の艦隊、唐の侵略軍の出現を見張っている、そういう機能を備えた山城だったと思います。

もう一つは、高松市の屋嶋城です。山頂部分に細長い平坦地がある。瀬戸内海に突出した立地条件を生かして、西から敵の艦隊が接近してくるときにいち早く確認して、烽火（のろし）で次々に情報を中央に伝達していく。ですから、今後、それぞれの山城を、より正当な鑑識眼で見ていくと、まださまざまな発見があり得ると思っています。

佐藤..

私も本日の井上さんのご講演を聞きまして、軍略というのでしょうか、そこからそれぞれの古代の

山城を捉えるという点。特に、例えれば敗北した際に兵士たちをもう一遍再編成するためという山城の機能まで考えておられるのが、新しいなと思いました。

山城無益論みたいなお話があつたわけですけれども、百濟ではあまり機能しなかつたのではないかということが前提だったと思うのですが、私などは、例えれば隋の時代に隋の皇帝が三度も高句麗に大军で押し寄せたのですが、これは三度とも、高句麗は平壠城に立て籠もつて、山城を機能させて追い返してしまう。それが原因になって隋が滅ぶということになっていくわけで、私は、やはり山城はそんなに無益ではないかという考え方もあり得ると思っています。

唐の場合は、隋の失敗を知つておりますので、新羅と同盟を結んで攻めたというのが、全然隋とは違うものと私は思つているのですが、その点は井上さんはどう思われますか。

井上： ただ、百濟を攻めた唐が、わずか一〇日ほどの間に国内を蹂躪して、都を陥落させたという事実は非常に重大だと思うのです。

それから、もう一つ、鞠智城について、熊本県による研究助成事業で研究をされた近藤浩一さんの論文によると、滅亡した百濟の地に唐の軍隊が進駐するのですが、その進駐本部である熊津都督府の側では日本列島の山城というのはほとんど脅威に感じていなかつたという、そういう研究成果を発表されています。私は、それは正当な見解だと思います。ただ、日本側はそれでもなお防衛軍事的に必

松川

.. 現在も九州歴史資料館では大宰府史跡の発掘調査を行い、大宰府の調査研究に日夜努めています。

佐藤 .. それから、井上さんのご講演でもう一つ。天智朝における山城政策と天武朝における中央集権化政策を極めて対比的に扱われて、天武朝ではもう山城は基本的には造らないし、機能しないし、廃棄されていくというお考えのように受け止めたのですけれども、その辺の天武朝になつて以降の、例えば九州の山城の在り方が少し気になります。それから、もう一点は、井上さんの話の中では、大宰府を守るために大野城、基肄城、阿志岐山城などを配置したのではないということも言われたのですが、その辺については、大宰府の調査研究に当たつておられる松川さん、先ほどの天智朝・天武朝における山城の位置づけも含めて、ご意見を伺いたいのですが。

幸いにも唐の大軍が日本列島を侵略することは、いろいろな歴史的経緯があり、避けられました。ですから、それを本当に有益であったか、無益であったかは立証できないのですが、客観的に見て、やはり古代山城というのは唐の強大な軍事力、人海戦術の大軍の前ではほとんど意味がなかつたのではないかだろうかというのが、私の評価といいますか、理解なのです。

その上で一般的には白村江の戦いの以前においては、筑紫大宰は水城の外、博多側におりまして、白村江の戦いを境にして内側に、つまり、敗戦を境にして現在の大宰府の地に移って来たというのが、通説的な考え方になつていています。それに併せて水城についても外堀と土塁を設け、そして、北と南に山城を置いて、逃げ込み式の山城をというように理解されています。これまで私としてもそのように理解していたのですけれども、井上さんのお話ですと、その平野部に敵をむしろ袋のネズミのような所に誘い込んで、そこで撃退をするという戦法であつたというようなご推察をされてらっしゃいます。

今、大宰府政庁跡の一期の位置づけをどのように考えたらいいのか、あるいは大宰府の成立論をどう考えたらいいのかということを、来年は発掘調査の開始から50周年を迎えるので、それに向けて今考えているところです。戦略といった視点というのも、今後考える必要があるのかとも思いました。ただ、現在大宰府政庁がある太宰府の場所といいますのは、交通の要所の地でもありますし、九州全域内陸に入していく際には現在も高速が通っていたり、あるいは、西鉄、それからJRといった路線が必ず大宰府を通っていくという、そういった交通の要所でもある。そこは軍事的にも重要な場所ということで、そこに大宰府が置かれたというふうに、私などは今考えているところです。

天智朝までは確かに危機として、例えば対馬とか、壱岐とかに外国の船が来たというようなときには、そのときにも知らせが来て、それに備え臨戦体制に入るというような段階ですけれども、天武朝になりますと国際関係も中国の使節、あるいは、新羅の使節が来るというような情況で、山城 자체の

位置づけも井上さんがおっしゃるように変わつていつたと考えています。その中で大野城・基肄城・鞠智城は、まさに敵が攻めてくるということへの対応というより、その中に備蓄する兵器や穀物類、いざとなれば兵糧になるのかもしれませんけれども、そういうふた備蓄基地的な役割に変わつたのではないかと、私は考へてゐるところです。

井上

.. 大宰府が今の位置に置かれるのは、私は天武朝、あるいは、それ以降だと思つています。天智朝、

中大兄皇子の時期に、大宰府があの場所に置かれたのかどうかということが問題です。発掘調査では、大宰府の1-1期の建物は確かにあります。しかし、それは本当に大宰府の施設だったのか。すぐ近くに水城という壮大な軍事施設があります。その水城を維持するために、防人を中心とした兵士が何百人か、何千人か駐屯したでしょう。そういう人たちのための施設であつた可能性だってあるのです。そういうふうに、何といいますか、歴史はもつと柔軟に考えなければいけないと思うのです。ですから、ほんの数年の差であつても、天智朝と天武朝、ほんの数年の差ですけれども、そこに大きな歴史の分かれ目があるということを、歴史を考える上で忘れてはいけません。大きな流れの中ですこしづつ動くのではなくて、あるときを境目にしてがらつと変わることだつて、歴史としては実際にあり得たわけです。

そのように柔軟に考えますと、何よりも大野城・基肄城・阿志岐城が大宰府を守るものであつたと

すれば、筑後平野の山城は一体何だったのか、鞠智城はさらに何だったのか、瀬戸内海沿岸の山城は何だったのか。これらを一体的にどう理解するかということ、その答えを準備しなければ反論になります。全体をどのような軍略のもとでの軍事施設として位置づけるかということ、こういう視点が従来かなり欠けていたと思うのです。

本当に命がけの国家間の戦争なのです。その中でいい加減に山城を造るということを考えてはいけない。生き死にを賭けた戦争として、どう位置づけるかということが大事なことなのではないかと思います。もしそれがたとえば単なる記念物として造ったというなら、それはそれで一つの意見ですがれども、私は決してそういう見解は取りませんし、そうではありえないと判断しています。

佐藤： それでは、本日の井上さんのお話の中で、鞠智城の役割としての軍略の指摘がありました。古代の山城の中で三つ目のパターン、第三の意味がある山城だという位置づけがあつたわけです。これまで鞠智城を調査してきた西住さん、鞠智城の特徴について、あらためてお話ししていただけないでしょうか。

西住： やはり井上さんが設定されました第三の類型という、私も報告の中で述べさせていただきましたけれども、鞠智城は山城という割に標高が一四〇メートルぐらいの所ですけれども、非常に平坦な場所

が確保されているということは、そこに建物がたくさん建てられるということになります。傾斜地、斜面で平坦面がなければあまり建物は建てられないのですが、とても広い面が確保されているということで、約三〇〇年間の間に、現在熊本県教育委員会のほうで把握している七二棟の建物が確認されています。

それら建物の評価を、私たちはまだきちんとできていないのですけれども、本日先生のお話の中で、第三の類型という新たな視点で見ることで、最後に先生がまとめのところで言っていたと思うのですが、戦いのときの最後の砦としての逃げ込む場というのは今まで想定していなかったのですけれども、そういうものも含めながら今後調査研究のほうを進めなければいけないと、改めて感じたところです。

佐藤：

七世紀の鞠智城がすごく活動していた時期が、出土した土器から第Ⅱ期ということなのですが、それは一応七世紀の第4四半期から八世紀の第1四半期にかけてといわれているのですよね。その場合の第4四半期というのは、『続日本紀』に續治の記事のある六九八年からのことを言っているのか、もう少し前の第4四半期、六七六年からが第4四半期となるのですけれども、今問題になつていてる天武朝辺りにさかのぼって、そのころの土器もたくさん出土しているのか、という点はいかがでしょうか。

佐藤さんがおっしゃつたのは七世紀の第4四半期から八世紀の第1四半期に棒グラフがきちんとぐんと伸びております。実は私どもこれはちょうどこの時期が文献に出てきます大野城・基肄城・鞠智城で三つのお城を修理したという記述が出てきますけれども、それに関連してたくさん人が居たのではないかなどということを考えております。

分かりました。それでは、本日の主題であります「鞠智城の終焉と平安社会」のテーマに移らせていただきたいと思います。これについては、榎本さんのご報告、あるいは、松川さんのご報告がありました。お二人のご報告でリンクするところ、同じ史料を使われたところもありますので、お一人ずつ、本日のご講演・報告すべてを聞いた上で、ご自分の意見について、もう一度整理してお話ししていただけないでしょうか。榎本さんからお願ひいたします。

松川さんも含めて文献研究の先生方は、九世紀の対外危機が鞠智城の存続の一つの理由として説明されることが多いのですが、私は先ほど申し上げたように九世紀の対外危機の実態を考えた場合、七世紀後半に鞠智城が造られたときと同じような、國土が侵略されるような危機というふうには、捉えられていなかつたのではないかと。山城を必要とするような状況ではなかつたのではないかというこ

とが、一つの理由です。

それから、もう一つは対外危機として海賊の脅威が高まつていったわけですが、肥後国が全くそれと無関係というつもりはありませんが、脅威の配置などを見ると他の地域に比べると遅い。一番遅いということで、相対的に対外的な危機がそれほど高くない。そういうところなのに鞠智城だけ存続するということは、これはおかしいのではないかと。対外的危機で鞠智城が存続するというのであれば、もつと対外的危機の高いところのほうの山城こそ残つてしかるべきなのに残つていらないわけですから、そういう二つの理由で対外危機と鞠智城の存続を結びつけるのは、これは少し理解できないのではないかということが、大きな趣旨としてお話をさせていただいたことがあります。

松川さんのお話は具体的いろいろな最新の発掘情報とか、深い資料の読み込みなどがされていて、なるほどというふうに教えられたところが大変多いわけで、そういう意味で対外危機が全くなかつたということは言うつもりはありませんけれども、相対的に肥後国の場合は対外危機が低かつたと考えています。しかし、全く松川さんの説と矛盾するものではないと自分なりには理解しています。

佐藤：　松川さんのほうはいかがでしょうか。

松川：　私のほうも榎本さんのお話を聞きまして、東アジア的な視点で当時の国際環境の中で新羅が実

際攻めてくるような危険性はないということはよく理解させていただきました。実際新羅が攻めてくるというようなことは、当時の貴族たちのほうもどこまで意識していたのか。むしろ、新羅海賊がたびたび日本の九州沿岸を脅かすといったこと、それと私が強調させていただいたのは、そういった新羅海賊の脅威と、併せていつもセットになつていているのが疫病なのです。

疫病でよくいわれますのは、天平時代がそうですけれども、遣新羅使が疫病を持ち込んできて、そして全国にまん延して、藤原四子が亡くなつたというようなことが起きたりしています。そういった疫病が新羅からもたらされるものという意識、また、それが四天王寺が建てられたときの目的もそうですけれども、新羅がどうも直接攻めてくることはないけれども、呪詛をしているのではないかとう、そういった意識。どちらかというと観念的な意識、そういったものへの危機感に対し、当時の人々がどう対応していくかといったときに、それが顕著に表れる場所というのが山城であったり、あるいは、大宰府であったり、あるいは、沿岸部であれば大宰府の近くであります筑前志摩郡のような沿岸部にそういったことが表れて、それに対して現実的に軍備の増強であったり、また、神仏への祈りを通してそれに対抗していくという。疫病と新羅海賊への脅威、それと軍備の増強と神仏への祈りというものが、セットとして記事の中で現れてくるというところです。それに対応する実際の山城の中の構造物として、兵庫があり、不動倉があるという、そういったお話を本日はさせていただきました。

佐藤…

松川さんの話の中では、九世紀の新羅との緊張のもと、新羅の海賊が活躍した時代に、神仏への祈りで四王寺が建てられたり、四天王を祀つたりしている。そういった形で大野城においても、先ほど櫻本さんのお話にあったように、軍事的な機能というよりは、八世紀後半に四王寺が置かれて機能し、神仏への祈りで外敵を、あるいは疫病を退散させる、侵入を許さないというような動きがあつた。私は、そういうことは七・八世紀にもあつていいと思っているのですが。

そういう目で見たときに、例えば鞠智城では七世紀には百濟系の小金銅仏が出土しているということもあります。恐らく神仏の仏のほうですけれども、その仏教的な守りと古代山城とがつながるかと思うのですが。九世紀代の鞠智城における、そういう神仏との関係みたいなことは、何か遺跡の上では調査成果というのはあるのでしょうか、西住さん。

西住…

佐藤さんがおつしやつたのは、私の資料の写真2（資料編3頁）というところに百濟系銅造菩薩立像という写真を載せていました。これは非常に小さな仏像で一三センチ、手に持てるような持仏です。これは確かに仏教関係の百濟系の仏像ということなのですが、その九世紀以降にそういう仏教的なものというのは、現在確認ができません。ただ、松尾神社という神社が大同年間に勧進されます。松尾神社ですので、秦氏の酒造りで有名な京都の松尾大社が本社ですけれども、その分社が鞠智城のすぐ近くにあるという、それぐらいです、今のところ分かっているのは。ただ、今後調査が進めば大

野城と同じように、そういうのが出てくる可能性も全然ないわけではないと思います。

井上..

小さな可愛らしい百濟仏ですが、これを過大評価すべきではないと思います。鞠智城の造営にも、当然ながら百濟の亡命人が関与していると考えられます。六六〇年、あるいは、六六三年の戦争の後、何百、何千という百濟の知識人、軍人、政治家たちが日本に亡命してきます。『日本書紀』では帰化人と呼ばれていますが、そういう人たちの力を借りて、一二の山城の築造が進められたことは、間違いないところです。

六七一年、天智天皇が死ぬ半年ほど前には、功績のあった百濟人たちに対し、天皇は高い位を贈り、その功績に応えています。要するに鞠智城を造るときにも、少なからぬ百濟人が滞在しており、彼らは日々仏像に拝礼していたのかもしれません。そういう人たちの持物であったという可能性もまだ残されています。ですから、小仏像一つをもつて、過小評価していいけませんが、鞠智城全体の、あるいは、日本国家全体の戦争の勝利への加護を望んだというふうに言い切ってしまっていいのかどうか。いくつかの選択肢は残すべきだと思うのです。

それから、もう一つだけ。蛇足かもしれませんけれども、筑後平野周辺の幾つかの山城がある。これは齊明帝のときに造られたという説があるということは紹介いたしましたけれども、先ほどこれが当たらないということも申し上げました。

もう一つ、鞠智城も含めて、有明海からの外国の軍隊の侵入に備えたものだという、そういう説もかねてより唱えられています。私は、これは少なくとも唐の侵略に際しては、当たらないと思うのです。なぜならば、百濟を攻めたときには、大規模な艦隊を編成して百濟に渡海したのです。艦船も大型のものだったと考えられています。そういう大型船の喫水線はかなり深いものだと思います。それがあり明海の岸辺に着岸できるでしょうか。ムツゴロウが沖合い何キロにもわたって飛び跳ねるような、そういう有明海に唐の水軍の大型艦船が何百艘も着岸できるかなど、それはかなり現実性に乏しいと考えなければならないでしよう。

唐軍が有明海から侵入てくるとすれば、日本側は海岸線に軍隊を配置して、敵軍が一生懸命泥沼を渡つているときに攻撃すればいいのですから、唐軍がそういう愚策をとるとは思えません。つまり、有明海からの侵入に対する防衛という、そういう考え方は、少なくとも唐の大軍を対象にしたときにやめたほうがいい。ですから、常識的に考えて、軍略というものを考えて、国防というものを考えて、どうなのかということ。繰り返しになりますけれども、そういう観点から、もう一度見直してみるのも必要ではないかと思っています。

の海賊ではないかと疑っている。だから、海賊ともいますが、対外的な交流は、私はあつてもいいかなと思っています。それが大軍の軍船かどうかというのは、また別かもしませんけれども。その点はいかがでしようか、榎本さん。有明海の対外的な交流の在り方みたいなことは、古代史学のほうで考えられるのではないでしょうか。

さかのぼると、火の君たとか、日羅といった肥後の豪族が半島との交渉に非常に大きな役割を果したりしておりますし、有名な江田船山古墳の被葬者は恐らく百濟と直接的に交流して、さまざまに文物を得ているということが考古学的にいわれていると思うのですが。それを前提として榎本さん、いかがでしようか。

榎本..

おっしゃるように、肥後の地域は日本海沿岸に面してはいないのですが、早くからやはり朝鮮半島との交流が密接に行われていた地域だと思います。佐藤さんが挙げられた例もありますけれども、熊本の南に浄水寺というお寺があり、浄水寺碑という、九世紀の石碑があるのですが、地方のお寺にも関わらず、漢籍とか仏典が数千巻存在しているということが石碑に書かれているわけでして、当時漢籍とか仏典とかというのは大変貴重品なわけでして、郡とか、大宰府とか、そういう中心的な場所にはある程度あるのですけれども、肥後の南のほうの一地方の寺院であるにも関わらず、かなりたくさんの漢籍・仏典を持っているというのは、これはかなり文化的には開けている地域で、先進的な文化

が早くから入ってきた地域ではないかなと思っています。

それ以外にも前回、前々回のシンポジウムで講演された先生方がいろいろと例を挙げられているよう、渤海の遣唐船が漂着したりとか、いろいろとそういう半島との交流を示すような記事が古くから存在しております、肥後はそういう意味できわめて開明的な土地だったのではないかと思っています。

井上..

ただし、ここで留意しておかなければならぬのは、平和時と戦時と全く別の状況であるということでしょう。ことこの場合は戦争を前提にしたことがらなのです。人と人が殺し合うのです。いかに効率的に敵を壊滅するかという、そういうぎりぎりの局面でどう判断するかということなのです。やはり軍略、軍事的な視点というのがこの際には、最も重要視されなければならないと思います。

佐藤..

そうですね。一般的な交流と軍事とはやはり少しは違うと考えていいかなと、私も思います。

その平安時代のことに関しては、本日榎本さんからは、鞠智城の兵庫の鼓が鳴つたということについての評価で、だんだんと菊池郡の管理下に菊池城院というものが置かれるようになったのではないかなというお話をありました。私は、大野城・基肄城・鞠智城と、松川さんがお話になつた大宰府から出土した木簡の中に、基肄城にストックしてある大量の米穀を、筑前国や筑後国そして肥前・肥後に

入る「肥国」の人々が飢饉で困っているときに配るんだということで、大宰府の官僚である大監という、大宰府の役人が派遣されている。つまり、基肄城を管理しているのは、肥前国でも筑前国でもなくて大宰府ですね。だから、基肄城にストックしてある米穀の処分権は大宰府が直接握っていた。それを考えると、城といつてももう軍事的な機能よりは、もしかしたら備蓄の機能のほうが強いかもしません。

それから、松川さんのお話の中でも、大野城に府のクラと併せて城のクラというのがあるということで、大宰府の管理下にあるのではないかということがありました。

鞠智城についてはどうかというと、築城当初、私は大宰府があれば、国家的な築造としていいのかなと思うのです。ただし、その後、やはり城を維持していくためには肥後国とか、あるいは、地元の菊池郡が当然深く関与していた。「秦人忍□五斗」の荷札木簡が出ているということは、一俵分の米俵に付けた荷札だと思うのですが、それは菊池郡の人で、書き出しに筑後国とか菊池郡とか書かかず、「はたひとのおし□」という名前があることからすると、それは、菊池郡内の「はたひとのなにがし」が鞠智城に米を納めていることが分かる。八世紀半ばぐらいの木簡だと思いますが、当然菊池郡も関係した。肥後国も、もし鞠智城の防衛等に兵士が関係するトローブ、兵士の管轄は郡司ではなくて国司です。肥後国司が関与したのは間違いないですし、それから、大宰府も関係てくる可能性があると思います。私は、それが時代によって変化することがあるのかなと思っていますが。

そこまで考えた上で榎本さん、どうでしょうか。鞠智城の兵庫の鼓が鳴つたというのも、おそらく最初に本日おつしやつたように、たくさんの人人がまだ鞠智城に詰めていたので分かつたわけですけれども、それを都に、政府に伝えるためには、まず肥後国司に通知し、肥後国司が大宰府に通知してから、中央の政府に言上されて、それが『三代実録』などに載ると思うのですが、その辺りはどうでしょうか。もう菊池城院というのはもう完全に郡だけでしょうか。その点がちょっと気になったのですが。

榎本 ..

明確な資料がないのであくまでも推測によるところが多いのですが、やはり遺構が八世紀の後半で一応途切れている。土器がなくなり、あまり活発に使用されなくなるという形で、この段階でかなり性格が変わつていったのではないか。建物の配置とかも変わつていって、それまでの管理棟的な建物がなくなり、それまでの持つていた性格が一変するような変化が八世紀の後半、末ころにあったわけでして、それまでの大宰府と結びついていた機能というのが、ある意味でそこでなくなつていったのではないかというのが、私の捉え方です。

もし、鞠智城にそういう機能が、大宰府との管轄の機能がずっと続いているというのであれば、なぜ基肄城のそういう機能はなくなつてているか。なぜ存続しなかったのかとか、そういう説明がつかなくなるのではないかなどというふうに考えています。

佐藤.. それから、鼓が鳴ることの意味については、鼓は何のための鼓か。これは、かつても少し議論したと思うのですけれども、納まっている兵庫というのは具体的にはどういう倉庫なのかという点について、松川さん、いかがでしようか。

松川.. 兵庫の中に納められている物というのは、大野城の場合ですと具体的に「器仗」という形で出てきます。実際、大野城に納められた物は、器仗の中でも実践に使われる物であつただろうと考えられます。その中の鼓ですけれども、恐らくは兵を動かす際の号令に使用した物ではないのかと考えています。さらにその四天王寺が大野城にできる場所が「鼓峯」という、また、そこでも山城と結びついて、鼓という地名が残っておりますので、そういうふた兵器の中でも何か軍事を象徴するようなものだったのではないかと考えております。

佐藤.. 鼓があつた兵庫については、今日現地では鼓楼として復元していますが、兵庫の中に納まっているとしたら、兵庫はあまりああいう樓風の建物にはならないのではないかというのが、少し疑問点としてあるのですが、いかがですか。

松川.. 武器庫ということであれば、いわゆる一層だけの建物でも兵庫としての役割を担っていたと思いま

す。例えば時を知らせるとか、あるいは、非常を伝える。敵が攻めて来たとか、そういったものを知らせるための大きな太鼓を置くとか、そういうたるものであれば、鼓楼といった構造のものという可能性もあるのかかもしれません。兵庫の実態というのはなかなか発掘でも、これは明らかに兵庫だと分かっている建物跡というのは私も分からないので、何ともいえません。

佐藤： 実際に兵庫が発掘された事例はないですよね。そういったこともまだまだ検討の課題があるということなのですが、時間が迫つてまいりましたので、まとめに入りたいと思います。本日のさまざまのご意見も踏まえた上で、鞠智城についてさらにこれから調査したり、研究したりする際に、どのような課題があるかということ。あるいは、今回の講演・報告をでまとめていただいた際に、まだこういう点が、突つ込んで研究できるのではないかという点があろうかと思います。井上さんからお願ひします。

井上： 私は奈良の平城京や、藤原京、飛鳥だけではなくて、朝鮮半島の都城遺跡、あるいはベトナムの都城遺跡での発掘調査に四〇年間ほど携わつてきました。ですから、鞠智城の発掘調査の大変さ、半世紀続けてきていることの意義の大きさは、しみじみわかります。これに対して、一般的にいいまして、山城の調査は、鞠智城以外の山城では、あまり進んでいません。本日紹介した岡山県総社市

の鬼ノ城、あるいは、福岡県の大野城など、非常に限られた山城でしか、細々とした形でしか発掘調査が進んでいない。ですから、発掘調査、考古学的いろいろな知見については、まだまだ限られているというのが現実だと思うのです。

そういう中で、鞠智城では様々な情報が得られている。ですから、逆に鞠智城のさまざまな情報を基にして、他の山城の調査の方針を立てたり、どういう点に注目して調査すればいいかということが示唆できるよう、そういう豊かな成果を鞠智城は持っていると思います。そういう中で、私が、より深く知りたいことの一つは、「丘陵型」と「山岳型」山城の関係についてです。明らかに形式が違います。あるいは、石の積み方も非常に典型的な部分で違っている、それが幾つかの系統に分かれることも予測されています。

そういう観点からの研究はこれまで随分なされているのですが、もう一度原点に戻って、例えば水門というような遺構があります。その構造的なもの、もちろんこれらを明らかにするには朝鮮半島の何百、何千という山城の実態を解明しないことには充分答えは得られないだろうことも事実ですが、日本側の山城を丹念に調査をすることによって、逆に朝鮮半島の実態が秩序立つて理解できるかもしれない。そういう重要な基点に立っているのが鞠智城だと思うのです。

いろいろな困難な状況はあるでしょうが、水門の位置を確認し、門の位置を確認して、あるいは、城壁の構造を明らかにする。そういう調査をぜひ地道に、継続的に進めていく。これが日本の古代山

城だけではなくて日本の古代史、ひいてはまさに東アジアの世界史、古代史を解明する上で、非常に重要なポイントとなつてくるというよう私は確信しています。これからいつそうのご尽力とご健闘を祈念しています。

橋本： 本日発表でも申し上げたのですが、鞠智城はかなり変わった山城です。その特殊性の由来するところは何なのかということを、さらに研究していく必要があるのでないかと思っています。これまでも韓国などの、モデルとなつた山城の調査とか、比較とともに行われていると思いますが、かつて岡田先生が東北の城柵との関連性とかも発表されていましたけれども、いろいろなタイプの城や城柵とかと比較しながら、鞠智城の特殊性の由来、意味というものを検討していく必要があるのでないかと、いうふうに思っています。

それからもう一つ、その九世紀以降、備蓄機能を強化する形で鞠智城が存続したということなのでですが、なぜ普通の一般の郡の正倉にではなく、防備機能が比較的高い鞠智城の中にそういう貯蓄施設を設ける必要があつたのかということ、これはその当時の九世紀の在地社会の動向と併せて考えていく必要があるのでないかと思っています。
どうもありがとうございました。

松川

.. 私のお話の中で兵庫のお話と併せてお話をさせていただきましたが、神仏への祈りということです。

これについて、東北においては秋田城にも四天王寺が置かれて、それを継承するものではないかということで、古四王神社というお宮が秋田城の近くにあつたり、あるいは、基肄城があつた城山についても、寺院があつたことを示すような地名が残つていていたりということもありますし、また、讃岐の城山ですけれども、城山の神という形でその後祀られたりという形がありますので、鞠智城にそついつた外敵に対する宗教的な施設というものが、あつた可能性もあるのではないかどうか。それはあるときから山頂や山内ではなくて、山を下りて移設されることもあるということもありますので、そういった視点というのも、今後、鞠智城を考えていく上では重要ではないかと思っているところです。

今回の私の発表は大野城・基肄城・鞠智城という、それぞれの山城が持つている情報を補完しながら、古代の山城というものがどういうものかというお話をさせていただきました。本日のご報告やご講演の中で、むしろ鞠智城の特殊性というのをどう理解していくかという視点で、私のほうも今後研究をしていく必要があるということを痛感しているところでございます。

西住

.. 本日三名の先生方からご講演いただき、いろいろな今後に向けての課題を頂戴したわけですけれども、まさしく私どもがいつも現場で感じていてることがありまして、今後、やはりこれをいかに一つ一つ継続して解決していくかというのが、私たちの使命ではないかなというふうに考えていると

ころです。

それで非常にうれしかったのは、先生たちのご講演の中で鞠智城の研究が進んでいて、それが日本の古代山城研究のベースになっているということをお聞きしまして、やる気がありますます出てきているところでございます。本当に本日は良かつたなというふうに私は考えています。

最近、前畠遺跡というところで、あたかも大宰府を守るような形で、版築土塁がみつかりました。大野城・基肄城があつて、大宰府政庁があつて、その南東側のところに前畠遺跡があります。本日の井上さんのお話の、そこを防衛するのは大事だけども、ただ、それが大宰府をどうかするというのは少し置いておきまして、非常に大きな意味でその大宰府周辺の外側に防衛ラインといいますか、そういうものが出てきているということです。

実は鞠智城の研究をされていた、この説を出された鑑山先生も、鞠智城には外縁地区があるということをおっしゃつていまして、それも含めて、こういうのが見つかっている以上、確認をしていくのも今後の課題かなというふうに考えています。

佐藤…

鞠智城も、現在分かっている外郭線よりももっと広く、北側に相当広範囲に伸びる形で土塁が巡っているという知見がかつて提示されていましたということですね。今回前畠遺跡が見つかったということですけれども、鞠智城にとつても、防衛ラインのあり方は研究テーマとしてあるということになると

思います。

先ほど井上さんがまとめてくださったのですが、これまでの鞠智城の調査研究を長いこと努力してきたいただいたその成果と、それをこれまでこういうシンポジウムのような形で深めていただいてきたことが前提となつて、今日の全国の古代山城研究をリードしているのが鞠智城といつてよいかなと、私も思っています。

しかしながら、まだまだ鞠智城に関してすら、調査も足りない、研究も足りないような面があるということだと私は思います。あるいは、新しい視点で見ると、本日もいろいろな新しい視点を先生方に提示していただいたわけですけれども、そうすると見えてくるものがまた違つて来て、これまでの遺構の解釈、遺跡の解釈が変わって来るようなこともあるということです。これからもなお検討課題がいっぱいあり、かつ、私たちとしてはいろいろな見方で研究ができるし、また、それを楽しむことができるということだと思います。

熊本県教育委員会では、これまでこういうシンポジウムをされる一方、若手の研究者に研究助成をして、鞠智城についての新しい視点からの研究を進めていただいていることがあります。これも、これからどんどん進めていっていただければと思います。

またさらに、明治大学博物館における東日本大震災の展示で感じることも多くありましたが、本日一階のエントランスホールで熊本城の被災状況などの展示をしていますように、熊本は今回の大地震

で大きな被災がありました。そういった状況からの復興は大変だと思いますが、それと同時に、このシンポジウムでとりあげたような歴史と文化について、それを活かした形での復興ということもぜひお考えいただいて、被災にめげることなく頑張っていただきたいというように思っています。

それでは、皆さん、どうもありがとうございました。

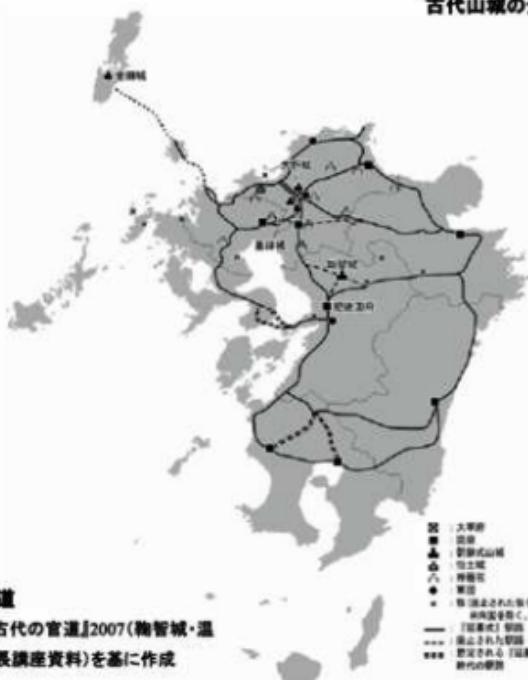
物智城関連年表

西暦（年号）	内容
645（大化元）年	大化の改新。
646（大化2）年	改新の詔の発布。
660（齊明6）年	唐・新羅により百濟滅亡。
661（齊明7）年	朝倉橋広庭宮に遷宮
663（天智2）年	白村江の戦い 崇大和朝廷軍が唐の水軍に敗れる。
664（天智3）年	対馬、壱岐、筑紫等に防人と烽を置く。筑紫に水城を築く。
665（天智4）年	筑紫に大野城、基跡城を築き、長門国に城を築く。
667（天智6）年	近江大津宮に遷宮
669（天智7）年	大和に高安城、讃岐に星嶋城、対馬に金田城を築く。
670（天智9）年	高安城を修理。
672（天武元）年	壬申の乱
676（天武5）年	新羅が朝鮮半島を統一。
678（天武7）年	筑紫国大地震
696（持統10）年	※「肥後國」の文献上の初見。
698（文武2）年	大宰府をして、大野、基跡、物智の三城を繕治する。
699（文武3）年	高安城を修理。
701（大宝元）年	大宰府をして、稻積、三野の二城を修理する。
710（和銅3）年	大宝律令制定。
719（養老3）年	平城京に遷都
756（天平勝宝8）年	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停める。
794（延暦13）年	怡土城を築城。
799（延暦18）年	平安京に遷都
858（天安2）年	大宰府管内を除いて、烽を廃止。 (聞2月) 菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。
875（貞觀17）年	(5月) 肥後國菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。
879（元慶3）年	(5月) 菊池城の不動倉11棟が火災に遭う。 カラスの群れが菊池郡倉舎の葦草を噛み抜く。 肥後國菊池城院の兵庫の戸が自ら鳴る。

参考資料



古代山城の分布



古代の西海道

※日野尚志『古代の官道』2007(物智城・温
故創生館 館長講座資料)を基に作成

- 松川博一 2014 「大宰府と寺社」『都城制研究』8
- 矢野裕介 2016 「鞠智城（熊本県）」『季刊考古学』136
- 渡辺晃宏 1989 「平安時代の不動院」『史学雑誌』98-12

時の人びとにとっては対外的な脅威として一体のものとして捉えられていた可能性が高い。城内の兵庫に納められた武器・武具や不動倉に集積されていた糧穀はその脅威への現実的な備えであり、神仏への祈りはその脅威への概念的な防御策であったと考えられる。

おわりに－大宰府の危機管理と古代山城

大宰府は、西海道（九州全域）の支配のほか、対外防衛の拠点や外交の窓口という重要な役割を担っていた。それにより管内の疫病・飢饉対策に止まらず、対外国および対隼人などの軍事に関わる費用や外国使節の応接の経費といった、優先すべき臨時のな支出が発生する可能性が他の地域や官司に比べて極めて高かった。その万が一の備えとして、大野城・基跡城や鞠智城など大宰府管内の古代山城に、有事の際に必要な武器・武具を納める兵庫や、兵糧はもとより非常時の公糧、さらには財源を蓄える倉庫を設け、大宰府の厳しい統轄下に置いたと理解できる。特に平安時代に入り9世紀後半には、新羅や疫病に対する脅威から、大宰府管内の山城がもつ兵庫に象徴される軍事拠点としての重要性や不動倉を擁する備蓄基地としての必要性、さらには大野城については国家鎮護の聖地としての役割がふたたび注目されたと考えられる。

参考文献

- 赤司善彦 2014 「古代山城の倉庫群の形成について－大野城を中心に－」『東アジア考古学論叢』2、中国書店
- 五十嵐基善 2015 「西海道の軍事環境からみた鞠智城の機能」『鞠智城と古代社会』3
- 磯村幸男 2010 「西日本の古代山城」『史跡で読む日本の歴史3』吉川弘文館
- 大高広和 2013 「八世紀西海道における対外防衛政策のあり方と朝鮮式山城」『鞠智城と古代社会』1
- 木村龍生 2016 「鞠智城の役割について」『季刊考古学』136
- 倉住靖彦 1990 「大野城司考」『古代中世史論集』吉川弘文館
- 酒井芳司 2010 「大宰府・水城」『史跡で読む日本の歴史3』吉川弘文館
- 佐藤信 2014 「鞠智城の歴史的位置」『鞠智城跡II－論考編1－』熊本県教育委員会
- 鈴木拓也 2010 「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』26
- 鈴木拓也 2010 「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61-4
- 西本哲也 2015 「鞠智城と大宰府－古代の地方行政と西海道」『鞠智城と古代社会』3
- 平野邦雄 1983 「クラ（倉・庫・蔵）の研究－大宰府、郡家の発掘調査によせて－」『大宰府古文化論叢』下巻、吉川弘文館
- 古内繪里子 2014 「日本における古代山城の変遷－とくに鞠智城を中心として－」『鞠智城と古代社会』2
- 松川博一 2012 「大宰府軍制の特質と展開－大宰府常備軍を中心に－」『九州歴史資料館研究論集』37

前国分寺に遷置された。ところが、大同2年(807)、四天王像の移置以来、大宰府管内で疫病が甚だしいため、四天王寺の再興が大宰府によって申請され許可されている。

【史料10】『類聚国史』卷第一八〇 大同2年(807)12月甲寅1日条

大宰府いわく、大野城の並峰において、堂宇を興し建て、四天王像を安置し、僧四人をして法のごとに修行せしむ。しかるに制旨により、すでに停止に従い、その像ならび法物など、なまびに筑前國金光明寺に遷し置きおわんぬ。その堂宇などは、今猶存す。しかるに像を遷して以来、疫病もとどもはなはだし。伏して請うらくは、もとの處に遷し奉らんことを、てえれば、これを許す。但し僧を請いて修行することは停む。

前年の動によれば、大宰府管内は水旱・疾疫などが相次ぎ、百姓は逃亡し、田園も荒廃するという有様のことである。四天王寺の役割が新羅に対する軍事的な脅威から国内における疫病という概念的な脅威への対策に変容したとされる。四天王寺の創建自体がそもそも新羅に対する概念的な国土守護を目的としたものであることを考えれば、四天王寺の再興は疫病が新羅よりもたらされるもの、あるいは新羅の呪詛によるものとの認識に基づく対抗策といえよう。同4年には四天王寺の所在する大野城故峯において四天王法が再び行われることになる。さらに弘仁2年(811)には釈迦如来像も造立されている。

四天王寺の造立はちなみに大宰府だけではない。出羽国の秋田城内には、天長7年(830)の時点での丈六の四天王像を安置した四天王寺が建立されていたことが、『類聚国史』同年条により確認できる。また、『延喜式』主税上によれば、出羽国において四天王法が修されており、その修法の場は四天王寺であったと考えられる。

その後、大宰府の四天王寺(四王院)が登場するのは、新羅海賊が横行する貞觀8年(866)のことである。

【史料11】『日本三代実録』貞觀8年(866)2月庚申14日条

神祇官いわく、肥後國阿蘇大神、怒氣を懷藏き、是に由りて疫病が発り、隣境の兵を憂ふべし。と。勅あり、国司は潔斎して至誠奉幣し、併せて金剛般若經千巻、般若心經万巻転読し、大宰府司は城山の四王院に、金剛般若經三千巻、般若心經三万巻を転読し、以て神の心に謝し奉り、兵疫を消伏せよ。と。

肥後國の阿蘇大神の怒りにより、疫病の発生と新羅の来寇が懸念されるとして、肥後国司が阿蘇大神への奉幣と金剛般若經などの經典の転読を執り行い、大宰府でも四天王寺(四王院)において同じく經典の転読が行われている。

さらに、翌9年(867)には、四天王法による新羅調伏のため、日本海を挟んで新羅と対峙する山陰道の伯耆・出雲・石見・隱岐・長門等の諸国において四天王寺(四王寺)が建立される(『日本三代実録』貞觀9年5月甲子26日条)。そして、その修法や寺院運営のあり方は大野城内の四天王寺を範とするものである。新羅への脅威を契機として、辺境地域における四天王寺や四天王法のひろがりがうかがえる。

輪智城についての怪異記事がみられるのは、全国的に新羅や疫病への脅威が高まった時期にあたる。【史料11】の「兵疫」の一語が示すとおり、新羅の来寇と疫病の流行は、当

前年12月には大宰府から「隣敵」である新羅がわが国の隙を窺っているとの香椎宮の託宣がもたらされ、大宰府の警固や管内の神祇への奉幣が命じられている。鞠智城での異変が起る前月の2月には、大宰府が肥後国に専商を置くことを申請し許可されており、その警固の範囲が大宰府周辺だけでなく肥後国にも及んでいたことがわかる。

4 古代山城と寺院

大野城築城から約1世紀後にあたる宝亀5年(774)、城内に四天王寺(四王寺・四王院)という寺院が建立される。

【史料9】『顯葉三代格』宝亀5年(774)3月3日太政官符

太政官符す

応に四天王寺に^{塔頭}四軀^像を造り奉るべき事 おのおの高さ六尺

右、内大臣從二位藤原朝臣の宣を被るにいわく、「勅」を「率」るに、聞くならく、新羅は兎餌にして恩義を顯みず、早く毒心を懷き、常に呪詛をなす。仏神説しがたく慮り、あるいは報應す。宜しく大宰府をして新羅國に直する^{高麗淨地}に^作の像を造り奉り、その災を^除却せしむべし。よりて淨行の僧四口を請じ、おのおの像前に当たり、一事以上は最勝王經の四天王護國品によれ。日は經王を読み、夜は神咒を誦えよ。ただし春秋の二時、一七日ごとにいよいよますます精進し、法により修行せよ。よりて^監已上の一^人、その事に專当せよ。その僧別の法服は、麻の袈裟・緋袴はおのおの一領、麻の裳・緋^絹の總の持は各一腰、施の緋の襷子・汗衫はおのおの一領、^緋・^緑・^青はおのおの一両、布施は、緋一足、緋三疋、布二疋。供養と布施はならびに庫物および正税を用いよ。今より以後永く恒例とせよ。

宝亀五年三月三日

造寺の目的は、新羅の宗教的な呪詛に対抗し、四天王と金光明最勝王經の力により国家を守護するためである。大野城内の「高麗淨地」な場所として四王寺山西北の最高所である鼓峯が選ばれ、そこに四天王寺が建立され、堂内には塑造の四天王像が安置された。大野城内には、北西方の最高所に毘沙門天、東方に持国天、南方に增長天、西南方に広目天の地名が残ることから、それぞれの峰に尊像が配されたとの理解もある。各峰に修法のための堂舎があった可能性はあるが、やはり史料が語るように当初から鼓峯の一所に四天王像が據って安置されていたと理解すべきであろう。そして、四天王像の前で精進・修行を行う4名の淨行の僧が置かれ、昼間は護國經典である金光明最勝王經、夜間は神咒を誦誦するように命じられている。専當官としては、大宰府の監以上1名を任じ、寺院運営に必要な経費や物資は大宰府の府庫および西海道諸国より納められた正税を充当するように指示している。大宰府が筑前国を兼轄していた時期に当たることもあるが、鎮護国家思想の下で建立された大宰府直属の官寺であったことがわかる。

しかし、「内外無事」との意識の下、延暦20年(801)、四天王寺(大野山寺)において四天王法を行うことは停止され、四天王像をはじめ堂舎法物等は筑前金光明寺、つまり筑

記事は特に9世紀後半に多くみられるものである。翌3年には、同じく大宰府が筑前国志摩郡の兵庫の鼓が自鳴したことを報告している。さらに貞觀11年(869)には、新羅海賊による豊前国貴絹掠奪事件をうけて、大宰府の兵庫などでの怪異記事がみえる。この時には現実的な対応として、俘囚の大宰府配備のほか、大宰府や御膳館に常駐する統領・選士の増員、府庫や大野城の城庫に納める武器・武具の検定の強化が行われている。

【史料6】『日本三代実録』貞觀11年(869)12月庚子17日条

去ぬる夏、新羅海賊、貢絹を掠奪す。又、大鳥有りて、大宰府の^城事並びに門樓・兵庫の上に集う。神祇官・陰陽^{式内}衆々く、當に隣境の^城兵^兵有り。(後略)

また、【史料5】で注目すべきは、鞠智城内に不動倉が11棟以上存在したことである。不動倉とは、主倉のうち、稻穀で満杯となり封印された非常備蓄用の倉のことをいい、郡ごとに置かれていた。その稻穀は不動穀といつて販給のような特別な場合を除き消費できないことになっていた。

大宰府政庁跡の前面に位置する不丁地区官衙跡から出土した木簡のなかには、大宰府が基跡城に収納されている稻穀を「筑前・筑後・肥国等」の大宰府管内諸国に分かち与えたことを示す8世紀前半の文書木簡がある。

【史料7】大宰府政庁跡周辺官衙跡(不丁地区)出土木簡

為班給筑前筑後肥等國遣基跡城稻穀隨 大監正六上田中朝[]

(筑前・筑後・肥等の国に班給せんがために、基跡城の稻穀を遣わして、(大宰)大監正六(位)上田中朝(名欠)に隨はしむ)

稻穀が諸国に班給される理由として考えられるのは、疫病・災害・飢餓に際して稻穀を病人・高齢者・貧窮者らに支給する賑給である。田中朝臣については名を欠いているが、『播磨國郡稻穀』から天平4年(732)頃に大宰少監として赴任した田中朝臣三上である可能性が高い。なお、三上は天平8年正月に正六位上から外從五位下へ昇進している。天平4年から7年の間で賑給を必要とした事態としては、天平7年の大宰府管内における疫病の流行が想起される。この時、疫病患者らに対して8月と閏11月の2回にわたり賑給が行われている。以上のことから、この木簡は古代山城に稻穀が貯蔵されていたことを明証するだけではなく、それが疫病への救済策に使用された可能性を示す。基跡城の稻穀もまた、賑給であったとすれば、動用穀が不足すれば不動穀が充てられたであろう。この木簡は、鞠智城の不動倉の役割を考える上でも貴重な史料である。

鞠智城に関する最後の記事も兵庫における怪異記事である。その前には、外征や国家鎮護の神として神功皇后を祀る宇佐八幡宮での異変も報告されており、両者は到底無関係とは考えられず、ともに新羅来寇の予兆記事と捉えるべきであろう。

【史料8】『日本三代実録』元慶3年(879)3月丙午16日条

豊前國八幡大善藏宮の前殿の東の一、神功皇后の御前の瓶、故無く破裂して九片と成る。破裂せし時、其の鳴ること^音の細き声の如し。又肥後國菊池郡城院の兵庫の戸、自ら鳴る。

それも平安時代のものである。大野城内の「クラ」は、大宰府政庁の周辺にあった「府庫」「税倉（税庫）」に対して、「城庫」と呼ばれていた。その「城庫」に納められていたものとして確認できるのは、貞觀12年（870）5月2日太政官符にみえる「大野城器仗」と、同18年3月13日太政官符にみえる「大野城衛卒糧米」である。前者の「器仗」とは実用（兵仗）と儀礼用（儀仗）の武器・武具のことを指し、ともに「兵庫」に納められていた。大宰府の「兵庫」は、大宰府政庁の近くの「府庫」と大野城内の「城庫」の二か所であった。これらの兵庫は延暦18年（799）以降、不動とされ、原則として非常時と修理以外で開封されることは許されなかった。後者の「衛卒糧米」とは、大野城に配備された城の修理や日常の管理に当たった衛卒40人分の糧米のことであり、毎月24斛が支給された。ただし、五使料以外のすべての糧米や雑米を府庫へ納めることを命じた貞觀12年以前においては、その一部を城庫に収納していた可能性も皆無とはいえない。

3 大宰府と鞠智城

奈良時代の鞠智城のことを知ることができる史料はないが、養老衛禁律には、「筑紫城」へ不法侵入した際や縛（カギ）を盗んだ際の罰則規定がある。

【史料2】養老衛禁律 24越垣及城条

凡そ兵庫の垣、及び筑紫の城を越えたらば、徒一年。陸奥・越後・出羽等の權も亦同じ。賣司の垣は、杖一百。大宰府の垣も亦同じ。國の垣は、杖九十。（後略）

【史料3】養老賦盜律 27盜篠刀条

凡そ篠刀を盜めらば、徒三年。宮殿門・庫廬及び倉庫・筑紫の城等の牆は、徒一年。國都の倉庫、陸奥・越後・出羽等の權及び三間の門牆も、亦同じ。（後略）

「筑紫城」とは、筑前の大野城だけではなく【史料1】を踏まえれば、肥前の基陣城や肥後の鞠智城を含むと考えるのが妥当であろう。兵庫の垣を越えることと九州の山城や東北の城牆の土壁・石垣・櫓列を越えることが最も重い罪に問われている。また、山城の牆を盗んだ罪は、宮殿門とともに各種倉庫の牆を盗んだとの同罪とされている。大宰府管内の山城そのものが、警衛区域として東北の城牆や倉庫、とりわけ兵庫と同等との認識があったことを意味する。

平安時代には、鞠智城内にあった兵庫の異変と不動倉の火災を伝える記事がみえる。

【史料4】『日本文德天皇実錄』天安2年（858）閏2月丙辰24日・丁巳25日条

丙辰、肥後国言す。菊池城院の兵庫の鼓、自ら鳴る。丁巳、又鳴る。

【史料5】『日本文德天皇実錄』天安2年（858）6月己酉20日条

己酉、大宰府言す。去る五月一日、大風暴雨。官舍悉く破れ、青苗朽ち失う。九国二島尽く損傷を被る。又肥後国菊池城院の兵庫の鼓、自ら鳴る。同城の不動倉十一宇、火く。

これらの記事から、鞠智城内には大野城と同様に兵庫があったことがわかる。このように兵庫内の器仗等が自鳴したり兵庫の上に大鳥が群れたりするといった兵革・凶事の予兆

必要である。山城の管理については、職員令の国司の職掌に「城牧」とあるように、基本的に所在国の国司が責任を負うことになっていた。したがって、軍団兵士制下においては、国司の指揮の下で軍団兵士がその任に当たったと考えられる。西海道でいえば、大野城は筑前国、基跡城は肥前国、鞠智城は肥後国の大軍団兵士がそれぞれ上番して守衛していたことになる。大野城の場合も弘仁11年(820)3月4日大宰府牒案(九州国立博物館所蔵文書)に「國別るるの時、國司、城を掌る」とみえるように、大宰府が筑前国を兼管していない時には筑前国が所管していた。延喜5年(905)の「鐵世音寺資財帳」(東京藝術大学所蔵)には、「大野城山」に「遠賀門」の城門名がみえる。おそらくは筑前国の大野城(軍団)が守衛したことによる門号であろう。

一方、大宰府が筑前国を兼管している時には大野城は大宰府の管理下に置かれ、その守衛は筑前国だけではなく、府下六国(筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後)の軍団兵士によって編成された大宰府常備軍が担っていたと考えられる。兵士の役務は、城門や城庫などの守衛だけではなく、城壁の修繕もあった。修繕にあたっては、大宰府の大工・少工が指揮を執り、修繕のための兵士が確保できない時には近隣の一般農民を人夫として徴発することも可能であった。大宰府と筑前国については、兼管と別置を繰り返すが、大野城の管理については次第に大宰府が直接所管することが恒常化し、大宰府の官司内に大野城の管理を専らする主城(大主城・少主城)や城司(大野城司)が置かされることになる。

天長3年(826)、西海道の軍団制が廃止され統領士衛卒制が施行されると、軍団兵士に替わり選士が兵員として守衛にあたることになったと考えられる。大宰府の選士400人のうち何人が大野城に配備されたかは不明であるが、大宰府における守衛対象施設として大野城が兵庫とならび優先順位が高かったことを考えればそれに割く人員は少なくなかったと考えるべきであろう。あわせて衛卒についていえば大宰府の衛卒200人のうち、その5分の1にあたる40人が大野城の修理をはじめとした日常的な維持管理のために常駐する規定となっていた。これをうけて大野城周辺の農民の中には、穀米を納める城庫の近くに居を構え衛卒らを相手に商売を行う者も現れた。彼らは万が一の際、臨時の兵員となることも期待されていたと考えられる。

大野城内には、発掘調査により多くの倉庫があったことがわかっている。古代の「クラ」の用字には、大きく「倉」と「庫」で使い分けがあったとされる。「倉」は穀糧・穀穀(穀米)・粟を納めるクラ、「庫」は武器・文書・書籍・布帛・宝物を納めるクラを指した。大宰府でいえば、大宰府管下の六国(筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後)から貢進された穀穀を納めたクラを「税倉(税庫)」といい、西海道諸国(九州一円)から貢納された布や真綿などの調庸物のほか武器・文書・書籍などを納めたクラを「府庫」という。特に調庸物を納めるクラは中央にならい「筑紫大藏」と呼ばれた。そして、「税倉(税庫)」は税司、「府庫」は藏司が所管していた。「府庫」の中でも武器庫は特に区別して「兵庫」と書かれる場合が多い。

大野城内にあった倉庫やその収納物について知ることができる史料は意外と少なく、い

(2) 軍團兵士制の長期的存続については、「邊要地」とされる大宰府管内と陸奥・出羽・佐渡等国にかぎって認められたものである。他の諸国は、延暦 11 年（792）に一般農民からなる軍團兵士制が廢止され、郡司子弟からなる健児制へ移行した。軍團兵士の役務は、①軍事訓練、②国府・兵庫・鉱藏の守衛、關の守固、国内要地の守衛、官船の看守、③城隍・倉庫の修理、④天皇行幸時の護衛、外国使臣の送迎、犯罪者の護送など多岐にわたる。また、有事に際しては、將軍の指揮下で征隼人をはじめとした征討軍が編成された。

古代山城との関係からいえば、②の軍團兵士が守衛すべき兵庫の中には、史料上も確認できる大野城や鷹智城等の城内にあった兵庫も含まれると考えるべきであろう。③の城隍と倉庫の修理についても、軍防令の規定にあるとおり、「城」＝山城と「隍」＝水城の修築はもとより、城内に存在した正倉や兵庫などの倉庫、つまり「城庫」も修繕の対象であったことになる。律令制下において山城の守衛と維持管理を日常的に担っていたのは、軍團兵士であったと考えられる。西海道において軍團制が存続した理由のひとつには、有事の際に大宰府管内および国外への征討軍の派遣や後述する大宰府常備軍の母体の維持とともに、古代山城の守衛や修築のための兵員の確保があったのかもしれない。

(3) 大宰府常備軍とは、大宰府を守衛するための兵員のことである。大宰府常備軍は、筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後などの 6 国から上番した軍團の軍載・兵士や選士によって構成され、いうなれば「達の朝廷」大宰府の「衛士」というべき存在であった。彼らは、日常的には、大宰府政庁をはじめとした管衙（役所）、特に兵庫や府庫（筑紫大蔵）の警衛、そして、大宰府の郭内、言い換えれば古代都市大宰府の治安維持を任務とした。大宰府常備軍は、西海道の總監府としての大宰府、そしてその西海道支配を完遂するための中核となる軍事力として位置づけることができるものである。

(4) 統領選士衛卒制の創出とは、天長 3 年（826）に大宰府管内の軍團兵士が廃止され、大宰府と西海道九国二島に統領・選士・衛卒が置かれたことを指し、大宰府管内のみにみられる軍制である。その概要是、一般農民出身の軍團兵士にかわり「當檢選羊之兒」を選んで選士となし、彼らを統率する者として軍載にかわり統領を置くというものであった。大宰府には統領 8 人・選士 400 人、九国二島の西海道諸国にはあわせて統領 34 人（六国各 4 人・三国二島各 2 名）・選士 1320 人が配置された。くわえて、それまで兵士が担っていた雜役に専從する者として衛卒 200 人が確保され、兵馬の飼育や貢上染物所・作紙所の雜役、大野城の修理に当たった。これは、大宰府上番を含む西海道における軍制の独自なあり方と軍團兵士制が抱えていた雜役などの制度的な矛盾を実態に即して解消・整備した制度であった。また、兵士にかわり、古代山城の守衛や維持管理を担うべき存在でもあった。

このようにみてくると、大宰府の軍制は、防人制の成立から軍團兵士制の存続および大宰府常備軍の設置、そして統領・選士・衛卒制へと推移したことが確認できる。

2 大宰府と大野城

大野城が軍事拠点としての機能を果たすためには、それを守衛・維持するための兵員が

【講演③】

平安時代の大宰府と古代山城

松川博一（九州歴史資料館学芸員）

はじめに 一存続する古代山城一

7世紀後半に築造された古代山城は、高安城や茂城・常城をはじめその大半が8世紀初頭までに役割を終え、廃城となっている。そのなかにあって、奈良時代以降も存続した山城は、九州に築かれた大野城と基肄城・輪智城の三城である。これらは、文武天皇2年(698)、大宰府によって「緒治」された三城にあたる。輪智城はここではじめて史料上に登場する。

【史料1】『続日本紀』文武2年(698)5月甲申25日条

大宰府をして大野・基跡・輪智の三城を緒治はしむ。

そして、正史で確認できる古代山城についての最後の記事は、『日本三代実録』にみえる元慶3年(879)の「菊池郡城院兵庫」の異変を伝えるものであり、輪智城が少なくとも9世紀末頃まで山城として存続していたことが史料上うかがえる。

本報告では、古代山城と大宰府との関係やその役割について、史料を読み解きながら平安時代を中心にみていくことにする。

1 大宰府の軍制

大宰府の軍制の特色としては、以下の4点が挙げられる。

- (1) 防人制の成立
- (2) 軍団兵士制の長期的な存続
- (3) 大宰府常備軍の存在
- (4) 続御道主制の創出

いざれも大宰府および西海道(九州)がもつ地理的な環境に起因するものであり、对外防衛・対隼人対策をはじめとした辺境防備を担うべき地方軍制として成立し独自の過程をたどったものである。

(1) 防人制の成立については、天智天皇2年(663)の百村江での敗戦の翌年、「対馬島・壱岐島・筑紫国等」に海辺防備を主な任務とした兵員として置かれた。その人員は、天平宝字元年(757)まで東国から徵發され、「東国防人」と呼ばれた。同じ天智天皇3年には水城の築造と烽の設置が行われ、さらに翌4年には大野城・基跡城が築城された。これとあまり時を離れてことなく輪智城も築かれたと考えられている。防人の配備先については、壱岐島と対馬島以外、「筑紫国等」のどこを守備していたのかは史料上不詳であるが、当初は、对外防衛の最前線として、水城や大野城をはじめとした防衛施設に防人が配備された可能性はある。律令制下においては、大宰府の部内に防人司が設置され、防人制はその管理下で海辺防備を主な任務として、少なくとも延暦14年(795)まで存続している。

9世紀における西日本諸国への守衛配置

西暦（和暦）	守衛配置国	備考
814（弘仁5）	大宰府	前年に新羅人の肥前小値賀島島民殺傷事件
838（承和5）	壱岐	承和2年に新羅商人来着に備え壱岐要害警備
869（貞觀11）	隱岐、長門	同年に新羅海賊の襲撃あり
849（嘉祥2）	対馬	
870（貞觀12）	出雲、因幡、対馬	
871（貞觀13）	伯耆	
875（貞觀17）	石見	前年末の權日宮詫宣により新羅虜船に備う
879（元慶3）	肥前	
880（元慶4）	佐渡、越後	寛平5～7年に新羅海賊の入寇あり
894（寛平6）	能登、大宰府（追加）	
895（寛平7）	越前、伊予、越中	
899（昌泰2）	肥後	

4. 9世紀以降に鷹智城が存続した理由について

（1）鷹智城の機能・特徴性

他の山城と異なる機能・特質を有したことが、存続の大きな理由ではないか。単純な国土资源防衛の軍事拠点としての山城であれば、侵略の危機が無くなった段階で用済みとなつたはずであり、実際、多くの山城が停廃された。

大野城の場合、「遠の朝廷」であった大宰府防衛拠点、大宰府の逃げ城という特殊な役割があったため、基本的に大宰府がある限り存続したものと考えられる。鷹智城の特殊な役割については、まだ未解明な部分が大きいが、他の山城と異なる様々な施設、構造、立地を有しており、特別な機能を有したことは間違いない。

（2）菊池郡との関わり

8世紀後半の衰退期（第III期）を経て、9世紀以降（第IV・V期）、鷹智城の性格が変わった可能性がある。大宰府直轄から肥後国菊池郡の管轄に変わり、鷹智城の機能（交通の要所にあり、厳重な保管機能があるなど）を生かす形で、食料や武器を保管・管理する施設になったのではないか。

9世紀に怪異が報告されたのも、その怪異を把握できる人員が配置され、官衙として機能していたことを示すものと考える。「菊池城院」という名称も、城そのものというよりは「正倉院」「穀倉院」など官衙の一施設的な名称のイメージがある。

鷹智城が廃絶した10世紀後半は、郡衙消失の時期とも重なり、「菊池城院」が郡の一施設化していたという推測に合致する。

害する犯罪行為（海賊の横行）の対処が問題化したのであり、国家の存亡に関わる問題ではないことに注意すべきである。国家間の全面戦争、国家の存亡に関わる侵略が想定されていたわけではない、ということである。つまり、かつての7世紀後半のような山城を必要とする危機とは捉えられていないのではないか。

9世紀の対外危機（新羅兵寇）の実態

- 866（貞観8年） 肥前国基跡郡の川辺豊穣らの新羅人と対馬奪取計画が告げられる
同年 鶴岐国浪人安曇福雄らの新羅人と共謀による謀反密告（誣告）
869（貞観11年） 新羅海賊、博多湾停泊中の豊前国年貢船を襲い、綿縄奪取して逃走
870（貞観12年） 新羅に捕捉された対馬島民が帰国し、新羅の対馬奪取の風聞を伝える
同年 大宰小式藤原元利萬倍の新羅王と通謀しての謀反が告げられる
893（寛平5年） 新羅海賊が肥前国松浦郡・飽田郡を襲う
894（寛平6年） 新羅海賊が辺島・対馬に入寇す。対馬島司ら戦い、退去させる
895（寛平7年） 新羅海賊により壱岐島の官舎焼失す

（2）危機への対処について

基本的に8世紀末以降の軍縮の方針は維持されており、大幅な軍備増強に転換していないことを注意しなければならない。日本海沿岸諸国の警備強化、鴻臚館に警固所を設けるなど局所的な対応がとられただけで、西日本各地に山城を築いた7世紀後半の国防体制とは全く異なる。後の元寇の際に、防星が築かれ、異国警固番役が設けられたことと比べても、全く危機のスケール、対処のレベルが異なっていると思われる。

そもそも、9世紀の対外危機を山城存続の理由とするならば、鴨智城以上に北九州や壱岐・対馬の山城がなぜ存続しなかったのか。また、不知火海との関連から鴨智城を重視するならば、それ以上に玄界灘の山城がもっとクローズアップされなければならないだろう。そもそも、将帥の配置から見ても、対外防備上の肥後の位置づけは低いと考えられる。

以上のことから、9世紀の対外危機と鴨智城の存続を結びつけることはできないだろう

9世紀の対外危機における防備兵員の増強

統領・選士

- 869（貞観11年） 大宰府配備の統領1人・選士40人を鴻臚館に遷し置く
大宰府例番のほか、統領2人・選士100人を増員し、鴻臚館に配備

夷俘

- 869（貞観11年） 200人（2番勤務）
895（寛平7年） 50人（1番勤務、博多警固所に加置）

- ◎-1 貞觀 11 年 12 月 14 日「遣使者於伊勢大神宮奉幣。告文曰。……又廳樓兵庫等上。」
依有大島之恵xト求ル。隣國ニ兵革之事可在エト申ル。……」
- ◎-2 貞觀 11 年 12 月 17 日「去夏。新羅海賊掠奪貢船。又有大島。集大宰府廳事并門樓兵庫上。神祇官陰陽寮言。當有騎境兵寇。肥後國風水。陰英國地震。損傷麻舍。沒溺聚元。」
- ◎-3 貞觀 11 年 12 月 29 日「遣使者於石清水神社奉幣。告文曰。……又廳樓兵庫等上。」
依有大島之恵xト求ル。隣國ニ兵革之事可在エト申ル。……」
- ◎-4 貞觀 12 年 2 月 12 日「先是。大宰府言。《對馬嶋人卜部乙聚麻呂、新羅の襲撃計画を告げる》是日。勅。彼府去夏言。大島集于兵庫樓上。決之ト策。當夏隣兵。……」
- ◎-5 貞觀 12 年 2 月 15 日「勤遣從五位下行主嚴權助大中臣朝臣國雄。奉幣八幡宮大菩薩宮。及香椎廟。宗像大神。甘南靈神。告文曰。……又廳樓兵庫等上。」依有大島之恵xト求ル。隣國ニ兵革之事可在エト申ル。……」
- ◎-6 貞觀 12 年 6 月 13 日「先是。大宰府言。肥前國杵嶋郡兵庫震動。鼓鳴二聲。決之著龜。可警隣兵。是日。勅令筑前・肥前・壹岐・對馬等國嶋、戒慎不虞。又言。所禁新羅人潤滑等卅人。其中七人逐竄。」
- ◎-7 貞觀 13 年正月 15 日「大宰府言。壹伎嶋兵庫鼓鳴。」
- ◎-8 貞觀 13 年 4 月 6 日「因幡國兵庫火。」
- ◎-9 貞觀 13 年 5 月 10 日「佐渡國司言。兵庫震動。」
- ◎-10 貞觀 14 年 7 月 17 日「遼江國兵庫自鳴。聲如鐘鼓。」
- ◎-11 元慶 3 年 3 月 16 日「豈前國八幡大菩薩宮前殿東一神功皇后御前廟。無故破裂。成九十片。破裂之時其鳴如鐘細響。又肥後國菊池郡城院兵庫戸自鳴。」
- ◎-12 元慶 3 年 11 月 4 日「隱岐國言。兵庫震動。」
- ◎-13 元慶 4 年 2 月 28 日「先是。隱岐國言。兵庫震動。經三日後。庫中鼓自鳴。陰陽寮占曰。遠方兵賊。起自北方。是日。太政官符下因幡・伯耆・出雲・隱岐等國。慎令嚴警防護非常。」
- ◎-14 元慶 4 年 6 月 23 日「右兵庫中央兵庫自鳴。」
- ◎-15 元慶 5 年 6 月 23 日「兵庫自鳴。」
- ◎-16 元慶 5 年 8 月 14 日「加賀國言。太政官去六月廿九日下當道符牒。比日兵庫有鳴。著龜告云。北境東垂。可有兵火。自秋至冬。宜慎守禦者。謹檢。去弘仁十四年。分越前國。置加賀國。其後五十八年。未備非常。伏望請被給官庫甲冑。以備非常。自餘兵器。國宰將作者。勅。甲冑宣令國宰作焉。」

3. 9世紀の対外危機について

(1) 新羅兵寇の危機について

対外的危機（新羅兵寇）の高まりと物智城を結びつける見方が有力であるが、果たして妥当であろうか。新羅兵寇とは主に海賊行為を意味するものであり、国家主権（国憲）を侵

ならば、なぜ、物智城ばかりで、大野城やその他の山城には怪異が起こらないのか。

兵庫の怪異は、多くが地方官庁の兵庫の怪異である。日本海沿岸の怪異は隣国の兵寇に結びつけられる傾向があるが、それ以外の地域はそのような受け止め方はされていない。物智城の位置は微妙であるが、あまり隣国の兵寇・対外的脅威との関連性は問題化していないのではないか。

そもそも9世紀に兵庫の怪異が多くなったのは、讖諭思想的なもの（物事の予兆を考える）が普及したこと（物の怪の登場も）と、大地激動の時代（火山噴火と大地震の時代）によるところが大きいのではないか。それに加え、国家間の通交が途絶え、情報不足による相互不信、疑心暗鬼によって増幅されたところがあるのではないか

六國史に見える兵庫の怪異記事

『続日本紀』

- ① 宝龟11年10月3日「左右兵庫鼓鳴。後聞箭動聲。其響連入兵庫。」
- ② 天應元年3月26日「美作國言。今月十二日未三點。苦田郡兵庫鳴動。又四點鳴動如先。其響如雷霆之激動。伊勢國言。今月十六日午時。鈴鹿關西中城門大鼓。自鳴三聲。」
- ③ 天應元年4月1日「左右兵庫兵器自鳴。其聲如以大石投地也。」
- ④ 天應元年12月26日「兵庫南院東庫鳴。」

『日本後紀』

- ⑤ 大同元年3月22日「日赤無光、兵庫夜鳴、是夜月歟之。」

『続日本後紀』

- ⑥ 承和4年3月20日「美濃國言。二月廿五日、兵庫自鳴。至三月十五日、亦鳴同前。」
- ⑦ 承和7年5月2日「但馬國言。養父郡兵庫鼓無故夜鳴。聲聞數里。又氣多郡兵庫鼓夜自鳴。聲如行鼓。」

『日本文朝天皇実錄』

- ⑧ 齋衡2年8月10日「兵庫中鼓自鳴。」
- ⑨ 天安2年閏2月24日「肥後國言。菊池城院兵庫鼓自鳴。」
- ⑩ 天安2年閏2月25日「又（菊池城院兵庫鼓）鳴。」
- ⑪ 天安2年6月20日「又肥後國菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。」
- ⑫ 天安2年8月4日「若狭國言。兵庫鳴。如振鈴。」

『日本三代実錄』

- ⑬ 貞觀元年正月22日「大宰府言。筑前國志摩郡兵庫鼓自鳴。庫中弓矢有聲聞外。」
- ⑭ 貞觀8年4月18日「若狭國言。納印公文庫并兵庫鳴。下知國司曰。今月十六日。宣告彼國。戒慎兵戎。今言。兵庫自鳴。陰陽寮言。遠國之人當有來投。兵亂天行。成災相仍。宜益警衛兼防災疫。」
- ⑮ 貞觀8年9月7日「美作國言。兵庫鳴。聲如擊鉦鼓。」

西海道6国2島の防衛兵員の変化・減少

東国防人 2264人（天平10年帰還時） 3000人（天平神護2年時）

→対馬防人 102人（天安元年5月）

軍団兵士

弘仁4年以前 18團 17100人（6番交替勤務か）

弘仁4年減定 18團 9000人

天長3年全廃 →選士 1720人・衛卒 200人（4番交替勤務）

⇒定員規模では、約20000人から約2000人へ縮小 → 十分の一の規模に

2. 9世紀以降の物智城関係史料の再検討

（1）4つの史料の確認

9世紀以降の物智城に関する史料は、4つしかない。その全てが兵庫の怪異記事で、うち1つは不動倉の火事についても記している。ここから、何が読み取れるであろうか。

9世紀の物智城に関する史料

①『日本文徳天皇実録』天安2(858)年閏2月丙辰条

丙辰。肥後国言すらく、「菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」と。

②『日本文徳天皇実録』天安2(858)年閏2月丁巳条

丁巳。又鳴る。

③『日本文徳天皇実録』天安2(858)年6月己酉条

己酉。（中略）又肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る。同城の不動倉十一宇に火あり。

④『日本三代実録』元慶3(879)年3月16日丙午条

十六日丙午。（中略）又肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る。

（参考）『日本三代実録』貞觀17(875)年6月20日辛未条

廿日辛未。大宰府言すらく、「大島二、肥後國玉名郡の倉の上に集ひ、西を向きて鳴く。群鳥數百、菊池郡の倉舎の葦草を噛み抜く」と。

（2）兵庫の怪異記事の検討

物智城の兵庫の怪異をどのように理解すべきかが、問題である。新羅の兵寇、対外的な脅威・危機と結びつけて理解するのは妥当であろうか。兵寇や対外的脅威を意味するもの

た、「東アジア世界」における国際秩序は、「冊封体制」よりも「朝貢体制」の方がより実質的な役割を果たしたと考えている。

(2) 9世紀(8世紀末以後)の東アジア世界の変貌

8世紀と9世紀以降の違い

8世紀	⇒	9世紀
律令制		律令制の放棄ないし大幅な改変
中央集権・軍国体制		地方分権化・権力の分散化
重農主義(抑商主義)		商業・貿易の発展
唐文化の共有		各國文化の台頭(ナショナリズム)

国際関係の如て述べると、

- ① 国際秩序の弱体化・喪失 → 國家間通交の減少ないし消失、関係の稀薄化
→ 疑心暗鬼を生みやすい環境
- ② 対外管理の緩和・弱体化 → 民間貿易の展開 → 海賊の横行
- ③ 微兵制廃止・地方分権化 → 中央集権的大規模常備軍の消失
→ 外征軍の編成困難

という変化を指摘できる。国家間の交渉が減少・消滅することで、国家間の利害が衝突することは無くなり、大規模な外征軍を派遣できる体制でもなくなったことにより、戦争は起きにくい状況となった。このような国際的な緊張緩和により、軍團兵士制の廃止、山城の停廢につながったのではないだろうか。

一方で、国家の対外管理の緩和・弱体化により、民間貿易の活発化と同時に海賊が横行しやすい環境が作られることになった。また、国家間の関係性の稀薄化は、相互に情報不足による疑心暗鬼を生み出すことともなった。

8世紀末以降の軍縮

- 792(延暦11)年 諸国の軍團制停廢(大宰府管内諸国など邊境は例外)、健兒置く
- 795(延暦14)年 壱岐・対馬以外の防人停止、兵士を辯成に充てる
- 797(延暦16)年 大宰府駒師停廢
- 799(延暦18)年 大宰府管内を除き健候停廢
- 804(延暦23)年 壱岐の防人停止(対馬にのみ残存)
- 813(弘仁4)年 大宰府管内七国の兵士減定(ほぼ半減)
- 826(天長3)年 大宰府管内の兵士を廃し、選士1720人・衛卒200人を置く

【講演②】

東アジア世界の変貌と鞠智城 —國際環境から見た9世紀以降の鞠智城—

榎本淳一（大正大学文学部歴史学科教授）

はじめに

鞠智城も含め古代日本の山城のほとんどは、7世紀後半の東アジアの激動・争乱という國際環境を背景に築かれたと考えられている。その東アジアの争乱も8世紀にはほぼおさまり、唐を中心に形成された國際秩序の下、國際關係も安定した。そのため、多くの山城はこの時期に必要性を失い、廃絶に向かったと考えられる。そうした中で、鞠智城は、中絶した時期があったとしても、10世紀半ばまで存続が確認される希有な山城である。なぜ、鞠智城は長く存在し続けたのか、その理由を古代日本の國際環境から考えてみたいと思う。

鞠智城が9世紀以降も存続した理由については、新羅海賊の來寇など、この時期の対外的な危機に対処するための防衛拠点として必要とされたとする説が有力である。しかし、それならば、なぜ他の山城は鞠智城と同じように存続しなかったのか、という問題について十分説明することはできないと思われる。また、考古学的な研究成果とも整合しないところがあるようと思われ、従来の説を再検討する必要があると考える。とはいって、鞠智城（菊池城院・菊池郡城院）に関する9世紀以降の史料は僅か4件であり、いずれも簡略なものである。史料的な制約による限界もあるが、文献史学の立場から、平安時代の鞠智城の実態に出来得る限り迫ってみたいと思う。

1. 東アジア世界の変貌

(1) 「東アジア世界」とは

西嶋定生氏によれば、「東アジア世界」とは、近代以前に存在した自己完結的な歴史世界の一つであり、中国に起源をもつ漢字・儒教・律令制・中国仏教という諸文化を共有する文化圏（東アジア文化圏）であるとともに、文化圏形成を促した「冊封体制」という中國中心の政治秩序で結ばれた政治圏でもあったとされる。さらに、この「東アジア世界」は唐の滅亡によって一旦崩壊し、10世紀以降、「東アジア交易圏」ともいべき經濟的國際關係が形成されたとする。この「東アジア世界」論は、古代日本を取り巻いた國際環境を説明する優れた歴史理論として、長く大きな影響力を有し続けている。しかし、研究進展により、様々な批判が出され、修正すべき点も少なくない。

私見によれば、「東アジア交易圏」は唐滅亡前の9世紀には誕生しており、「東アジア世界」の変貌は9世紀（その端緒は8世紀末）には顕著となっていたと思われる。ま

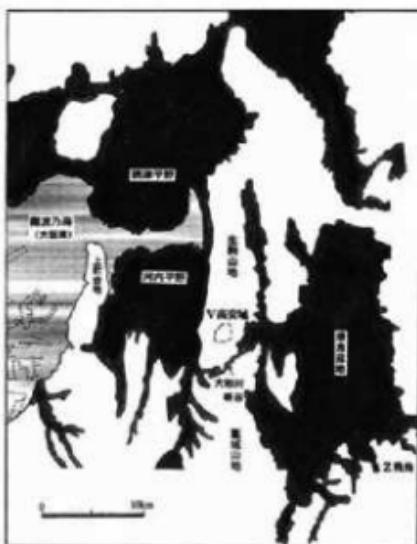


図3 高安城の位置

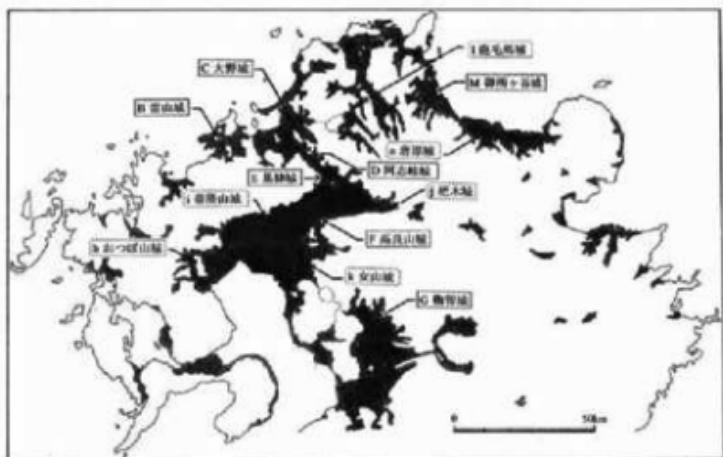
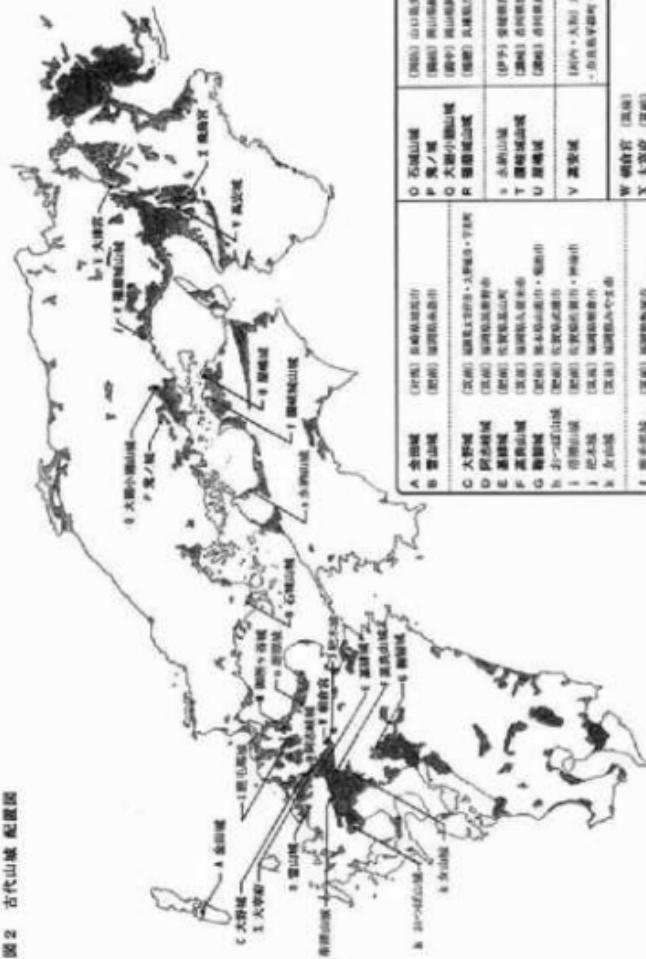


図4 北部九州域 古代山城配置図

图2 古代山城配置图



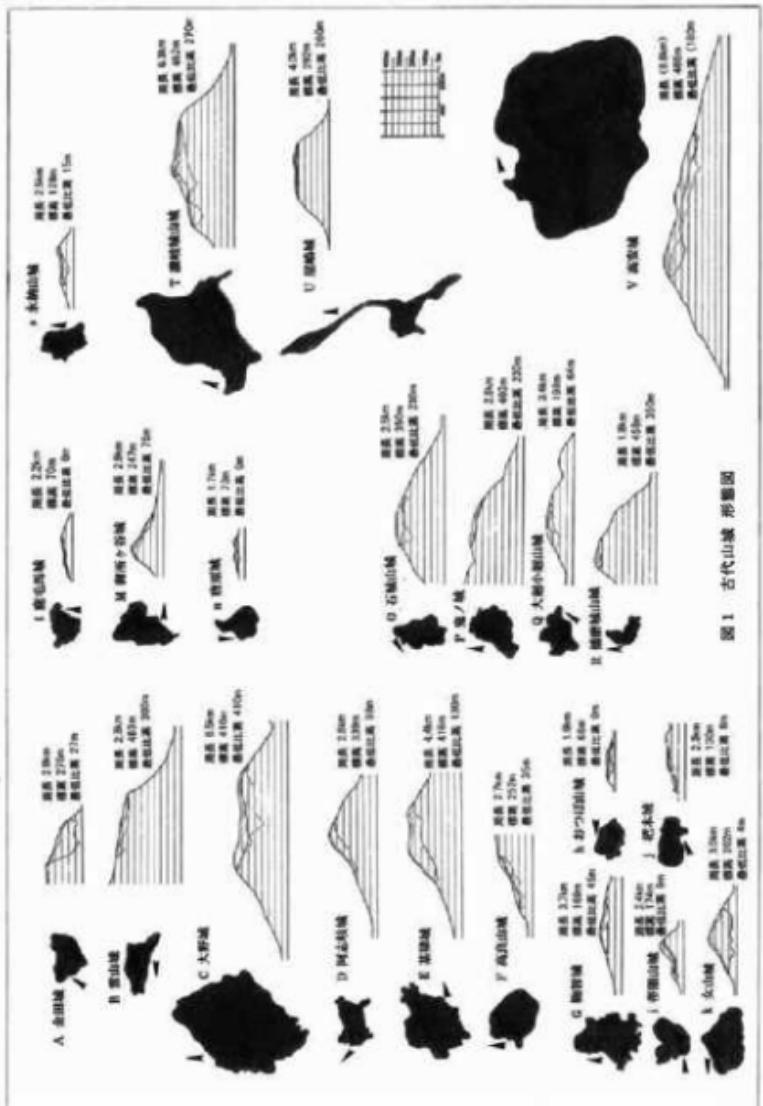


圖 1 古代山峰形圖

古代山城・都城関係略年表

年 代	事 項
589 崇峻 2	隋が中國大陸・南北朝を統一。
618 推古26	隋が滅び、唐が興る。
628 推古36	唐が中國大陸・天下平定。
630 舒明 2	熊島岡本宮へ遷都(飛鳥ではじめての王宮)。 第1次遣唐使の派遣。
645 皇極 4	大化の改新(飛鳥板蓋宮)。
孝德 1	難波宮へ遷都。
656 春明 1	後 飞鳥別本宮へ遷都。
660 春明 6	唐・新羅連合軍が百済を滅ぼす。
	大和朝廷は百済遺臣の救援を決定。
661 春明 7	5月、春明天皇、朝倉櫛広面宮に入る。 7月、天皇、朝倉宮にて崩御。
663 天智 2	百済西岸の白村江での海戦で唐に敗北。
664 天智 3	對馬島、佐岐島、筑紫国等に防 ^{ハシマ} と烽 ^{ハシマ} を築く。また筑紫に水城を築く。
665 天智 4	筑紫國に築城。筑紫國に大野、象(基跡)の二城を築く。
667 天智 6	3月、近江・大津宮に遷都。 11月、倭 ^{ハサカ} 國に高安城、飯吉國山田郡に屋崎城、分尾國に金田城を築く。
668 天智 7	中大兄皇子、天皇に即位(これまででは稱制)。 唐軍、高句麗を滅ぼす。
(668 or 669)	唐が倭國を征伐するとしながら、内実は新羅を討伐しようとしているとの情報が伝わる。
669 天智 8	平臣(藤原)謀反、没す。
670 天智 9	新羅・唐の間で戦争(羅唐戦争)はじまる(～676)。
671 天智 10	高安城修理。また長門城一、筑紫城二を築く。
	百済亡命人の達卒・谷都普皆らに兵法での貢献に対し叙位する。
	新羅軍、旧百濟領で唐軍と戦う。
	11月、唐使・郭務惊ら二千人、筑紫に至る。
	12月、天智天皇、崩御。
672 天智 11	5月、唐使・郭務惊ら率団。 6~8月、壬申の乱。
	新羅軍、高句麗遺軍とともに唐軍と戦い、勝ち、負けを繰り返す。
673 天武 2	大友人皇子、後 飞鳥岡本宮にて天皇に即位。
676 天武 5	唐、安東都護府を東東に遷し、朝鮮半島の統治を新羅に認める。
694 持統 8	藤原京遷都。
698 文武 2	大宰府に命じて、大野、基跡、龜智三城を整治させる。
699 文武 3	大宰府に命じて、三野、稻積二城を修させる。
710 和銅 3	平城京遷都。
719 善光 3	備後国安那郡荒城、翠田郡常城を停止する。

9. 古代山城の否定と超克－日本列島古代中央集権国家の構築－

朝鮮半島での動乱－唐による征服戦争－を受けて、中大兄皇子政権（＝天智政権）は、大和飛鳥そして近江大津の王都を防衛するために西日本要塞化政策を推進したのでした。また、そうした防衛のありかたは、いざれも百済の方式を導入したものでした。

百済を初め、新羅でも高句麗でも数多くの山城が築造されていました。しかし、それらは数百年の間くり返されてきた3国間での争闘には有効であったかもしれません、唐の大規模な軍勢に対しては、きわめて無力な存在であったのです。それにもかかわらず、天智天皇とその政権は百済式防衛方式の実現に全力を傾注しますが、これは天智政権の決定的な失敗であったというべきです。日本列島は唐の攻撃から防衛するための懸命の施策であったことは間違いないでしょう。しかし、方法を間違っては、守るべきものも守りえません。このままでは、日本列島は唐に容易に蹂躪されかねない、という深刻な危機感を抱いた人々がいたと、私は考えています。それが大海人皇子とその勢力だったのです。

672年の壬申の乱の原因是、国家防衛策についての路線闘争であったとみます。天智政権の推進した西日本軍事要塞化策では、唐の軍事的侵略に対して有害無益であるとの判断にたって、大海人皇子側の勢力が天智政権の排除を断行したのではなかったでしょうか。大海人皇子は、中臣（藤原）鎌足の669年の死を契機にして、国防政策の大転換を図る決断をしたのだと思います。

大海人皇子とその勢力は、壬申の乱を通じて天智政権側の排除を敢行し、飛鳥に王宮を移します。673年正月、大海人皇子は天皇に即位します。天武の新政権は天智政権のとった防衛施設構築路線を放棄し、列島規模での中央集権国家体制建設推進をいっそう加速させるのです。

朝鮮半島では、668年に高句麗が唐・新羅連合軍の攻撃により滅亡します。そしてその後から、唐と新羅の間で軍事的衝突がはじまるのです。新羅は朝鮮半島での霸權を得るために唐の軍事力を借りたのでしたが、アジア地域全体の華夷秩序の構築を至上目的とする唐が、なんの利得もなく軍隊を送り犠牲を払うわけがありません。ただ、唐は西南に接する強い軍事国家であった吐蕃の脅威が増大したこと、676年に至り、朝鮮半島の制圧を断念します。しかし、新羅が全権を掌握したのではなく、あくまでも唐に服属する形で国家としての存続を認められたのでした。

したがって、壬申の乱（672年）直後の天武政権発足の時点では、唐の日本列島侵略という危機は依然として継続していました。また676年の唐軍の朝鮮半島撤退後も、日本にとって、唐がいつまた侵略の矛先を向けてくるか、油断できない状態であったことも忘れてはなりません。こうした緊迫した情勢の中、天武政権は古代山城築造事業を放棄し、以後、文武、元明政権にいたるまで日本列島中央集権国家体制の構築が進められたのです。この国家体制とは国防国家にはかなりません。702年の大宝律令の完成、710年の平城京遷都なども、国防国家を作り上げるための重要な歴史階梯だと捉える必要があります。

このように、日本古代国家は、6世紀末から7世紀代にかけて、中国大陆で勃興した隋・唐帝国が華夷秩序を作りあげようと、周囲の国々に対してとった軍事的征服活動に対応して構築されたものでした。古代山城も、そして鞆磐城の存在も、この大きな歴史のうねりの中でこそ、その意味を鮮明に理解することができるでしょう。（了）

7. 防人の真実

九州の防衛軍として玄界灘の沿岸や対馬に防人（さきもり・ボウジン）と呼ばれる軍隊の配備が開始されるのも、水城の築造と同じく、白村江の敗戦の翌年、664年のことでした。当初の防人が北部九州のどこに配属され、どのような軍事活動をおこなったのか、史書に記録するところはありませんが、北部九州あるいはその周辺の各要所に配備されたと想定することもでき、そうすれば、664年以降、西日本各地で進められた古代山城の築造工事をはじめ、山城以外の軍隊駐屯地の整備や軍事教練などにも、多くの防人の兵士達が携わったのではないかと考えます。

ところで、防人として北部九州に派遣された兵士の多くが、東国つまり関東地方を中心とする地方の青年たちであったことは良く知られています。その理由として、西日本地域の青年たちの多くが、朝鮮半島での戦争で戦死し負傷し捕虜となっていたので、兵士になる適齢期の男性が著しく不足していたから、東国から動員せざるを得なかったという見方があります。

では中央地域—畿内地域からの兵士動員はどうであったかといいますと、古代山城の中で唯一の近畿地方での古代山城である高安城は、先に述べましたように、最大規模に設定されています。ましてや、王都の周辺には大規模な防衛軍隊を配備していたに違いありません。つまり防人に東国の青年たちを動員したのは、西国での兵士適齢世代の欠如と、近畿周辺での王都防衛兵力の大規模確保の必要性ということが背景にあったのです。

国を挙げての、そうした大規模な土木工事を伴う国防事業は、664年から数年の間に集中して遂行されました。短時日のうちに大規模な山城を建設するには、多大な労働力と費用が必要であったと推測されますが、この壮大な事業の遂行にあたり、特段の抵抗や反抗の形跡は残されていません。外国軍隊の侵略により国家が失われ、人としての尊厳を剥奪され、他国に隸属することの悲惨さ、無惨さに対する恐怖感、拒否感などの強い危機意識を、当時の日本列島の人々が共有していたからだったのではないでしょうか。

8. 古代山城無益論

百濟の版図の中枢部であった忠清南道では 230 カ所の山城が確認されています（忠清南道 8214 ha・兵庫県 8396 ha）。また、660年に百済が滅亡した時、百済領内に多くの山城が存在していたことは、三国史記や日本書紀あるいは旧唐書などの記載からも知ることができます。

留意しなければならないことは、百済の領域にあったこれら多くの山城に課せられた役割は、泗沘都城（扶余）とそこに所在する王宮の主である百済国王を防護することであったという点です。しかるに、660年 6月 21 日に、新羅軍と唐軍が朝鮮半島西海岸で邂逅してから、唐・新羅連合軍による包囲攻撃で泗沘城が陥落する 7月 13 日まで 20 日余りです。しかも唐軍は 10 日以上、黄海を渡済した疲労を解くために休息をとったとされているので、百済を滅亡させるのに要した日時はわずか 10 日ほどでした。数多くの山城は、いったいどれほどの軍事的機能を果たしたのでしょうか。しかし、百済での山城群を基軸にした国家防衛方式は、唐の侵略軍の攻撃に対して、有効な軍事機能を発揮しえなかつたのです。

隊は山城だけでなく、平野部の各所にも配置されていたと考えるのが妥当でしょう。

(7)筑後平野西縁から北縁にかけて配置された3つの丘陵型山城の位置をみると、おつぼ山城は平野の西端、杷木城は東端、帯狭山城は基盤城とおつぼ山城の中間地点にあり、それぞれがほぼ等間隔になるような計画的な配置であったことを示している。役割については、最も重要な決戦に際して、(a)兵站物資の備蓄・補給基地の機能をもたせる。(b)朝鮮半島百済地域で多く見られるように、小規模ではあるが軍隊の集結場所。(c)みかけの軍隊集結場所として機能させる、といういすれかの戦略であったことが考えられる。

唐軍は海路進撃してくるのですから、兵器や食料などの補給つまり兵站が大きな弱点となります。それだけに、日本側としては地の利を最も有効に發揮させるためにも、十分な兵站戦略を構築しておくことが勝利のためには必須でした。丘陵型山城は、攻撃や防衛の拠点としては信頼感に欠ける地形と構造を示しています。山岳型山城と比べると、目立たない場所に立地していることも考え合わせれば、兵站基地としての役割を想定することに、より當然性があるでしょう。

軍略【2】鞠智城の役割

このように考えますと、筑後平野周縁山城群の南方の、山地、丘陵地帯を間において隔てた地点に設定された第3類型である鞠智城の役割は、おのずから鮮明になってきます。すなわち、

(8)筑紫野谷での攻撃、さらに筑後平野での決戦で日本側が敗北した場合、敗残兵達が退避する場所であり、そこで兵力を再結集して、おそらくすでに東行を再開した唐軍を背後から追撃する体制を構築するための拠点。

つまり鞠智城は九州迎撃作戦の最後の砦として設定されたのです。城壁で囲まれた郭内にはかの山城にはない広い平坦地が確保されていることは、こうした機能を裏付けるものです。また、ここが侵略軍による攻撃で陥落するという状況に陥った場合、残兵は背後に控える九州南部の広大な山野に難を逃れ、再興を期すことが可能な立地条件下にあります。

(9)文山城は、高良山城および筑後平野の戦闘と撫順城をつなぐ中間基地かつ兵站拠点の機能をもつ。

軍略【3】瀬戸内海に侵入する唐軍への攻撃

(10)九州北東部の鹿毛馬城・御所ヶ谷城・唐原城は福岡平野、筑紫野谷、筑後平野での敵軍殲滅が不成功であった場合、敵の軍隊が瀬戸内海に侵入する経路にあり、九州内でできるだけ敵軍を撃滅させる戦略に供する。

(a)御所ヶ谷城（豊前）は攻撃部隊の集結拠点。

(b)鹿毛馬城（筑前）と唐原城（豊前）は御所ヶ谷山城軍の後背地での兵站拠点。

(11) (10)の作戦で敵軍に十分な打撃を与えられなかった場合、瀬戸内海を敵軍が東進する際に南北両岸から攻撃するための軍隊集結地点。水軍や平野部に配置された軍隊と連動した迎撃戦を想定していたと考える。

(a)瀬戸内海北岸一石城山城（周防）・鬼ノ城（備中）・大脇小畠山城（備中）・福都城山城（播磨）

(b)瀬戸内海南岸一永納山城（伊予：兵站拠点）・誰岐城山城（讃岐）・壓崎城（讃岐）

軍略【4】大和最終防衛体制

(12)高安城は、王都飛鳥に敵侵略軍が侵入することを防衛する戦略の最終軍事拠点（既述）

(13)飛鳥王都周辺での防衛軍隊の配備

(3)高安城の軍略 こんにち確認されている 22 カ所の古代山城のうち、最大の規模を示すのは高安城(V)です。城壁の長さが約 8.8km あり、次に規模の大きい大野城や瀧ヶ崎山城の約 6.5km にくらべても格段に大きいのです。高安城は大阪府と奈良県境の南北に延びる生駒山地の南端に位置しており、すぐ南に大和川の峡谷を見下ろす地点にあります。

唐の大規模軍隊が瀬戸内海を東航し、大阪湾岸に上陸して大和飛鳥を攻撃するには、大和川の峡谷に沿って進上するのが唯一の経路です。つまり、高安城は唐軍が奈良盆地に侵入する局面で、狭隘な大和川峡谷で唐軍の行軍を阻害し、殲滅するためにもっとも効果的な場所に設定されたものであることは間違いません。

かりにこの大和川峡谷での攻撃が不首尾に終った場合には、最終決戦地は奈良盆地、飛鳥の周辺ということになります。つまり、飛鳥王都防衛にとって、高安城は最後の攻撃拠点なのであり、そこを最大規模に設定したことは当然のこととして理解できるでしょう。

(4)筑紫野谷の軍略 高安城の立地条件と共に通する古代山城があります。大野城(C)、阿志岐城(D)、基跡城(E)の3城です。大宰府の存在を度外視すれば、3つの山城が福岡平野と筑後平野を結ぶ幅が狭まつた谷地形(これを筑紫野谷と呼びましょう)を扼す位置にあることが明瞭です。この筑紫野谷を南に抜けると、筑後平野がひろがり、その正面に高良山城が配置されています。

6. 山城群の軍略

唐侵略軍としては、九州に上陸することなく瀬戸内海に進軍して飛鳥王都を攻撃するのがもっとも効率的な軍略でしょう。しかし、その場合、唐の大軍が兵力を損耗することなく直接王都を攻撃することになり、日本側として防衛上、きわめて危険な状況となります。あるいは、唐軍の軍略としては、いったん九州北部に上陸し、態勢を整えるという方針を選択する可能性があるとの判断もあります。

日本側として期すべきは、まず九州で唐軍に最大限の打撃を与えることです。かりに唐軍が北部九州に上陸せずに東行しようとしても、九州に駐屯している軍隊が唐軍の背後を攻撃する態勢をみせれば、唐軍は九州に上陸し、迎撃戦力の殲滅作戦を実行せざるを得ないでしょう。

日本側として組み立てた、山城群を主軸とする軍略は、およそ次のようであったと考えます。

軍略【1】北部九州での迎撃

- (1)対馬・金田城は、敵軍の日本列島への侵入を察知し、情報を本土へ伝達するための軍事情報拠点。
- (2)雷山城(筑前)は、北方つまり玄海灘への眺望にすぐれた地形にあり、敵船団の監視城塞としての役割を担う。
- (3)上陸適地である福岡平野の南端に水城を設けて設定し、その後に控える大規模迎撃戦力の存在を侵略軍に察知させる。
- (4)迎撃軍の主力は筑後平野に置く。
- (5)侵略軍が筑後平野に進路しようとするとき、まず水城で迎撃し、さらに筑紫野谷で大野、阿志岐、基跡の3山城を節点とする攻撃を加える。
- (6)それでもなお、侵略軍に十分な打撃を与え得ない場合、筑後平野に撤き出し、そこを決戦の場とする。

^{***}女山城(?)が朝倉宮を防護しているように分布しているとみる点を重視するのですが、わずか2ヶ月余りの滞在であったことを踏まえますと、この説は現実的でないといえましょう。

(2)天武朝以降まで築造継続説の非 先に述べましたように、古代山城築造が天武朝以降、文武朝のころまで続けられるとみるが最近の主潮のようです。しかし、文献史料の上でも、発掘調査の成果の上からも、その判断を実証する根拠は、実はありません。

(3)大宰府防衛説の非 北部九州の古代山城については、大宰府防衛のためのものとの理解があります。大野城、阿志岐城、基跡城は、まさに大宰府を囲む位置にあります。また大野城の築城に先立つ664年には、大宰府のすぐ西北に、大規模な防壁である水城が築造されています。

大宰府に関しての発掘調査では、最も古い段階の遺構群は7世紀後半期としか捉えられていません。つまり、水城が築造された664年、そして大野城や基跡城が築造された665年時点にあって、大宰府が政治的軍事的に重要な施設として、つまり防護されるべき施設として存在していた確証はないのです。なによりも、大宰府防衛目的であれば、水城は最終防衛線であることになります。そのすぐ傍に重要拠点を設定することが、軍事常識に違うとは考えがたいのです。

5. 古代山城を正しく理解する

以上のように考えますと、22の古代山城は、665年から670年頃までの限られた期間に集中的に築造されたとみる必要があります。そうとしますと、当然のこととして、それぞれの山城は、一体的な軍略のもとに各地に配置されたと考える必要があります。

(1)唐の軍事的侵略という危機 663年の白村江の敗戦直後、中大兄皇子政権が、そして日本列島全体が危惧したのは、百済の征服を遂行した唐が、華夷秩序をより拡充するための軍事的行動として、さらに日本列島を攻略する危険性がきわめて現実化したことでした。

唐が日本列島に侵攻する場合、その最終目標は、日本王権の所在地である大和飛鳥の都であり、天皇(大王)の捕捉ないし殺害をもって、日本の国家体制を壊滅させ、日本列島を唐に服属させることにあります。当時、唐の侵略に対する国防の最高責任者は中大兄皇子でした。

中大兄皇子は661年の母・齊明天皇の没後、当然の後継者でしたが、667年の近江・大津宮遷都の翌年正月に、ようやく天皇位に即位します。この8年間の天皇不在という異常事態の理由は、國家の危機に直面している状況の中で、即位の儀式に費やす時間的余裕はなく、その間、もっぱら国防施策の推進に専念する必要があったからでしょう。

(2)古代山城防衛網の構築 古代山城の築造は、唐の侵攻に対抗するための最重要の防衛策の發動でした。660年の百済攻撃に際して、唐は13万の軍勢を海路、百済に送り込み、新羅軍4万と連合して攻略戦を展開しました。その結果、最終攻撃目標である王都・泗沘城(扶余)は陥落し、国王、皇太子以下1万2千人余りが拘束され、京都洛陽に運搬されました。また多くの百済人が唐の追及を逃れるべく日本列島に渡来しました。その人々は大和政権の庇護下にはいり、日本書紀では帰化人と呼称されます。中大兄皇子政権が対唐防衛策を講じる際に、長年にわたる新羅、高句麗との戦役に携わり、さらに唐の侵略軍隊と対峙してきた百済の亡命帰化人たちの軍人や軍事技術者の協力を求めたことは、日本書紀に明記されているところです。

2. 中華帝国による征服戦争—その動因

まず理解しておかなければならないことは、なぜ唐は百濟を滅ぼし、日本列島を征服しようとしたのか、その理由についてです。

それは、唐が華夷秩序に基づいた国際秩序を構築しようとしたからなのです。

唐（そして隋）は、漢の滅亡以来、4百年近く続いた悲惨な分裂抗争の時代を終結させ、広大な中華大陸を統治するための大義名分として「華夷思想」を重視していました。華夷思想は、中華帝国こそが世界の中心であり、文明の頂点に立つ存在であるとする中華思想という、特定民族至上主義（エスノセントリズム）に基づく国家統治思想です。

中華皇帝の絶対的責務は、周囲の野蛮な国々に文明の恩恵を授けることであり、それにより文明化した国々は中華皇帝に朝貢する。これによって、皇帝は中華帝国の統治権力を獲得し、維持することができる。したがって、服属する国が多ければ多いほど皇權は強大なものとなり、逆に一国でも服属を拒むとなると皇帝の権威は失墜し、統治権力が弱体化する。その結果、国内の安定が危うくなり、ひいては国そのものも滅びかねないというもので、華夷秩序は当時重視された唯一の統治思想の表現でした。文明の恩恵を授けるとはいえ、実態は武力による恫喝そのものでした。周辺の諸国家にとっては、強勢かつ横暴きわまりないことであったことは間違いないありませんが、これが歴史の現実であったのです。

3. 古代山城の分布状況と類型

(1) 古代山城の分布状況　　こんにち古代山城として確認されている遺跡は 22 カ所あります。そのうち半数以上の 14 の山城が九州北半部にあり、瀬戸内海両岸地域に 7 カ所、近畿の大坂府・奈良県境に 1 カ所分布しています。九州での分布状況をみると「大宰府」の周囲、筑後平野の周囲に山城が集中している様相をみてとることができます。

(2) 古代山城の 3 類型　　22 カ所の古代山城のうち 21 の山城は、比較的高い山の中腹以上に城壁を巡らせる「山岳型山城」と、低い丘陵の周縁に城壁があり、一部は周囲の低平地とほとんど同じ標高にまで城壁がおよぶ状況をみせる「丘陵型山城」との 2 つの類型に、明確に分別することができます。

そして第 3 の類型として区別しなければならないのが、^{山岳}「櫛智城(G)」です。おおむね丘陵型に近いのですが、やや規模が大きく、なによりも内部にかなり広い平坦地が確保されているという、ほかにはない、きわだった特徴があります。

4. 諸説の“非”

(1) 齊明朝築造説の非　　齐明天皇の政権は、660 年の百濟滅亡後、百濟復興の援軍を派遣すること決定します。みずから軍隊を率いた齐明天皇は、翌 661 年 5 月に、筑後の朝倉宮に入りますが、7 月 24 日に朝倉宮で崩御します。以後、朝倉宮が政事軍事の中枢であった形跡はありません。

齐明朝築造説では、筑後平野の周縁の把木城(I)、^{山岳}帯隈山城(I)、おつぼ山城(h)、^{山岳}高良山城(f)、

【講演①】

古代山城の真実 —物語は、なんのためにつくられたのか。—

井上和人（明治大学大学院文学研究科特任教授）

1.はじめに

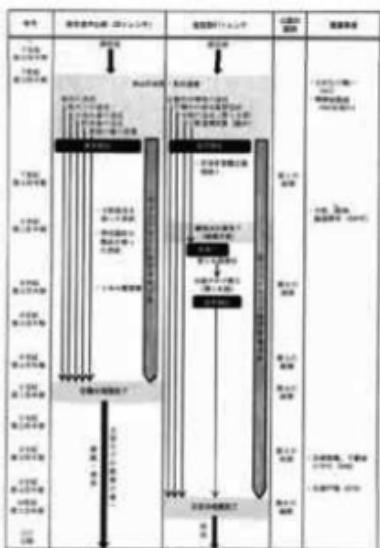
古代山城とは、なんだったのか。明治時代以来の長い研究史の中で、様々な理解が示されてきました。近年では、やや異論もあるようですが、軍事的な役割を果たしたもので、築造された時期は、おおむね7世紀後半期であるとの共通理解がえられているところです。ただし、古代山城について鮮明な歴史像を描くには、いくつかの見解の相違があり、むしろ研究は混迷した状況にあるように思います。なお、古代山城築造について史書に記録されているのは、日本書紀の天智（称制）4年（665）の大野城、基陣城などが最初で、天智9年（670）の「長門に城を一、筑紫に城を二築く」の記事が最後です。

日本列島で古代山城が造られはじめた年代について、663年に朝鮮半島の白村江での戦いで、日本が唐に完敗した直後、唐が日本に侵略しかねない情勢のもとで開始されたとみる研究者達がいます。白村江の敗戦に先立つ660年に、朝鮮半島三国の一つであった百濟が、唐と新羅の連合軍に滅ぼされました。從前から同盟関係にあった日本が、百濟再興の救援軍を派遣することになりますが、661年に、大和政權は齊明天皇みずから援軍を率いて大和飛鳥から九州へとたどり、筑後平野に新造された楠倉櫛広庭宮へ入るという歴史の流れの中で、筑後平野周辺の山城群がまず作られたとみる研究者も少なくありません。

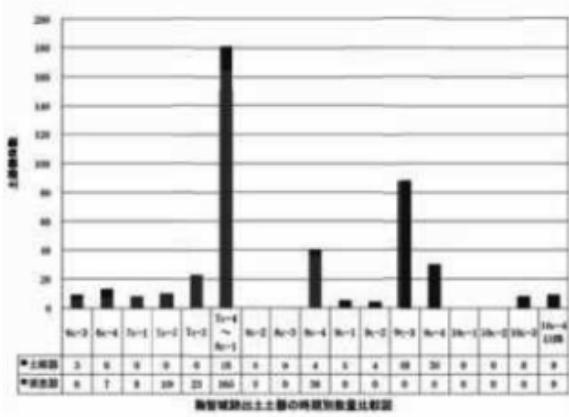
古代山城がいつまで作られてきたかについても、見解の相異があります。最近の研究の潮流といいますか、風潮では、山城築造は日本書紀にみられる天智朝（～671年）だけではなく、天武朝（672年～）さらには文武朝の頃（700年前後）にまで続いているとされています。そして、天武朝以降に築造された山城は、天智朝が対外的防衛用であったのに対し、国内地域勢力に対する国家権力示威を目的としたものであったというのです。

古代山城に期待された役割についても、最近でもなおいくつかの異なるみかたがあります。例挙しますと、“緊急時の逃げ込み用の城”“白村江直後の緊迫した情勢下で交通の拠点に築かれたランドマーク的存在”“天皇・中央政府の意志のもとに構築された、すぐれて政治的な記念物”などなどです。このようにみてきますと、築造年代、築造意義とともに真相はいったいなんであるのか、という疑問がわいてこざるをえません。

それは、1300年前の遙かな時の彼方に、茫洋と闊んでしまったからなのでしょうか。いえ、私は、そうではないと考えます。これまでの研究の積み重ねの中で、悪い込みや過大評価、あるいは既往の説や特定の歴史観などにしばられていたのではなかったか、と思うのです。以下、これまで語られることのなかった古代山城の真実をお話いたします。



第7図 貯水池跡の変遷



第8図 出土土器量の変化

面期が存在する。最初の面期は7世紀第4四半期から8世紀第1四半期であり、土器の出土量が最大である。この時期は概ね鞠智城II期であり、城を修復した時期（698年）と重なる。鞠智城での活動が盛んな状況を反映していると考えられる。

第2の面期は鞠智城III期の期間内である8世紀第2・第3四半期に発生する。土器が全くといっていいほど出土していない。鞠智城で人の存在を感じられない。

第3の面期は8世紀第4四半期である。土器空白期の直後であり、再び土器が使用される。土器の主体は須恵器である。この時期は鞠智城IV期の初めの面である。

最後の面期は9世紀第3・第4四半期におこる。9世紀第3四半期の出土量は城内で二番目に多く、土器だけ使

用されている。この時期は鞠智城IV期の終末に該当する。

【引用・参考文献】

熊本県文化財調査報告第276集『鞠智城跡 II - 鞠智城跡第8～32号調査報告 -』熊本県教育委員会 2012

南野 雄「鞠智城の遺構の特徴と特異性－建物の基礎構造と貯水槽を中心に－」『鞠智城跡 II - 論考編 I -』熊本県教育委員会 2014

(3) 貯水池跡の変化

貯水池跡は建物が集中している長者原地区の北側谷部にある。自然地形を巧みに利用しながら人工的な工事を行い、湧水を蓄めている。貯水池跡の水成粘土層の広がりは約5,300 m²もある。貯水池跡は飲料水を確保するだけでなく、建築材の貯木器としての役割も果たしているため大規模である(第1図)。

池頭付近に飲料水を汲むための木組造構がある。この造構から北西方向に離れた箇所に貯木器がある。貯木器には、柱や桁等の大型建築材と木舞(壁の下地等)や臺等の小型な建築材・材料とを分けて水中保管している。池の内部を機能的に使い分け、迅速な建築や補修に備えていたと想定できる(第6図・写真10)。

上記の汲み器や貯木器を活用するには、定期的に堆積土を除去する等のメンテナンスが必要である。木組造構・建築材等を包含する①層が他の層と比べて、凹凸が著しく、層の厚さが薄い。この①層の状況は、堆積土を除去する等のメンテナンスを行った痕跡と考えられる。

この貯水池の維持・管理活動がされなくなり、8世紀の終わり頃には①層の堆積が始まり、9世紀の初め頃には堆積が完了し、池中央部の機能が停止したと考えられる。また、池尻部では10世紀近くまでは池の維持・管理活動が行われていたが、その後、行われなくなり完全に放棄され、埋没したと想定できる(第7図)。

(4) 出出土器量の変化

輪智城跡からはコンテナ約240箱の須恵器・土器が出土している。これらの土器の時期別出土量を考慮し、その結果を第8図に示した。

第8図を見ると、出土量が大きく変化する



写真10 貯木場跡B地区(小型建築材)



第6図 貯水池イメージ

(イラスト:早川和子)

IV期の建物の中で、礎石・据立柱併用建物跡は特異なものである。海野聰氏の論考によれば、次のように考察されている。礎石・据立柱併用建物は7世紀末頃から出現した。この建物は古代の宮殿、地方官衙、地方寺院等で34例が確認されている。これらの建物について、礎石建物と据立柱建物の柱の大きさに着目して分類がされている。梅智城の11号・12号建物跡は柱の大きさがほぼ等しく總柱型である2-Aに該当する。2-Aは床の上にさらに柱を立てる建物と考えられる。上部構造と下部構造が分離した倉や管柱（二階建て以上の木造建築）の様と推察されている。さらに、11号・12号建物跡の礎石部分は桁行4間、梁行3間の總柱である。この規格は梅智城の礎石總柱建物の中で最も大きい平面規模である。この点を考慮すると、標準的な礎石總柱建物の周囲に据立柱が廻った構造と考えられる（海野2014）。



写真8 11号建物跡



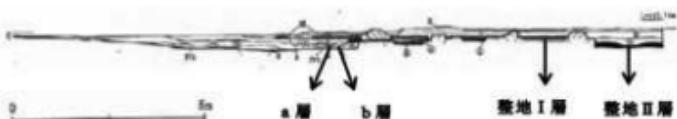
写真9 56号建物跡

V期の建物跡は、總柱の礎石建物跡5棟（45号・46号・47号・48号・56号）である。これらの中でも、建物の建て替えが良くわかるのが56号建物跡である（写真9）。

56号建物跡では土層を観察するために部分的に深掘りした。トレントC-D地点の土層断面を観察した結果は次の通りである。

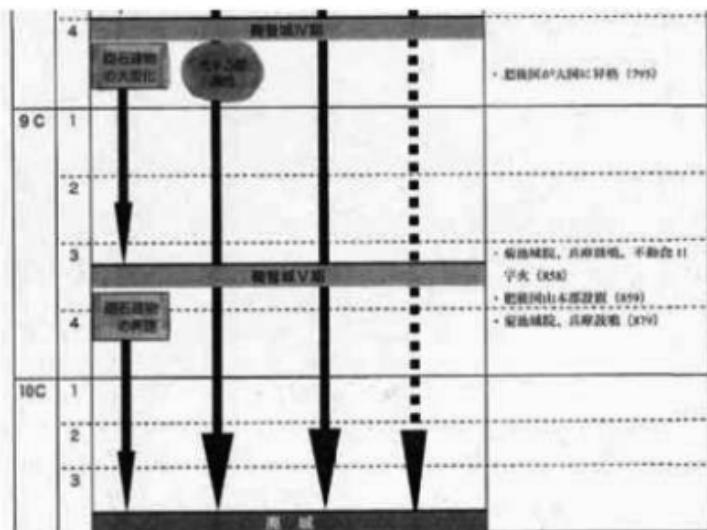
建物を建てるために整地した層が二面ある。整地I層は56号建物に伴うものである。この整地層を掘り込んで礎石を据えている。整地I層の下位にある整地II層は、56号下層建物に伴うものである。この整地層の端部に堆積したa層・b層は56号下層建物の時期と判断できる。このa層・b層には焼土や炭化米等の炭化物が多量に含まれる。このことから、56号下層建物は火災で焼失したと考えられる（第5図）。

この建物に号数を付けていないのは、建物全体の確認をしていないからである。この建物全体を検出するには、56号建物に伴う層を取り除かなければならない。そうすれば、56号建物を破壊することになるので、保存の必要性から全面の発掘調査を行っていない。



第5図 56号建物土層断面図

る(第4図)。



第4図 IV期とV期の様子

(2) 建物跡の変化

IV期の建物跡には次のものがある。側柱の掘立柱建物跡2棟(60号・61号)(写真6)、純柱の掘立柱建物跡1棟(13号)、純柱の礎石建物跡9棟(20号・21号・36号・49号・50号・59号・64号・67号・72号)(写真7)、礎石建物の可能性が高い建物1棟(56号建物の下層で部分的に礎石を確認した建物)、純柱の礎石・掘立柱併用建物跡3棟(11号・12号・29号)(写真8)である。



写真6 60号建物跡



写真7 59号建物跡

【鞠智城V期（9世紀第4四半期～10世紀第3四半期）】

V期は鞠智城の終末期である。城内の建物数は減少し、城の機能は低下するものの、大型の礎石建物を火災後に建て直すなど、食糧等の備蓄機能は存続する（第3図）。



第3図 建物遺構の変遷

今回のシンポジウムの話題の焦点は平安時代である。それで、対象となるのは鞠智城IV期と鞠智城V期である。この時期では、建物跡と貯水池跡で、大きな変化が認められる。その様子を概観する。

IV期では、礎石建物は大きな礎石建物に建て替えられる。礎石建物の大型化が見られる。また、V期では火災で焼失した礎石建物を同じ場所で再建している（第4図）。

貯水池跡の中心部では、IV期になって、飲料水の水汲み場としての機能をもつ木組造構や建築材を水中貯木していた貯木場の上部に土が堆積し、その機能を果たせなくなっている。

II期は物智城の隆盛期である。「L」字形に掘立柱建物を配置した管理棟的建物群とそれらを取り囲む区画溝が出現する。建物群を取り込んだ区画溝はこの箇所だけのものである(第2図)。この遺構群の南側に二棟の八角形建物や総柱建物等を配置するなど、城内施設の充実が図られる。土器の出土量はこの時期が最も多く、城の管理・運営に多くの人員が配置されたものと考えられる(写真4・第3図)。

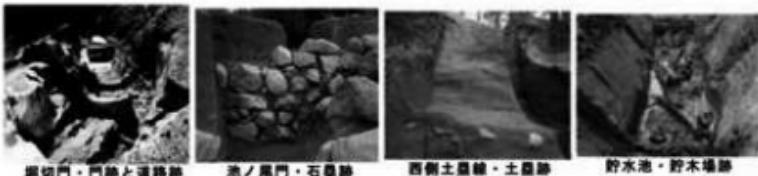


写真3 物智城I期の遺構



第2図 管理棟的建物群と区画溝

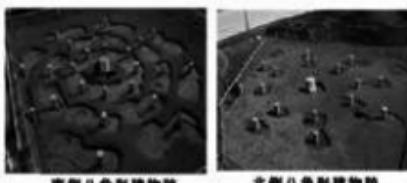


写真4 物智城II期の遺構

【物智城III期(8世紀第1四半期後半～第3四半期)】

III期は物智城の転換期である。城内の建物配置はII期を踏襲しながらも、総柱建物が小型礎石を使用した礎石建物に建て替えられる(写真5)。出土土器の空白期に当たることから、城の存続上必要な最小限度の維持・管理がなされていたと考えられる(第3図)。



65号建物跡(次の物智城IV期の礎石建物跡と重複しており、小型の礎石のほうが65号建物跡)

写真5 物智城III期の遺構

【物智城IV期(8世紀第4四半期～9世紀第3四半期)】

IV期は物智城の変革期である。管理棟的建物群の消失や貯水池中央部の機能低下がある一方、III期の礎石建物が大型礎石を使用した礎石建物に建て替えられ、食糧等の備蓄機能が主体となる。これら建物群は、当該期末に焼失しており、『文徳実録』天安2(858)年の不動倉火災との関連が想定される(第3図)。

遺物としては、須恵器、土師器などの土器や単弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする瓦類、建築用材、木製品に加え、『秦人忍口五斗』銘の付札木簡や百濟系の銅造菩薩立像などが出土している（写真2）。

継続して行った確認調査の成果が認められ、城跡の範囲を包括する約64.8haが平成16年に国史跡として指定された。



写真2 駒智城跡の出土遺物

（1）駒智城跡の時期区分

総括報告書である『駒智城跡II』熊本県教育委員会（2012）の中で、72棟の建物跡について、遺構の重複関係や建物方向等を検討して、時期区分や変遷を考察している。

さらに、城としての役割・機能変化についても検討を加え、7世紀後半から10世紀中頃まで存続した駒智城跡のI期～V期の変遷過程を下記のように明らかにしている。

【駒智城I期（7世紀第3四半期～第4四半期）】

I期は駒智城の創建期である。創建年代は、『続日本紀』文武2（698）年に「繕治」した大野、基跡の2城の創建（665）とほぼ同時期に推定している。外郭線上に3箇所の城門、土塁線、城内に掘立柱建物、貯水池などを緊急的に整備し、城としての最低限の機能を備えた段階と考えられる（写真3・第3図）。

【駒智城II期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）】



第1図 駒智城跡全体平面図

【報告】

平安時代の鞠智城跡

西住欣一郎（熊本県教育委員会）

1 鞠智城跡の位置と環境

鞠智城跡は、東アジア情勢が緊迫する7世紀後半、朝鮮半島南西部において開戦した白村江の戦い（663）に敗れた大和朝廷が、唐・新羅連合軍の日本への侵攻に備えて西日本各地に防衛拠点として構築した古代山城の一つである。現在確認できている古代山城の中では、最も南に位置している。

その城跡は、熊本県の北部、阿蘇北外輪山から有明海へと西流する一級河川菊池川（総延長72km）の中流域、山鹿市、菊池市の市境に位置する。鞠智城跡は菊池川河口から直線距離で約27km遙った箇所に存在する。県境の筑肥山地の主峰、八方ヶ岳（標高1,052m）南西麓に形成された丘陵地帯の南端近く、標高約145mの台地状の丘陵上（通称；米原台地）に、鞠智城は立地している。その南には、菊池川沿いに発達した肥沃な菊鹿盆地が広がる。この地は、古代律令制下、肥後國菊池郡に属し、城跡周辺に残る「木野」地名から、

『和名類聚抄』にみる「城野郷」に比定されている。

鞠智城跡の城域については、古くから広域説、狭域説が論じられてきたが、現在では、狭域説の範囲の中で、西側・南西部の土塁線と南東部・東側の崖線で区画された周長約3.5km、面積約55ha、標高約90~171mの範囲を城域としている。その範囲は広域なため、山鹿市と菊池市に跨っている。（写真1・第1図）。

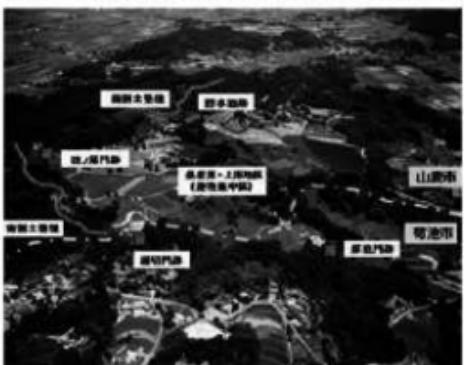


写真1 鞠智城跡全量（南側上空より）

2 発掘調査の成果

鞠智城跡の発掘調査は、昭和42（1967）年度に第1次調査を行い、平成22（2010）年度までに第32次の調査を実施した。その調査成果は『鞠智城跡II』（2012）熊本県教育委員会の報告書に総括されている。主な成果は次の通りである。

遺構としては、古代山城では唯一の八角形建物跡をはじめとする72棟の建物跡や約5,300 m²の規模をもつ貯水池跡が確認されている。また、外郭線上の三箇所には城門や門礎石が検出されており、版築工法による土塁跡も存在している（第1図）。

鞠智城・東京シンポジウム
鞠智城の終焉と平安社会
～古代山城の退場～

日時：平成29年1月28日（土） 13:00～17:30

場所：明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール（東京都千代田区神田駿河台1-1）

主催：熊本県、熊本県教育委員会、明治大学日本古代学研究所

後援：明治大学博物館、明治大学社会系連携機構、熊本県文化財保護協会

日 程

12:00 開 場

13:00 開 会

あいさつ 熊本県教育長 宮尾 千加子

明治大学名譽教授 吉村 武彦

来賓挨拶 衆議院議員 木原 稔

13:20 報告 13:20～13:50

「平安時代の鞠智城跡」

西住 欣一郎（熊本県教育委員会）

13:50 講演① 13:50～14:30

「古代山城の真実 —鞠智城はなんのためにつくられたのか—」

井上 和人（明治大学大学院文学研究科特任教授）

14:30 休憩

14:45 講演② 14:45～15:25

「東アジア世界の変貌と鞠智城—国際環境から見た9世紀以降の鞠智城—」

榎本 淳一（大正大学文学部歴史学科教授）

15:25 講演③ 15:25～16:05

「平安時代の大宰府と古代山城」

松川 博一（九州歴史資料館学芸員）

16:05 休憩

16:20 パネルディスカッション 16:20～17:30

コーディネーター 佐藤 信（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

パネラー 井上 和人

榎本 淳一

松川 博一

西住 欣一郎

17:30 閉 会

※1/23～2/3「熊本地震と文化財（パネル展）」を開催（アカデミーコモン1F展示スペース）

資料編

鞠智城東京シンポジウム2016
成果報告書

鞠智城東京シンポジウム二〇一六 成果報告書

鞠智城の終焉と平安社会

（古代山城の退場）

発行年月日 平成二九（二〇一七）年三月三一日

編集・発行 熊本県教育委員会

〒八六二一八五七〇

熊本市中央区水前寺六丁目一八番一号

電話 〇九六一三八三一一二（代表）

サンコー・コミュニケーションズ株式会社

印 刷

発行者：熊本県教育委員会
所屬：装飾古墳館
発行年度：平成28年度

この電子書籍は、鞠智城の終焉と平安社会 鞠智城シンポジウム成果報告 2016 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城の終焉と平安社会 古代山城の退場

鞠智城シンポジウム成果報告 2016

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本中央区水前寺6丁目18番1号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日